

高齢者の第三の場としての公立図書館  
—つくば市立中央図書館を事例として—

筑波大学  
図書館情報メディア研究科  
2019 年 3 月  
FENG YUTING

## 目次

1. はじめに .....	1
1.1 研究背景と研究目的 .....	1
1.2 先行研究 .....	3
1.2.1 場としての図書館に関する議論 .....	4
1.2.2 居場所としての図書館に関する議論 .....	5
1.2.3 第三の場の概念を図書館に適用する研究 .....	6
1.3 論文構成 .....	7
2. 日本の高齢者の現状と図書館 .....	10
2.1 超高齢社会日本と高齢者の姿 .....	10
2.2 公立図書館の位置づけと機能 .....	12
2.3 利用者として的高齢者と図書館 .....	14
2.4 高齢者の第三の場としての公立図書館 .....	17
2.5 本章のまとめ .....	17
3. 「第三の場」とは .....	20
3.1 オルデンバーグによって提唱された第三の場 .....	20
3.2 先行研究における第三の場への捉え方 .....	22
3.3 本研究における第三の場 .....	23
3.4 本章のまとめ .....	24
4. 公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性に関する調査 .....	26
4.1 つくば市及びつくば市立中央図書館の概要 .....	26
4.1.1 つくば市の高齢化の現状 .....	26
4.1.2 つくば市の高齢化対策および図書館に関わる計画 .....	27
4.1.2.1 つくば市高齢者福祉計画 .....	28
4.1.2.2 図書館に関連する計画 .....	29
4.1.3 つくば市立中央図書館 .....	29
4.2 調査概要 .....	31
4.2.1 調査目的 .....	31
4.2.2 調査対象 .....	31
4.2.3 調査項目 .....	31
4.2.4 調査方法 .....	32
4.3 調査結果 .....	33
4.3.1 分析方法 .....	33

4.3.2	若い頃や子供の頃の図書館の利用 .....	33
4.3.3	「中央図書館」の利用状況 .....	34
4.3.4	「中央図書館」のイベントや行事の参加状況 .....	35
4.3.5	「中央図書館」での他者との会話 .....	36
4.3.6	「中央図書館」の雰囲気への印象 .....	38
4.3.7	「中央図書館」を利用して得たもの .....	40
4.3.8	「用がないときでも気軽に行ける場所」と図書館の比較 .....	42
4.3.9	「中央図書館内で気軽に行けて他者と会話できる場所」への態度 .....	44
4.3.10	「中央図書館」への全体的な評価 .....	45
4.4	本調査の考察 .....	47
4.4.1	第三の場の枠組との比較 .....	47
4.4.1.1	第三の場の8つの特徴との比較 .....	47
4.4.1.2	第三の場が個人にもたらす4つの利益との比較 .....	49
4.4.2	「中央図書館」の物理的アクセス .....	50
4.4.3	「中央図書館」の館内空間 .....	51
4.4.4	「中央図書館」内における他者との触れ合い .....	51
4.4.5	図書館という場への認識 .....	52
4.4.6	高齢者にとっての理想的な図書館像 .....	52
4.4.7	「中央図書館」内での交流への態度 .....	53
4.5	本章のまとめ .....	53
5.	高齢者の第三の場として機能する公立図書館に向けての検討 .....	56
5.1	公共施設としての既存の機能 .....	56
5.2	今後に向けた取り組み .....	57
5.2.1	高齢者向けのイベントや行事を開催 .....	57
5.2.2	物理的基盤としての館内空間への考慮 .....	59
5.2.3	「世話人」としての図書館職員 .....	62
5.3	本章のまとめ .....	63
6.	終わりに .....	65
6.1	本研究のまとめ .....	65
6.2	本研究の限界と今後の課題 .....	67
	謝辞 .....	69
	引用・参考文献 .....	70

## 1. はじめに

本章では、まず本研究の背景及び研究目的を述べる。そして、先行研究を取り上げ、研究現状を把握するとともに本研究の位置づけを確認する。最後に、本論文の構成及び各章の内容を紹介する。

### 1.1 研究背景と研究目的

2018年版の『高齢社会白書』<sup>1)</sup>によると、2017年の日本の高齢化率（総人口に占める65歳以上人口の割合）は27.7%で、世界で最も高い。今後の推移を見ると、世界の高齢化率は急速に進展する中、日本の高齢化率は世界で最も高い水準を保ちつつ、右肩上がり、2065年には38.4%まで上昇すると推計される。2065年には、約2.6人に一人が65歳以上になり<sup>2)</sup>、高齢化率の増加による影響は更に拡大すると予想される。

高齢化率が21%を超えた社会は「超高齢社会」と呼ばれ<sup>3)</sup>、日本政府は超高齢社会への対策を講じるため、多様な課題についての調査研究を進めている。高齢社会対策を目的として、5年ごとに日本と諸外国の60歳以上の男女を対象として実施されている「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」では、日本の高齢者は近所との交流は比較的少ない傾向にあることが明らかにされている。2010年の第7回の調査では、日本とアメリカ、韓国、ドイツ、スウェーデンの5か国が調査対象となった。調査の結果、「ほとんど毎日、近所と会話する」と答えた高齢者は約22.7%で日本が最も少なく、「ほとんど会話しない」と答えた高齢者の割合は約31.6%で日本が最も多いという分析結果が出ている<sup>4)</sup>。ここから調査対象となった先進国と比べ、地域のほかの住民との交流が少ないという日本高齢者像が浮かび上がる。

また、同じ高齢社会対策として、毎年発行されている2018年版の『高齢社会白書』によると、60歳以上の者は、現在住んでいる地域での付き合いの程度について、「付き合いっていない」（「あまり付き合いっていない」と「全く付き合いっていない」の合計）と答えた女性は18.8%、男性は26.5%という結果となった<sup>5)</sup>。女性のおよそ5人に1人、男性のおよそ4人に1人が地域での交流が少ない状況にあることがわかる。

更に、一部の高齢者は社会的孤立問題に直面している。2010年版の『高齢社会白書』では、高齢者の社会的孤立問題について言及している。同白書では「社会的孤立」を「家族や地域社会との交流が客観的にみて著しく乏しい状態」と定義している<sup>6)</sup>。他の世帯と比べ、①単身世帯、②未婚者・離別者、③暮らし向きが苦しい者、④健康状態がよくない者が社会的孤立に陥りやすいことが指摘され、このような属性を持つ高齢者は他の高齢者に比べて、「日頃の会話が少ない」、「頼れる人がいない」や「近所との付き合いがほとんどいない」と答えた割合が多かった。孤立状態は孤立死や高齢者犯罪といった社会問題を生み出す可能性があり、多様な対策を講じる必要がある。

これらの現状を踏まえ対策を講じる際、図書館はなにかできるだろうか。まず、現在高齢者の生活において、図書館はどんな位置にあるのかを考える。経済広報センターが2012年に発表した「高齢社会のあるべき姿に関する意識調査報告書」では、高齢者になったときに（65歳以上は現在）、自宅の近くにあった方がよい施設等について、図書館は5位（64%）となっている。また、高齢者になったときに利用したい（65歳以上には、引き続き利用したい、新たに利用したい）施設などを尋ねて、図書館と回答した人は75%で、第3位となっている。そして、65歳以上の回答者に現在交流・活動しているコミュニティの場はどこかについて尋ねた結果としては、「図書館」と答えた人は全体の31%であり、第2位になっている<sup>7</sup>。これらの結果からすれば、図書館は高齢者が利用したい施設であることと、一部の高齢者は図書館を地域の人と触れ合う場として使っていることが明らかになっている。

一方、図書館では高齢者サービス及びサービスにおける高齢者の位置づけを見直そうとする動きがみられる。2013年に実施された公立図書館155館を対象とするアンケート調査では、図書館における高齢者を対象としたサービスが着目されていくものと考えられることと、図書館サービスにおける高齢者の位置づけを今後検討する姿勢が伺えることが明らかにされた<sup>8</sup>。公立図書館では、超高齢社会における今後のサービスについて、再考の必要性を認識していることが伺える。

以上の背景を踏まえ、超高齢社会における図書館の役割や機能について考察するに際して、「場としての図書館」(The library as place)という視点は有用であると考えられる。これは情報デジタル化の急速な進展とインターネットの普及が、図書館の従来のあり方に大きな影響を与えることにより、生まれた新たな流れである。「利用者の生活の中の図書館」、そして図書館が置かれている現状を把握するには重要な研究であると指摘されており<sup>9</sup>、今後、超高齢社会の図書館に求められる役割を研究するにも示唆を与えるのではないだろうか。

場としての図書館の研究に取り入れた概念は多様であるが、中でも、「第三の場」(Third Place)の概念が注目を集めている。これはアメリカの社会学者レイ・オルデンバーグ(Ray Oldenburg)がその著作『偉大な良き場』(The Great Good Place)<sup>10</sup>にて最初に提唱した概念であり、社会学発祥の概念であるが、図書館情報学を含め多くの応用が検討されている。第三の場とは、「居心地がとびきりよい場」(Great good place)で、人が定期的、自発的、非形式的、かつ楽しく参加できる集いのために場を提供する公共の場所の総称である<sup>11</sup>。図書館というコンテキストでみると第三の場は、2009年国際図書館連盟のサテライト会議のテーマの1つ「第三の場としての図書館」(Libraries as third places)として取り上げられた<sup>12,13</sup>。吉田・川崎による図書館という場を考察した研究では、オルデンバーグの第三の場について論述されており、「図書館という場の歴史と現状を把握するに際して、豊かな洞察を与える」と評価し、更に「公立図書館は現実には第三の場を抱えてきたのではないか」と認識している<sup>14</sup>。

オルデンバーグによると、人々がリラックスして満足に日常を過ごすには3つの経験の領域にバランスを取らなければならない。1つ目は家、2つ目は仕事場、3つ目は「包容力のある、社交的で、コミュニティの基盤を提供しつつそのコミュニティを謳歌する」<sup>15</sup>領域である。この3つ目の領域が、第三の場である。良い第三の場として成り立つには、①中立な領域、②人を平等にすること、③会話が主な活動であること、④アクセスしやすく・協調的であること、⑤常連がいること、⑥建物が目立たないこと、⑦陽気で遊び場的な雰囲気、⑧家を離れた時のもう1つの家であること、という8つの特徴を満たさなければならない。同書には具体例としてカフェ、パブ、美容院、または書店などを挙げている。

日本では、高齢者の社会的孤立や一人暮らしの高齢者の孤独死が問題となっている。他者との交流の不足が続くと、人は寂しく感じ、生きがいを感じる事が難しくなると言われているが、外出や他者と会話することは、「高齢期の健康維持や孤立防止に有益である」<sup>16</sup>という。これらを踏まえ、高齢者に他者と交流できる機会を提供する必要があると考えられる。地方公共団体によって設置される公立図書館は、2017年時点では3300館近くの拠点があり、身近な公共施設として広く認識されている。そして、自由に入館でき、性別や年齢などを問わず利用者を平等視している。つまり、場としての公立図書館は既に第三の場を特徴の一部を満たしていると考えられる。そして一部の高齢者にとって、図書館は交流・活動しているコミュニティの場であり、館内にて他者との交流も生まれるだろう。したがって、筆者は公立図書館が高齢者に第三の場を提供する可能性を持っているのではないかと考えている。公立図書館の特徴を更に発揮し、日本の高齢者の第三の場として機能することで、高齢者に他者とつなげる場や手段を提供し、地域の交流を促すことができるのではないかと。また、それによって、高齢者の社会的孤立問題が軽減する効果が期待されることも考えられる。更に、今後、社会から孤立する可能性がある高齢者の増加を防ぐこともできるかもしれない。

日本は超高齢社会を既に迎えており、公立図書館の利用者としての高齢者の増加も見込まれ、高齢者に対する公立図書館の役割を改めて考える必要がある。またその際、高齢者の社会参加を促すということを踏まえ、第三の場の視点は有用であると考えた。

第三の場はいつでも誰でも自由に出入りでき、会話を楽しめる場である。カフェやパブなどは第三の場とされてきた。本研究では、日本の公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性を検討することを目的とする。

## 1.2 先行研究

本節では、本研究と関連する先行研究を概観し、現況の把握と本研究の位置づけを確認することを目的とする。

### 1.2.1 場としての図書館に関する議論

場としての図書館の研究は、1990年代にアメリカを中心に始まった。情報のデジタル化の急速な進展とインターネットの普及が、図書館の従来のあり方やサービスに大きな影響を与えた。利用者は来館せずに図書館が収集、購入している資料にアクセスすることが可能になるとともに、情報や資料収集の手段が増え、必ずしも図書館を通じて資料を集める必要がなくなっている。今後の図書館の機能や役割を再考する際、これまで見過された図書館の場／空間としての役割が見直されるようになり、場としての図書館の研究が進められるようになった。その主張としては、図書館はただの資料の集積体ではなく、「住民のアクチュアルな日常生活と学びを豊かなものとし、知的出会いと社会的交流を促し、コミュニティの文化、歴史そしてつながりを保持するリアルな場であり、物理的な場所を基盤に、多様な社会・文化的な機能と価値を持っている」<sup>17</sup>とされている。考察に用いられる研究理論は多様で、本研究で使用する第三の場のほか、公共圏（Public Sphere：政治・経済権力から独立し、誰もが参加できて自律・合理的な議論が可能な世論形成のためのコミュニケーション空間）<sup>18</sup>、社会関係資本（Social Capital：社会的関係の構築の努力を通して獲得され、個人や集団にリータン、ベネフィットをもたらすような創発的な関係資産）<sup>19</sup>、または多元的場所主義（場所を様々な空間を含んでいると捉える見方）などが挙げられる。社会学・政治学の理論から、地理学の理論まで幅広く応用されているのは、場としての図書館の研究の特色である。

実際、日本には「The library as place」の訳語が2つ存在している。「場所としての図書館」と「場としての図書館」である。二つの意味が存在する要因を端的に説明する。場所より抽象的な言葉である場を選ぶ理由として、久野は図書館情報学における場としての図書館研究の目的、方法、特色などを示し、日本の場／場所論を依拠して論じ、物理的な場所と比べ、場は「人々の関係性や日常生活の多様な活動を含みうる包括的でインタラクティブな概念と言われており、当研究には、より相応しい訳語だと考えられたからである」<sup>20</sup>と述べている。また場としての図書館研究の主張は図書館にいる利用者の感覚・感情に目を向け、物理的基盤を持つ図書館の社会的・文化的機能に着眼点を置き、図書館と地元コミュニティとの関係に焦点を当てて、図書館空間の機能と役割を再検討している。

次に「場所」を採用する研究者の主張である。根本は、場所という用語は具体的、物理的イメージが強く、また「場」は通常“field”の訳語とされることから場としての図書館と訳すことについて適切ではないという指摘をした<sup>21</sup>。また、『場所としての図書館・空間としての図書館』では、図書館が建てられている地域の特性、その建築物のデザインや規模、また、図書館が所蔵している資料の特性と配置などは図書館の「置かれた場所や施設そのものの固有性を表現しようとしている」<sup>22</sup>としている。すなわち、根本は場所として図書館の研究は、図書館のロケーション、建築様式、コレクションの配置などへ注目すべきであると強調している。根本の主張から見ると、2008年『図書館雑誌』に「デザイナー

場としての図書館」と題した特集が組まれているが<sup>23</sup>、その内容は主に図書館の設備や施設、建物のデザインに着目しているため、「場所としての図書館」が適切であったと言えるよう。

以上のことから日本では、着眼点の違いにより訳語の違いが生じていると言えるかもしれない。第三の場の概念自体は、物理的な場所またそこにある固有物ではなく、第三の場と称することができる場を持つ社会的価値を強調すること、また本研究は利用者に着目していることから、本研究では「Place」を「場」と訳す久野の主張に従い、「場としての図書館」および「第三の場」という語を使用する。

### 1.2.2 居場所としての図書館に関する議論

本項では、日本の独特な概念「居場所」及び居場所に関する研究に触れつつ、居場所と第三の場を比較してみたい。

根本は場所として図書館について論述する際に、日本はデジタル化との関係で場所としての図書館を論じることがあまりないものの「居場所としての図書館論」があると述べている<sup>24</sup>。日本では1990年代以降、居場所について書かれた書籍や論文が増加しており<sup>25</sup>、場としての図書館に関する研究が始まった時期であるともいえる。

居場所の概念は日常生活でも学術的にも広く用いられているが、その解釈は多岐にわたる。『大辞林』第三版によると、居場所とは「人が居る所。いどころ」<sup>26</sup>であり、物理的にその人が存在している場所について記述する言葉である。しかし、学術研究における居場所の定義について、藤原は、①社会生活の拠点となる物理的意味での場、②自由な場、③居心地がよく、精神的に安心・安定していられる場もしくは人間関係、④一人で過ごせる場、⑤休息、癒し、一時的な逃避の場、⑥役割が与えられる、所属感や満足感が感じられる場、⑦他者や社会とのつながりがある場、⑧遊びや活動を行う場、⑨自己の存在感・受容感じさせる場、⑩安全な場の10の類型に整理できると述べている<sup>27</sup>。

青少年や子どもの居場所としての図書館についての議論や報告<sup>28,29</sup>ももちろんあるが、本研究では主に高齢者の居場所について論じた先行研究における居場所の定義のいくつかを取り上げる。白瀬らによる網走市の高齢者ふれあいの家をもとに調査した研究では居場所を「在宅高齢者を対象とした日中活動の場」<sup>30</sup>と定義している。また、國上などが多摩ニュータウンにて行われた研究でいう居場所は「行政やNPO、ボランティア団体などが開設し、高齢者に生涯学習・趣味活動、食事・喫茶、交流・情報交換などの機会と場を提供する」<sup>31</sup>である。そのほかには地域において、高齢者が自分の生きている意味、すなわち、存在意義が感じられる空間が居場所であるとする先行研究もある<sup>32</sup>。

そして、図書館を高齢者の居場所として挙げた研究では、図書館は癒しと快復の場として高齢者の居場所になっているとの報告がある<sup>33</sup>。また、「特に予定の無い時でも気軽に足を運べる場所」という定義を用いて、高齢者の居場所の利用実態と意義を探究した調査では、図書館は男女に共通して好まれている場所として挙げられており、「公園・自然」の



次に2位となっている<sup>34</sup>。実態調査ではないが、高齢社会において図書館に求められるものについて論じ、学習拠点と生きがい創出の場といった2つの役割へと繋がる図書館を高齢者の居場所として考えることができると書かれた研究もある<sup>35</sup>。

これらの先行研究において出現した居場所の定義や概念は前述した10のタイプのいずれか、またはいくつかの組み合わせにあてはまるであろう。一方、第三の場とは「インフォーマルな公共生活の中核な環境」<sup>36</sup>で、人が定期的、自発的、非形式的、かつ楽しく参加できる集いのために場を提供する公共の場所の総称で、物理的かつ心理的な要素の両方を含んでいると考えられる。その定義から考えれば、居場所と重なる部分があり、居場所の類型①、③、⑦、⑧を合わせたものに近いと言えるかもしれない。

しかしながら、オルデンバーグの第三の場に関する詳しい解説<sup>37</sup>を見れば、第三の場は家と報酬を伴う生産的な領域以外の場／場所に限定されているほか、8つの特徴などを満足してから始めて第三の場と称することができるため、居場所より、当てはまる場は限定される。一方、居場所となる場／場所は限定されず、家も仕事場も居場所になりえるため、範囲はもっと広いだらう。第三の場を居場所に相当する場と認識している先行研究もあるものの<sup>38</sup>、本研究では第三の場と居場所を類似しているが異なる概念として扱う。

### 1.2.3 第三の場の概念を図書館に適用する研究

次に、第三の場の概念を図書館に適用する先行研究を取り上げる。まずは、場としての図書館を捉えるため、2004年にシアトル公共図書館の中央館を調査地に選定し、館内の利用者と館外の通行人226人を対象としたインタビュー調査がある<sup>39</sup>。シアトル公共図書館の中央館は第三の場の特徴の3つしか満たしていないため、第三の場とは断言しにくい。同館は地域にとって高い社会的価値を持っていると評価し、市内の分館なら第三の場の属性を一層反映できるかもしれないと補足した。次に、2008年におけるアメリカのガズデン郡公共図書館の建築は、場所としてどのように機能しているのかについて論じた研究がある<sup>40</sup>。図書館利用者を対象としてアンケート調査やインタビュー調査を行ったほか、図書館職員にもインタビュー調査を行い、更に観察と資料分析した。その結果、図書館は地域住民の第三の場というより、情報獲得の場と行きつけの場に近いだらうという結論が提示されている。そのほか、2012年から2013年にかけて、シンガポールのジュロン地域図書館をフィールドとし、学生12人へのインタビュー調査と直接的観察が行われた研究がある。同研究では、従来の場としての図書館についての研究は若者への関心が不足していると指摘し、同館はどの程度、若者の第三の場として機能しているかを探ることが目的である<sup>41</sup>。結論として、ジュロン地域図書館を第三の場として捉えられることは難しいが、この図書館は学生に交流・娯楽・情報・学習の場を提供していると論じている。

一方、調査対象である図書館は、第三の場の特徴をほとんどまたはすべて満たしていたと述べた先行研究も見られる。台湾では、新台北市立図書館への研究を通して公共図書館のアイデンティティを明らかにするための研究がある<sup>42</sup>。2016年、504人の利用者へのア

ンケート調査を行った結果、新台北市立図書館が「会話が主な活動」以外、第三の場の7の特徴を満たしていることが明らかになり、利用者は図書館を使うことによって日常生活、レクリエーション、仕事そして教育4つの面から利益を得ていることが明らかになった。また、日本の図書館はどうあるべきかについて示唆を得ることを目的として久野は、フィンランドの3つの公共図書館にて一週間インタビュー調査と自然参与観察を行った。研究対象に選ばれた図書館は第三の場の特徴をすべて満たしており、図書館内は第三の場の空間が創出されていると結論づけた<sup>43</sup>。同じく久野の研究で、学校図書館にて、第三の場の概念を導入した最初の試みである研究がある<sup>44</sup>。この研究は学校図書館という場をさまざまな面から考察することによって学校図書館の役割と機能を示すことを目的とし、大阪府生野高校の図書館で実態調査を行った。そして、生野高校の図書館は第三の場の特徴をすべて満たしていると結論付けた。その上で、公共的な場である学校図書館には、第三の場という空間が存在し、それが生徒の「私的領域」としての生活空間として機能し、生徒の能力と心身を支えている、とまとめている。

図書館情報学におけるこれらの先行研究は、調査方法、または調査対象がそれぞれ異なっているものの、利用者に着目し、図書館は、利用者または図書館が所属しているコミュニティにとって高い社会的価値を持つことを実証したということができよう。しかしながら、図書館の利用者のマジョリティーである高齢者に着目し、図書館は第三の場として機能する可能性について検討する研究は管見の限り見当たらない。よって、本研究では、高齢者に焦点を当て、公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性を調査し、今後、超高齢社会における図書館に求められる役割に関する検討への一助となると考える。

### 1.3 論文構成

第1章では、本研究の背景、目的及び先行研究について述べる。

第2章では、文献調査により、日本における高齢者や高齢化の現状、公立図書館の位置づけ及び機能、そして、利用者としての高齢者と図書館の関係性を明らかにするとともに、日本の公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性について論究する。

第3章では、オルデンバーグが提唱した第三の場の定義、特徴及び第三の場が個人にもたらす利益について論述し、第三の場を図書館に適用した先行研究を概観する。また、文献調査の結果に基づき、本研究における第三の場の定義について論じる。

第4章では、公立図書館の高齢利用者を対象とし、公立図書館が第三の場として機能する可能性に関するインタビュー調査の概要と結果について述べる。また、インタビュー調査および観察の結果を踏まえ、第三の場の特徴及び個人にもたらす利益を照らし合わせる。これらを踏まえ、インタビューから読み取れる図書館及び高齢者の特徴を考察する。

第5章は、文献調査及びインタビュー調査の結果を踏まえ、これからの日本の公立図書館が、高齢者の第三の場として機能する可能性及び課題を論考する。

第6章では、本研究のまとめを行い、本研究の限界と今後の課題について述べる。

- <sup>1</sup> 高齢社会白書は、高齢社会対策基本法に基づき高齢化の状況や政府が講じた高齢社会対策の実施の状況、また、高齢化の状況を考慮して講じようとする施策について明らかにしている年次報告書である。1996年から毎年政府が国会に提出している。
- <sup>2</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成30年版）. 日経印刷, 2018, 229p.
- <sup>3</sup> 溝上智恵子. “超高齢社会日本の現状と図書館”. 高齢社会につなぐ図書館の役割—高齢者の知的欲求と余暇を受け入れる試み. 溝上智恵子, 呑海沙織, 綿抜豊昭編著. 第一版, 学文社, 2012, p.3-24.
- <sup>4</sup> 内閣府. 平成22年度 第7回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果(全文). <http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/kiso/zentai/index.html> (参照 2017-11-13)
- <sup>5</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成30年版）. 日経印刷, 2018, 229p.
- <sup>6</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成22年版）. 佐伯印刷, 2010, 180p.
- <sup>7</sup> 経済広報センター. 高齢社会のあるべき姿に関する意識調査 (2012). [www.kkc.or.jp/data/release/00000080-1.pdf](http://www.kkc.or.jp/data/release/00000080-1.pdf) (参照 2017-05-20)
- <sup>8</sup> 呑海沙織, 志賀渉, 溝上智恵子. 公共図書館における高齢者サービスの現状. 日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集. 2014, p.45-48.
- <sup>9</sup> Wiegand A. Wayne. To Reposition a Research Agenda: What American Studies Can Teach the LIS Community About the Library in the Life of the User. *The Library Quarterly*, 2003, 73(4), p.369-382.
- <sup>10</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, 324p.
- <sup>11</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, p.16.
- <sup>12</sup> International Federation of Library Associations and Institutions. Call for Papers for Satellite Meeting (2009). <https://www.ifla.org/past-wlic/2009/satellite-academic-call-en.htm> (参照 2016-11-29)
- <sup>13</sup> 吴建中. 作为第三空间的图书馆 (2009). <http://www.wujianzhong.name/?p=667> (参照 2016-11-29)
- <sup>14</sup> 吉田右子, 川崎良孝. アビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究. 図書館界, 2009, 61(1), p.12.
- <sup>15</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, p.14.
- <sup>16</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成30年版）. 日経印刷, 2018, 229p.
- <sup>17</sup> 久野和子. 新しい批判的図書館研究としての「場としての図書館」(“Library as Place”) 研究一その方法論を中心にした考察. 図書館界, 2014, 66(4), p.268.
- <sup>18</sup> 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学用語辞典. 第4版, 丸善出版株式会社, 2013, p.65-66.
- <sup>19</sup> 金光淳. 社会ネットワーク分析の基礎. 勁草書房, 2003, p.238.
- <sup>20</sup> 久野和子. 新しい批判的図書館研究としての「場としての図書館」(“Library as Place”) 研究一その方法論を中心にした考察. 図書館界, 2014, 66(4), p.279.
- <sup>21</sup> 根本彰. 「場所としての図書館」に関する議論. カレントアウェアネス, 2005, 286, p.21-25.
- <sup>22</sup> 根本彰. 場所としての図書館・空間としての図書館: 日本、アメリカ、ヨーロッパを見て歩く. 学文社. 2015, p.10.
- <sup>23</sup> 日本図書館協会. 図書館雑誌. 2008, 102(6), p.368-385.
- <sup>24</sup> 根本彰. 「場所としての図書館」に関する議論. カレントアウェアネス, 2005, 286, p.21-25.
- <sup>25</sup> 藤原靖浩. 居場所の定義についての研究. 教育学論究. 2010, (2), p.169-177.
- <sup>26</sup> 松村明編. 大辞林. 第3版, 2006, 三省堂, p.171.
- <sup>27</sup> 藤原靖浩. 居場所の定義についての研究. 教育学論究. 2010, (2), p.171, 172.
- <sup>28</sup> 坂部豪. 座談会 青少年の居場所としての図書館. LISN: Library & information science news. 2009, 142, p.1-21.
- <sup>29</sup> 糸数未希. 地域の居場所としてのこども図書館. こどもの図書館. 2016, 63(12), p.6-8.
- <sup>30</sup> 白瀬由美香ほか. 高齢者の居場所作り事業に関する検討: 網走市高齢者ふれあいの家をもとに. 大原社会問題研究所雑誌. 2015, (680), p.54.
- <sup>31</sup> 國上佳代ほか. 多摩ニュータウン諏訪・永山地区における高齢者のための居場所形成とその利用・認知に関する分析. 日本建築学会計画系論文集. 2011, 76(663), p.974.
- <sup>32</sup> 園田真理子. 住民による福祉の拠点づくり. 居住環境整備論. 放送大学教育振興会, 2012, p.94-107.
- <sup>33</sup> 近藤周子. 癒しと快復の場としての図書館: 私の居場所はここに. みんなの図書館. 1999, (264), p.11-14.
- <sup>34</sup> 樋野公宏, 石井儀光. 高齢者における居場所の利用実態と意義. 日本建築学会計画系論文集. 2014, 79(705), p.2471-2477.
- <sup>35</sup> 呑海沙織. 高齢社会における図書館サービス. 図書館雑誌. 2014, 108(5), p.313-315.
- <sup>36</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, p.16.

- 
- <sup>37</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, p.14-16.
- <sup>38</sup> 樋野公宏, 石井儀光. 高齢者における居場所の利用実態と意義. 日本建築学会計画系論文集. 2014, 79(705), p.2471-2477.
- <sup>39</sup> フィッシャー・E.カレンなど. “場としてのシアトル公立図書館：中央図書館におけるスペース、コミュニティ、情報の再概念化”. ブッシュマン・E・ジョン、レッキ・J・グロリア編著. 場としての図書館. 川崎良孝、久野和子、村上加代子訳. 京都大学図書館情報学研究会. 2008, p.199-237.
- <sup>40</sup> Most. R. Linda. *The Rural Public Library as place in North Florida: A Case Study*. The Florida State University, 2009, Ph.D. thesis.
- <sup>41</sup> Lin Hui, Pang Natalie, Luyt Brendan. Is the library a third place for young people?. *Journal of Librarianship and Information Science*. 2015, 47(2), p.145-155.
- <sup>42</sup> Yu Chiu-Yun, Ke Hao-Ren. A Study on the New Taipei City Library as a Third Place and the Perceived Outcome and Sense of Identity of Its Users. *Proceedings of the 8th Asia-Pacific Conference on Library & Information Education and Practice*, Bangkok, Thailand, 2017.
- <sup>43</sup> 久野和子. フィンランドにおける「第三の場」(third places)としての図書館. 神戸女子大学文学部紀要, 2016(49), p.101-114.
- <sup>44</sup> 久野和子. 「第三の場」としての学校図書館. 図書館界. 2011, 63(4), p.296-313.

## 2. 日本の高齢者の現状と図書館

本章ではまず、日本の高齢者を取り巻く現状、高齢化の進行と関連する対策、及び高齢者の社会的孤立問題などを概観し、公立図書館の従来の位置づけと役割を踏まえ、今後期待される役割と機能について述べる。また、公立図書館における利用者としての高齢者の位置づけ並びに高齢者サービスの現状や今後の動向を考察する。最後に、公立図書館が高齢者の第三の場となる可能性について論じる。

### 2.1 超高齢社会日本と高齢者の姿

2017年現在、日本の高齢化率は27.7%で<sup>1</sup>、世界で最も高い水準である。一般的には、高齢化率が7%から14%以上の社会を「高齢化社会」、14%から21%の社会を「高齢社会」、21%以上の社会を「超高齢社会」と分類することができるという<sup>2</sup>。日本の高齢化率は2007年に21%を超え<sup>3</sup>、10年以上前に超高齢社会に突入した。現在の日本は、前例のない超高齢社会となっている。そして2016年現在、日本国民の平均寿命は、男性が80.98年、女性が87.14年となっている<sup>4</sup>。国民の寿命の延長及び少子化の進行により、これからの日本の高齢化率は更に上昇し、2065年には38.8%にまで達すると推計されている<sup>5</sup>。また、2060年までの高齢化率予想値は、今後アジアの主要国家の高齢化率も著しく上昇する傾向を示している。欧米及びアジアの主要国家と比べ、日本の数値は変わらず世界で最も高い。

高齢者人口の増加に伴い、日本国民一人ひとりが長寿を喜んで迎え、すべての国民が安心して暮らすことができる社会を形成することが望まれる。「公正で活力ある社会」、「地域社会が自立と連帯の精神に立脚して形成される社会」と「豊かな社会」が構築されることを基本理念として、1995年に「高齢社会対策基本法」（以下、基本法）が施行された。同法第2章の「基本的施策」には、就業及び所得、健康及び福祉、学習及び社会参加、生活環境、調査研究等の推進及び国民の意見の反映について必要な施策を講ずるものとしている。その後の動きを追ってみると、毎年、高齢社会対策関係の予算を立てているほか、雇用対策法に基づいた年齢制限禁止の義務化、健康づくり設備の整備、高齢者生きがい活動促進事業、バリアフリー化の推進など、様々な施策を講じている。また、基本法に基づき、内閣府は高齢社会対策大綱及び『高齢社会白書』を作成するとともに、高齢者の健康や経済・生活環境など高齢社会対策に関する調査研究、高齢者の社会参加活動の事例募集と報告など国民に対する広報・啓発活動を行うなど、高齢社会対策の総合的な推進を図っており、全ての人が平等で、健やかで充実した生活が送れる豊かな社会を形成する動きが伺える。

次に、超高齢社会における高齢者の姿について述べる。高齢社会の対策に関連する調査研究の1つとして、内閣府が5年ごとに行っている高齢者の生活と意識に関する国際調査が

ある。これは日本と諸外国の高齢者の意識を把握し、今後の施策の推進に資することを目的として 60 歳以上の男女を対象とするサンプリング調査である。2010 年の第 7 回の調査は、日本とアメリカ、韓国、ドイツ、スウェーデンの 5 か国を対象とした。

近所の人たちとの交流について尋ねた結果、「ほとんど毎日」の割合が一番高い韓国の 40.7%に対して、日本は 22.7%で 5 か国中最も低い。また日本では、1 週間のうちに会話が「ほとんどない」の割合が 31.6% と、5 か国中最も高い。これらの結果から、他の調査実施国と比べ、近所との交流が少ない日本の高齢者像が見えてくる<sup>6</sup>。日本のデータのみを比べてみれば、2005 年に行われた第 6 回の調査で、同じ近所との交流する頻度を聞いた結果、「ほとんどない」と回答した日本の高齢者は 27.4%であった。つまり、近所との付き合いがほとんどない日本の高齢者の割合が増加している<sup>7</sup>。このような調査結果から、日本の高齢者は近所との交流が比較的少ないこと、交流の機会が少ない高齢者が増加傾向にあることが伺える。

高齢者単身世帯及び高齢者夫婦世帯数が増加しているのは、日本の高齢者のもう 1 つの特徴である。2016 年、単独または夫婦のみの高齢者世帯数は合わせて日本の全体世帯数の 6 割近くまで増加した。また、一人暮らしの高齢者数も 1980 年の男性約 19 万人、女性約 69 万人であったが、2015 年には男性約 192 万人、女性約 400 万人まで増加した。割合で示すと、一人暮らしの高齢者が高齢者人口に占める割合は男性 13.3%、女性 21.1%となり、さらなる増加も見込まれる<sup>8</sup>。

単独または夫婦のみの高齢者世帯の増加は、高齢者の社会的孤立問題を引き起こす原因の 1 つと言われている。単身の高齢者は同居家族がいないので、友人や地域の人との付き合いがなければ孤立しやすい。高齢夫婦のみの世帯の場合、夫婦がそろって健康でいる間はよいが、どちらかが亡くなったあと、子どもと同居しなければ単身世帯となる可能性が高いため社会的孤立のリスクは高まっているといえる。2010 年版の『高齢社会白書』によると、社会的孤立とは、家族や地域社会との交流が客観的にみて著しく乏しい状態を指している<sup>9</sup>。同白書では単身世帯、未婚者・離別者、暮らし向きが苦しい者、及び健康状態がよくない高齢者が他の世帯より社会的孤立に陥るリスクが高いと指摘し、高齢者の社会的孤立が生み出す問題として、①生きがいの低下、②孤立死の増加、③高齢者による犯罪の増加、④消費契約トラブルの 4 つを挙げている<sup>10</sup>。また、このような孤立状態は以上の問題だけでなく、高齢者の尊厳にも深刻な影響をもたらしており、対策を取るのが喫緊の課題である。

人との交流が少ない生活が続くと、生きがいや張り合いを感じる事が難しく、生活の質を保ちにくくなると言われている<sup>11</sup>。実際のところ、約 6 割の日本の高齢者は世代間の交流に参加したいと答えており<sup>12</sup>、多数の高齢者は自発的に交流機会を求めていると言える。以上を踏まえ、高齢者が健やかで豊かな生活を送れるように、高齢者に気軽に立ち寄

る場所、または交流機会を提供することは重要であり、そのために国、及び地方公共団体が果たすべき役割があると考えられる。

## 2.2 公立図書館の位置づけと機能

公立図書館が高齢者に交流の機会を提供できるかについて検討するために、まず、日本の公立図書館の設置運営に関する法規を見ていく。

公立図書館について規定している法律は、1950年に施行された図書館法である。同法第2条によれば、図書館は「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」であり、図書館の種類に関して、第2条第2項によれば、地方公共団体が設置する図書館は公立図書館と称し、日本赤十字社または民法第34条の法人の設置する図書館を私立図書館という。また地方自治法第1条第3項によれば、地方公共団体は都道府県及び市町村、特別区、地方公共団体の組合及び財産区を指す。日本の法律を基準とした場合、図書館法によって定義された公立図書館と私立図書館を合わせて、「公共図書館」と称することができる<sup>13</sup>。本研究では図書館法に準じて、公立図書館を地方公共団体が設置する図書館と定義する。

図書館法は社会教育法に基づいて定められた法律であり、社会教育法第9条第1項は「図書館及び博物館は、社会教育のための機関である」としている。これもまた教育基本法の第12条第2項「国及び地方公共団体は、図書館、博物館、公民館その他の社会教育施設の設置……社会教育の振興に努めなければならない」を受けて規定したものである。なお、教育基本法では、社会教育は学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む。）と定義している。以上から、公立図書館は社会教育機関として位置づけられている。

社会教育機関であると同時に、公立図書館は地方公共団体が設置し、出資しているため、地域社会との関係は密である。公立図書館の設置と管理に関して、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の第30条には「地方公共団体は、法律で定めるところにより、学校、図書館、博物館、公民館その他の教育機関を設置するほか…略…その他の必要な教育機関を設置することができる」と定めており、同法第32条「学校その他の教育機関のうち、大学及び幼保連携型認定こども園は地方公共団体の長が、その他のものは教育委員会が所管する」と規定し、現在公立図書館の行政は地方の教育委員会の社会教育部（課）もしくは生涯教育部（課）が担当するのが一般的である。最近では、地方公共団体の首長部局への移管が増加し<sup>14</sup>、地域の推進と関係する部門<sup>15</sup>、あるいはまた文化部<sup>16,17</sup>などに所管する公立図書館も見られる。

また、地方自治法第244条第1項に「地方公共団体は住民の福祉を増進する目的をもってその利用に供するための施設」である「公の施設」を設けるとしている。公立図書館は

公の施設に該当すると認識されており<sup>18</sup>、公立図書館は地域住民の福祉の増進に努めなければならないと考えられる。同じく第 244 条第 2 項と第 3 項には「地方公共団体は正当な理由がない限り、住民が公の施設を利用することを拒んではならない」、「住民が公の施設を利用する際、不当な差別をされてはならない」と規定している。更に、図書館法第 17 条に「公立図書館は、入館料その他図書館資料の利用に対するいかなる対価をも徴収してはならない」と規定し、これは公立図書館における「無料の原則」と言われている<sup>19,20</sup>。以上を踏まえると、公立図書館は地域の公費により運営を維持し、無料原則に沿って奉仕し、あらゆる人が利用可能な身近な社会機関であることも明確である。

図書館は「社会教育機関」との認識が一般的だが、これについて、従来から批判的な見解が示されているという。例えば、図書館の機能が教育機関のみにとどまらず、「文化的な側面を含め、多面的な機能を有する」<sup>21</sup>、あるいはまた、現在の図書館は必ずしも教育のための機関としてのみあるわけではなく、「図書館の役割として、『教育・文化・情報のための民主的な機関』（ユネスコ）、『情報と思想のひろば』（ALA）など多種の内容が掲げることがむしろ一般的である」<sup>22</sup>という指摘も見られる。ランガナタンが「図書館学五原則」にて述べたように、図書館は成長する有機体であり、時代の変化または利用者の要求に応じてその役割から多方面に広げていき、あらゆる利用者によって利用されている公立図書館も変化に応じてあるべきと考えられる。

2018 年 12 月、文部科学省中央教育審議会は「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）」<sup>23</sup>を取りまとめた。答申では、今後の社会教育施設の在り方について、社会教育施設に求められる役割を整理している。答申によると、社会教育における学びの場では、地域住民は他者との対話や議論し、学びを通じてつながりが生まれると論じられており、このような相互学習を通じて、交流や認め合うことによりつながり意識などが醸成され、地域住民の絆が強まるなどの効果がもたらされるという。更に、地域住民の相互のつながりは、活力のあるコミュニティを形成し、地域課題の解決の基盤を形成するものとして機能すると指摘している。公立図書館について、図書館は多様な世代の住民を引き寄せる強みを持っていると言及し、今後求められる役割として全ての住民に読書の機会を提供する機能を強化すると同時に、地域住民の情報に関するニーズに対応できる拠点としての役割の強化が求められるほか、まちづくりの中核となる地域住民の交流の拠点としての機能の強化等も期待されると強調している。

これらを踏まえ、これから公立図書館が地域住民の情報拠点として役割を果たすとともに、「社会教育」を基盤として、地域住民がつながる場として機能する可能性もあると言えよう。

アメリカの図書館情報学の重鎮であるウィーガンド（Wayne A. Wiegand）は、これまでの図書館情報学の研究は情報へのアクセスの提供に力を入れてきたが、場としての図書館についての研究が見過されてきたと指摘している。そして、この関心の不足は、図書館



情報学界の、図書館が置かれる現状を創り出した社会及び文化的前提への十分な理解を妨げることとなると論じており<sup>24</sup>、「場」としての図書館を考察する重要性を強調している。インターネットの普及により知識・情報へのアクセスの手段が多様化された現在、場としての図書館について考える際に、人が知識・情報と出会う場としてだけではなく、人が気軽に立ち寄り、人との出会い、交流の機会を提供できる場としての機能を有することも考えられるのではないだろうか。

塩見は、「図書館は人と資料や情報と出会う場だけでなく、人と人が気軽に集う、語り合う『ひろば』機能を備え付けている」<sup>25</sup>と主張している。また、日本図書館協会が2004年に改訂した「公立図書館の任務と目標」には「住民は図書館の利用を通じて学習し、情報を入手し、文化的な生活を営むことができ、図書館の活用によって達成できることは多様であり、限りない可能性を持っている」と述べられている。その中の1つは、「人との出会い、語りあい、交流が行われ、地域文化の創造に参画すること」<sup>26</sup>である。また、三村は公共図書館における高齢者サービスの捉え方を考察し、高齢者サービスの機能を①ケア機能：従来の弱者としての高齢者サービス、②サードプレイス機能：高齢者の行きつけの場所となる、③サロン機能：他者との交流し、繋がる、④教育機能：高齢者自らの学習にコンテンツや場を提供するもしくは高齢者が自分の経験を次世代に伝える、の4つとしているが<sup>27</sup>、その中の「サードプレイス機能」と「サロン機能」はまさに図書館の場を利用して発揮する機能である。そのほか、日本図書館協会の町村図書館活動推進委員会による21世紀の町村図書館振興をめざす「Lプラン21」の提言10に「図書館が長時間滞在できる居心地のよい空間を提供し、人々の出会いの場、地域のサロンとなるべきである」<sup>28</sup>との文言も含まれる。このような提言は図書館の現場にも反映され、運営方針に「気持ちのよい対応をし、繰り返し来館したくなる快適な場を提供します」<sup>29</sup>や「人と人をつなぐ中核施設となる」<sup>30</sup>と挙げている公立図書館も存在する。いずれも資料や情報の提供のみを超えて、公立図書館の場を「交流」や「出会い」に利用し、まちづくりに積極的に関わろうとする姿勢が見えている。

こういった主張や提言を踏まえ、場を利用して、地域の高齢者に他者との交流の機会を創出する機能は、今後更に重要になっていくのではないだろうか。

## 2.3 利用者として的高齢者と図書館

本節では、日本の図書館における高齢者サービスへの認識及び図書館サービスにおける高齢者像、または高齢者の公立図書館の利用行動などについて概観する。

日本の図書館は、高齢者サービスを障害者サービスとして捉えていた時期があった。1994年の日本図書館協会が出版した『すべての人に図書館サービスを：障害者サービス入門』では図書館利用の障害は大きく①物理的な障害、②資料をそのまま利用できない障害、③コミュニケーションの障害の3つに分けることができると述べ<sup>31</sup>、障害者サービスを「図書館利用に障害のある人へのサービス」と定義している。そして、高齢者を視覚障害者、聴覚障害

者、肢体障害者、内部障害者、その他の心身障害者、民族的・言語的・文化的少数者、非識字者などと並列して挙げており、高齢者を図書館利用に困難のある者と捉えていた。

しかしながら、すべての高齢者を図書館利用が困難な者と考えてよいのであろうか。医学・健康的な面では、世界保健機関（WHO）の最新データによれば、2016年時点日本の高齢者の健康寿命（日常生活に制限の無い時間）は男性が72.6年、女性が76.9年となっており、シンガポールの次に世界2位の水準である<sup>32</sup>。また、2013年における病気やけが等で自覚症状のある者についての調査では、65歳以上の者の中46.1%が自覚症状を訴えているものの、日常生活に影響のある者（健康上の問題で、日常生活動作、外出、仕事、家事、学業、運動等に影響のある者（入院者を除く））は、25.8%になっていることが明らかになった<sup>33</sup>。言い換えれば、およそ4分の3の高齢者は健康問題による制限のない生活を送っている。これらの高齢者を、図書館利用困難な者を見るのはふさわしくないと考えられる。

では、近年日本の図書館における高齢者または高齢者サービスはどのように捉えられているのか。2012年に改訂された「公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準」には、市町村立図書館の利用者に応じたサービスをリストアップし、高齢者サービスは成人サービス、児童・青少年サービス、障害者サービス、そして地域に在留する外国人サービス<sup>34</sup>と並列しており、独立した利用者カテゴリーとして扱われている。その後、2013年に出版された『図書館情報学用語辞典』第4版では高齢者サービスを「公共図書館が高齢者の身体機能や情報ニーズの特性を考慮に入れながら、その情報要求や読書要求に応えるために実施するサービス」<sup>35</sup>と定義し、高齢者サービスとして挙げている例はまだ障害者サービスの面を重視しているものもあるが、高齢者サービスは一般成人サービスとしての側面と障害者サービスとしての2つの側面を持っていると言及している。2016年に出版された『図書館ハンドブック』第6版補訂2版には、高齢者サービスを独立したサービスとして認識している姿勢を示した上、高齢者の図書館利用を促進するため、高齢者のニーズに即した資料収集、設備・施設の保証及び公共交通機関の確保を考慮すべきと論じ、高齢者向けのプログラムの実施、または高齢者のための出前サービスが望まれることが記載されている。これらのほか、アメリカ図書館協会（American Library Association, ALA）が作成した高齢者サービスのガイドを紹介している<sup>36</sup>。しかしながら、2013年の『図書館用語集』の四訂版<sup>37</sup>には「高齢者サービス」の単独の項目がなく、高齢者サービスを障害者サービスの対象の1つとして挙げている。高齢者サービスに対する、従来の範疇を超えた解釈も見られる一方で、相変わらず障害者サービスととらえる傾向もあり、高齢者サービスへの認識はまだ固まっていないと言える。

2013年に公立図書館を対象として実施した調査<sup>38</sup>では、公立図書館155館から回収したアンケート調査結果を分析している。①高齢者を対象とする資料、②高齢者のための施設・設備、③高齢者を対象とする館内サービス、④高齢者を対象とする館外サービス、⑤高齢者サービスの展望・位置づけ、について調査しているが、利用者として的高齢者の位置づけに

ついて、調査の時点で「特に意識していない」と答えた公立図書館は 54.2%であり、これから高齢者の位置づけを考える必要があると答えた公立図書館は 90%以上を占めていることが明らかになった。高齢者の位置づけを見直そうとしている図書館数は圧倒的に多いと言える。また、図書館の施設・設備といったハード面は充実しているが、高齢者を対象とした資料収集やサービスといったソフト面まだ不十分で、「高齢者に対する福祉的なアプローチの傾向が見られる」という。そのうえ、高齢者サービスをこれから「独立したカテゴリー／サービス」として捉える、と答えた公立図書館は 34.4%である。これらを踏まえ、図書館側は、高齢利用者の印象及び現在の図書館像の変化を捉える必要性がある。高齢者の位置づけは、提供する図書館サービスと関連しており、時代に適した高齢者の位置づけにより、質の高い高齢者サービスを提供できる。

次に、日本の高齢者はどのように図書館を利用しているのかについて論じる。利用頻度に関しては、2015 年の国立国会図書館による「図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査」<sup>39</sup>では、1 年間での公共図書館・移動図書館（ここでいう公共図書館とは、県立図書館、市区町村立図書館、公民館図書室などを指す）の統計を利用する。

調査結果を性別・年代別で見ると、月 1 回以上（週に 1 回以上、月に数回程度及び月に 1 回程度の合計）公共図書館を利用している 70 代以上の男性は 75.4%で 60 代男性は 73.1%を占めている。これは、男性の年代層別で、それぞれ 1 位と 2 位の結果である。女性の場合、60 代は 69.8%で 70 代以上は 68.6%となり、40・50 代を除いた年齢層と比較すると、高い数字であり、多くの高齢者にとって、図書館は日常生活の中で定期的に訪れている場所の 1 つであると考えられる。また図書館より、平日は若い世代より高齢者のほうが多く見受けられ、開館前から図書館の入り口で待っている高齢者もいるとの報告もある<sup>40</sup>。高齢者の可処分時間及び高齢化率が上昇することから考えると、今後、高齢者は図書館利用者全体の中、更に大きな割合を占めることが考えられる。

また、高齢者の図書館利用の特徴に関しては、高齢者の図書館サービスに関するニーズを明らかにすることを目的として、「図書館をよく利用する人」（週 1 回以上の頻度で図書館を利用する人）と「図書館をあまり利用しない人」（月 1 回未満の頻度で図書館を利用する人）を対象にインタビュー調査を行った研究がある。公立図書館の高齢利用者を対象とした調査で、考察では高齢者の図書館利用に関する特徴を①高齢者による図書館利用の行動は多様である、②高齢者は物理的及び情報へのアクセスしやすさを望んでいる、③交流ができる場としての図書館に対するニーズが存在する、④認知症への関心が高まっている、⑤主体的な社会参加を望んでいる、と 5 つにまとめている<sup>41</sup>。こういった高齢者の図書館サービスへのニーズを取り入れて、今後の公立図書館における高齢者サービスを考えることが必要となってくるだろう。

では、今後の公立図書館の高齢者サービスについて、公立図書館という場を具体的にどう捉えるべきかを、次節で論じたい。

## 2.4 高齢者の第三の場としての公立図書館

本章で述べたことを踏まえ、「場」を活用し、公立図書館は高齢者の第三の場として機能する可能性を論じたい。第三の場は、高齢者を含め、豊かな生活を送るためには誰にでも必要な場で、アクセスしやすく、自由に気軽に訪れることができる場を指す。そこではあらゆる人々は平等で、触れ合いや交流ができる。そして、人との関わりや交流に伴い、心身の健康増進も期待できる。日本の高齢者は他者との交流が比較的少なく、更に一部の高齢者は、既に家族や地域との交流が著しく少ない社会的孤立状態に陥っており、社会問題を生み出している。高齢者は他者との交流する機会を求めており、そのためほかの世代より第三の場を必要としていると考えられる。

公立図書館は地域の住民ならば、誰でも利用することができる社会施設で、自由に出入りができ、ひとりでも気軽に訪れることができる。超高齢社会における図書館に求められる機能を考える時に、図書館法によって定義された資料を収集・整理・保存の利用に供するほか、集めた資料や情報を活用し、交流の機会を作り、空間を活用し地域の交流の場として機能するのも選択肢の1つではないだろうか。第三の場までは言及していないが、日本図書館協会の「公立図書館の任務と目標」にも公立図書館の利用によって人との出会いや交流が期待できると掲げ<sup>42</sup>、実際、運営方針にまた利用したくなる快適な場を提供する<sup>43</sup>や人と人をつなぐ<sup>44</sup>と挙げている公立図書館もあった。そして現在、高齢者の日常生活の中で、公立図書館は依然として利用したい施設で、他世代より高い頻度で高齢者は利用している。

また、公立図書館自身も少しずつ、変わろうとしている。社会教育機関という位置づけから少し離れるかもしれないが、公立図書館の情報や資料、そして場を活用し、今後利用者の大多数となる可能性のある高齢者に、気軽に定期的に訪れることができ、他人との交流が望まれる第三の場の創出をめざし、新しいサービスを展開することもよいのではないだろうか。これによって、高齢者の交流意欲を満たし、社会的孤立を改善し、また、今後社会から孤立する高齢者の増加を防止するにも役に立つと考えられる。

## 2.5 本章のまとめ

本章では、公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性を検討することを目的とし、日本の高齢化、高齢者の現状並びに公立図書館の機能・法的な位置づけについて述べた。

2018年現在、日本の高齢化率は世界一位である。超高齢社会である日本において、高齢者の社会的孤立問題が課題となっており、その同時、他者との交流意欲がある高齢者が見られる。日本の公立図書館は社会教育施設である同時に、地域の公的施設として平等に利用できる特性を持ち、様々な人が集まっている。また、公立図書館にて、地域の人々が他者との出会い、交流を達成することが可能であるという<sup>45</sup>。

そして、公立図書館における高齢利用者の増加や、「これからの図書館サービスにおける

高齢者の位置づけを考える必要がある」と認識している公立図書館が多数ある<sup>46</sup>といった現状を踏まえ、今後、公立図書館における高齢者サービスが変化していく可能性がある。

これらを踏まえ、高齢者の交流意欲を満たし、社会的孤立を防ぐために、高齢者に他者と交流する機会を提供する必要性を指摘した。加えて、今後の公立図書館が、資料の収集・整理・提供する機能だけでなく、高齢者と他者が出会える機会を作り、交流する場として機能する可能性を論じた。最後に、これらを議論する枠組みとして、第三の場の理論を述べ、並びに公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性について言及した。

<sup>1</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成 30 年版）. 日経印刷, 2018, 229p.

<sup>2</sup> 溝上智恵子. “超高齢社会日本の現状と図書館”. 高齢社会につなぐ図書館の役割—高齢者の知的欲求と余暇を受け入れる試み. 溝上智恵子, 呑海沙織, 綿拔豊昭編著. 第一版, 学文社, 2012, p.3-24.

<sup>3</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成 19 年版）. ぎょうせい, 2007, 206p.

<sup>4</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成 30 年版）. 日経印刷, 2018, 229p.

<sup>5</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成 30 年版）. 日経印刷, 2018, 229p.

<sup>6</sup> 内閣府. 平成 22 年度 第 7 回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果（全文）.

<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/kiso/zentai/index.html>（参照 2017-11-13）

<sup>7</sup> 内閣府. 平成 17 年度 第 6 回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果（全文）.

[http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h17\\_kiso/index2.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h17_kiso/index2.html)（参照 2018-07-10）

<sup>8</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成 30 年版）. 日経印刷, 2018, 229p.

<sup>9</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成 22 年版）. 佐伯印刷, 2010, 180p.

<sup>10</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成 22 年版）. 佐伯印刷, 2010, 180p.

<sup>11</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成 22 年版）. 佐伯印刷, 2010, 180p.

<sup>12</sup> 内閣府. 高齢社会白書（平成 30 年版）. 日経印刷, 2018, 229p.

<sup>13</sup> 文部科学省. “日本の公共図書館”. 諸外国の公共図書館に関する調査報告書（2005）.

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/toshou/houkoku/06082211/013.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/toshou/houkoku/06082211/013.pdf)（参照 2018-08-10）

<sup>14</sup> 糸賀雅児. 教育委員会制度改革と図書館. 図書館雑誌. 2014, 108(2), p.108-111.

<sup>15</sup> 東京都足立区. 地域のちから推進部. <https://www.city.adachi.tokyo.jp/chiiki/ku/kuse/soshiki-chikara.html>（参照 2018-12-28）

<sup>16</sup> 小田原市. 小田原市立図書館. <http://www.city.odawara.kanagawa.jp/public-ifacilities/library/libra/toshokan.html>（参照 2018-12-28）

<sup>17</sup> 久留米市. 市民文化部中央図書館.

<https://www.city.kurume.fukuoka.jp/1500soshiki/9128library/index.html>（参照 2018-12-28）

<sup>18</sup> 日本図書館協会. 公立図書館の指定管理者制度について—2016（案）.

<http://www.jla.or.jp/Portals/0/data/kenkai/siteikanrikenkai2016an.pdf>.（参照 2018-06-20）

<sup>19</sup> 山口源次郎. 図書館法第 17 条（無料制）の意義と解釈：図書館専門委員会報告批判. 図書館界. 1999, 51(4), p.231-238.

<sup>20</sup> 岸本岳. “公立図書館における「無料の原則」”. 新図書館法と現代の図書館. 塩見昇, 山口源次郎編著. 日本図書館協会. 2009, p.187-200.

<sup>21</sup> 永田治樹. “図書館の制度”. 図書館制度・経営論. 永田治樹編著. 藤原印刷株式会社, 2016, p.19.

<sup>22</sup> 塩見昇. “現代社会と図書館”. 図書館概論. 塩見昇編著. 四訂版, 日本図書館協会, 2015, p.36.

<sup>23</sup> 文部科学省. 人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）（2018）.

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2018/12/21/1412080\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/12/21/1412080_1_1.pdf)（参照 2018-12-26）

<sup>24</sup> Wiegand A. Wayne. To Reposition a Research Agenda: What American Studies Can Teach the LIS Community About the Library in the Life of the User. *The Library Quarterly*, 2003, 73(4), p.369-382.

<sup>25</sup> 塩見昇. “地域社会と図書館”. 図書館概論. 塩見昇編著. 三訂版, 日本図書館協会, 2014, p.115.

<sup>26</sup> 日本図書館協会. 公立図書館の任務と目標（2004）.

<http://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/236/Default.aspx>（参照 2017-11-27）

<sup>27</sup> 三村敦美. シニア・サービス考：「自己学習機能」の実践例を中心に. 現代の図書館. 2014, 52(3), p.137-148.

- 
- <sup>28</sup> 日本図書館協会町村図書館活動推進委員会. 図書館による町村ルネサンス L プラン 21 : 21 世紀の町村図書館振興をめざす政策提言. 日本図書館協会, 2001, 64p.
- <sup>29</sup> 静岡市立中央図書館. 静岡市立図書館の使命、目的とサービス方針 (2018).  
[http://www.toshokan.city.shizuoka.jp/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=2029](http://www.toshokan.city.shizuoka.jp/?action=common_download_main&upload_id=2029). (参照 2018-06-18)
- <sup>30</sup> 秋田県立図書館. 秋田県立図書館運営方針 (平成 30 年度) .  
<https://www.apl.pref.akita.jp/about/about-policy> (参照 2019-01-05)
- <sup>31</sup> 日本図書館協会障害者サービス委員会. すべての人に図書館サービスを : 障害者サービス入門. 日本図書館協会, 1994, p.20.
- <sup>32</sup> World Health Organization. Healthy life expectancy (HALE) Data by country (2018).  
<http://apps.who.int/gho/data/view.main.HALEXv?lang=en> (参照 2018-06-14)
- <sup>33</sup> 内閣府. 高齢社会白書 (平成 28 年版) . 日経出版, 2016, 180p.
- <sup>34</sup> 文部科学省. 公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準 (2012).  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/01\\_1/08052911/1282451.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1282451.htm) (参照 2018-08-21)
- <sup>35</sup> 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学用語辞典. 第 4 版, 丸善出版株式会社, 2013, p.66.
- <sup>36</sup> 日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編. 図書館ハンドブック. 第 6 版補訂 2 版, 2016, 日本図書館協会, p.109-110.
- <sup>37</sup> 日本図書館協会用語委員会編. 図書館用語集. 四訂版, 2013, 368p.
- <sup>38</sup> 呑海沙織, 志賀渉, 溝上智恵子. 公共図書館における高齢者サービスの現状. 日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集. 2014, p.45-48.
- <sup>39</sup> 国立国会図書館. 図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査 (2015).  
[http://current.ndl.go.jp/FY2014\\_research](http://current.ndl.go.jp/FY2014_research). (参照 2018-03-12)
- <sup>40</sup> 室谷牧子. 市民を活かす図書館、高齢化社会への期待: 熊取町のひまわりカフェ(認知症カフェ)の取り組みを通して. みんなの図書館, 2017, (484), p.2-11.
- <sup>41</sup> 岡本一世, 溝上智恵子. “第 8 章 高齢者の図書館サービス利用とニーズ”. 超高齢社会と図書館 : 生きがいづくりから認知症支援まで. 国立国会図書館関西館図書館協力課, 国立国会図書館, 図書館調査研究レポート, 2017, (16), p.121-140.
- <sup>42</sup> 日本図書館協会. 公立図書館の任務と目標 (2004).  
<http://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/236/Default.aspx> (参照 2017-11-27)
- <sup>43</sup> 静岡市立中央図書館. 静岡市立図書館の使命、目的とサービス方針 (2018).  
[http://www.toshokan.city.shizuoka.jp/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=2029](http://www.toshokan.city.shizuoka.jp/?action=common_download_main&upload_id=2029). (参照 2018-06-18)
- <sup>44</sup> 秋田県立図書館. 秋田県立図書館運営方針 (平成 30 年度) .  
<https://www.apl.pref.akita.jp/about/about-policy> (参照 2019-01-05)
- <sup>45</sup> 日本図書館協会. 公立図書館の任務と目標 (2004).  
<http://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/236/Default.aspx> (参照 2017-11-27)
- <sup>46</sup> 呑海沙織, 志賀渉, 溝上智恵子. 公共図書館における高齢者サービスの現状. 日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集. 2014, p.45-48.

### 3. 「第三の場」とは

本章では第三の場について掘り下げて論述する。まず、オルデンバーグが著書『偉大な良き場』(The Great Good Place)にて最初に提唱したこの概念の枠組、及び第三の場が提唱された理由・背景を整理する。次に、図書館情報学領域の先行研究にて第三の場はどのように捉えられ、理解されているかを述べる。最後に高齢者との関連に触れつつ、本研究における第三の場の定義についても言及する。

#### 3.1 オルデンバーグによって提唱された第三の場

アメリカの都市社会学者オルデンバーグは、アメリカ社会の都市環境とそれが生んだ人々の孤独に注目し、コミュニティに再び活気をつけるための解決策として『偉大な良き場』を出版した。彼によると、個人が元気よく日常生活を送るには、以下の3つの領域が重要であるという。1つ目は家、2つ目は報酬を伴うか生産的な領域、3つ目は「包括的に社交的で、コミュニティの基盤を提供しつつそのコミュニティを謳歌する」<sup>1</sup>領域である。その3つの場をオルデンバーグはそれぞれ、第一の場、第二の場と第三の場と名付けた。

第一の場は「家」である。家は一番重要な場所で、成長する子どもにとって最初に定まった、予想のつく環境で、その子の発達に大きな影響を与える。そして個人が仕事に関心を持つ前から、仕事の世界から個人が離れたあとも、家はずっと人を守る。

第二の場は「仕事場」であり、そこには個人を単一の生産的な役割へと変える。仕事場は個人の競争意識を高めて、仕事仲間を超える意識をかきたてる。その同時に生計の手段を提供し、生活の質を向上させ、多数の人が自ら行うことができない、人生において過ごす時間の体系化を行う。

更にオルデンバーグは第三の場を「インフォーマルな公共生活の中核な環境」<sup>2</sup>という意味で使っている。第三の場は「居心地がとびきりよい」場で、人が定期的、自発的、非形式的に、楽しく参加できる集いのために場を提供する公共の場所の総称である。第三の場が持つ特徴は以下のようにまとめることができる：

①中立な領域 (On neutral ground)：個人が出入りやすく、誰もが接待役を要求されずに心地よくいられる。

②人を平等にすること (The third place is a leveler)：包容力がある場で、形式張った会員資格や入場拒否の基準を設けず、一般の人々がアクセスできる。

③会話が主な活動であること (Conversation is the main activity)：第三の場を最も表す特徴は、楽しく面白い会話である。

④アクセスしやすく・協調的であること (Accessibility and accommodation)：時間的、場所的にアクセスしやすく、ひとりでも気軽に行ける知り合いが見つかる場。

⑤常連がいること (The regulars)。

⑥建物が目立たないこと (A low profile) : 建物は人々の印象に残らなく、利用者に日常生活に溶け込む外観をしている。

⑦陽気で遊び場的な雰囲気であること (The mood is playful) : 陽気な雰囲気があり、遊びの精神は何よりも重要である。ここでは喜びや受容が不安や疎外を制する。

⑧家を離れた時のもう 1 つの家 (A home away from home) : 家のように居心地のよい場所を提供し、常連に帰属感を感じさせる。

つまり以上の特徴を満足していれば、どんな公共の場も第三の場と言える。なお、良き「第三の場」を持つことによって個人が受ける 4 つの利益について、オルデンバーグは以下のように述べている :

①目新しさ (Novelty) : 多彩な社会背景の人々が集まる場で、そこでの話題は変化に富んでおり、新鮮味があって、そして視点に多様性がある。人々お互い刺激し合うことで目新しさを生み出す。

②積極的な人生観 (Perspective; Positive, valuable outlook on life) : 幅広い層の人々がいる状況で気晴らしと交流と組み合わせ、成員の集まりとその成員たちの知恵を提供することによって健全な人生観をもたらす。

③元気の回復 (Spiritual Tonic) : 集う成員の間の距離がコンフォートで、元気がもらえる。第三の場にいる成員は共通の感情的傾向がある——喜び、快活、気晴らしさ。

④ひとまとまりの友達 (Friends by the set) : 友達は「ひとまとまり」の形で提供される。成員の付き合いが社交的、特定の友人に依存しない。必要なのは出入りする時にこの場にいくつかの見慣れた顔がある。

このように素晴らしく、「家と仕事の領域を超越した」<sup>3</sup>の場が、なぜ第 3 位におかれているだろう。同書では、2 つの根拠を挙げている。1 つ目は個人の「場」への依存度である。個人は例え仕事をしなくても家を必要とし、そして大半の人は友達や近隣住民と付き合いより仕事を必要としているだろう。2 つ目の理由は、個人がこの 3 つの場に滞在する時間と関連する。基本的には個人は家にいる時間が一番多く、次には仕事場、最後は第三の場に滞在する時間である。よってこのような順位付けが妥当だとオルデンバーグは考えている。しかしながら一方で、3 つの場の関係は三脚台の脚のような関係であると指摘している。個人の生活において、これらの 3 つの場はどれも不可欠であると言えよう。

同書は改めてアメリカの現代社会における第三の場の必要性を喚起する著書であり、第三の場という用語を挙げたあと、第三の場という用語自体は産業革命及びそれが生活をプライベート領域とパブリック領域に分けたことの影響力への仕方ない譲歩であると補足している。なぜなら産業化による家庭と仕事場の分離より以前に第三の場は既に存在しているからである。第三の場の重要度は、文化的背景や時代によって変化してきた。文字を持たない社会では第三の場は最も重視され、古代ギリシアやローマでも、「アゴラ」や「フォルム」のような公共の広場の存在感が強かった。ところが、第二次世界大戦後アメリカ



に新たに誕生したコミュニティでは第三の場の存在感も増殖力もなく、アイルランドやフランス、ギリシアと比べ、第三の場は弱い三番目にある。オルデンバーグは家と仕事から離れた生活があった、かつての社会を軽蔑するアメリカの都市計画家と住宅開発業者を厳しく批判し、この問題を解決しようとして、第三の場という用語を呈した。

### 3.2 先行研究における第三の場への捉え方

本節では、オルデンバーグが提唱した第三の場の概念を踏襲し、図書館に適用する研究と、その概念を更に発展させた研究をいくつか取り上げる。

オルデンバーグが提唱した概念に基づき、第三の場の重要性や意義を述べた研究は多数ある。リンらは第三の場という存在は、現代社会の問題を改善できると主張している<sup>4</sup>。リンらによると、現代社会は多文化主義とデジタル化によって、社会の断片化が発生し、コミュニケーション・ギャップと政治への参与の低下が問題になっている。シンガポールもそのような社会の例である。そして、第三の場がその解決策として挙げられた。何故なら、そこでは有効なコミュニケーションと社会の積極的な参加が醸成されており、社会の断片化に対抗する能力も持っているためである。

また、モンゴメリーとミラーは、カレッジや大学は学生のために教室以外の交流と学習の場である第三の場を作らなければならないと呼びかけている<sup>5</sup>。彼らの研究では、大学図書館と第三の場の特徴は緊密に関連し、大学図書館が第三の場になることで、教員や学生などの経済的、社会的、学術的に背景の異なった利用者が、コミュニティを作り出すことができると指摘した。更に、第三の場として大学図書館は、学生の学校生活において、愛着と帰属感を感じさせることができるため、卒業後も卒業生は母校とのつながりを強く感じることができ、大学図書館は第三の場として成功できるとまとめられている。

更に、ポーラは、図書館のような現実的な第三の場は重要であると報告し、図書館職員はコミュニティの健康のために、青少年に良い第三の場の選択肢を提供する使命があると論じている<sup>6</sup>。その事例報告には、青少年はコミュニケーションへの需要が高いにもかかわらず、交流の場が極めて少ない結果、仕方なく SNS というバーチャルな世界へ依存しているという現状を明らかにした。バーチャルな世界ももちろん大切であるが、現実の第三の場も依然として重要であると指摘している。更に、第三の場は誰にでも平等であるため、いじめ問題の軽減に繋がる力も持っていると述べている。

一方、新しい見解を提起した研究もある。例えば、フィッシャーらは図書館という場を理解するにはオルデンバーグの第三の場の概念以外に、ほかの要素を加える必要があると認識している<sup>7</sup>。彼らによれば、第三の場は場の公共的、社会的側面に厳密に焦点を当てており、社会における図書館の役割を理解する際の方向を示しているが、図書館という場を理解するには「情報」という概念が抜けていると指摘している。

また、久野は、第三の場としての図書館に関する先行研究を整理し、その中の第三の場を場所全体にあてはめようとした研究を批判し、第三の場を多元的な1つの場（空間）と

捉えることが必要であると論じている<sup>8</sup>。この研究では第三の場を「利用者が多様な関係性と活動の中で蓋然的に創出する領域および生活空間の一つを特徴づける概念とする」<sup>9</sup>として考察を行った。同じく久野の研究では、良き第三の場として機能するには、オルデンバーグが提唱した8つの特徴以外、「世話人」という9番目の特徴が必要であるとしている<sup>10</sup>。彼女は第三の場には、必ずオーナーや従業員などの世話人がおり、来客をもてなし、そしてその場の安全と秩序を守り、居心地良さを保っていると指摘している。同時に世話人は近隣のあらゆる出来事や人々を知っているため人と人をつなぎつけ、地域の出来事や課題についての議論を促すキーパーソンともなる。それゆえ、良い第三の場には世話人が必要だと主張している。そのほか、小林と山田らが第三の場は日本ではオルデンバーグが提唱した特徴とは必ずしも一致しない形で展開しているとし、日本の第三の場は集いや交流できる居心地の良い場所つまり交流型と、人を気にしないでいられる場所つまりマイブレイス型に分類している。研究ではこの2つの類型を相反するタイプと考え、どのようにバランスさせながら持続させていくのかは、地域の第三の場がいかにあるべきかという問題と共に、解決しなくてはならないである問題と述べている<sup>11</sup>。

オルデンバーグが提唱した後、すぐに注目が集まった第三の場は、図書館情報学を含め、様々な領域で多様な研究がなされてきた。図書館情報学で言えば、オルデンバーグが提唱した第三の場の枠組をそのまま使って考察した研究<sup>12,13</sup>や、第三の場の新しい特徴を掲げ<sup>14</sup>、第三の場を図書館に適用する時に情報という概念を加えて考察する必要がある<sup>15</sup>と論じ、更に日本式の第三の場を呈した研究<sup>16</sup>もある。日本においては、学校図書館を対象とした久野の事例研究があるが、学校図書館より広く開かれており、第三の場の概念との親和性が高いと考えられる公立図書館に関する事例研究は管見の限り見当たらない。よって、本研究では公立図書館を研究対象として、考察を行う。同時に、高齢者は今後図書館利用者のマジョリティーになるのではないかという仮説を踏まえ、調査協力者を高齢者に絞る。なお、最初に提唱した第三の場の概念と枠組を使い調査を行い、先行研究の業績を踏まえ、考察していく。

### 3.3 本研究における第三の場

3.1 では、オルデンバーグが最初に提唱した第三の場について述べ、3.2 ではオルデンバーグが提唱した第三の場に関する理論的發展を概観した。本節では高齢者と第三の場の関係を分析し、本研究における第三の場を論考する。

まず、退職した高齢者には仕事場という第二の場がないため第三の場も存在しないのではという疑問について考える。そのためにはここでもう一度、オルデンバーグの論述を振り返る必要がある。彼は第一の場、第二の場と第三の場は個人の生活という三脚台の脚であると例え、人々が楽しく満足できる生活を送るにはこの3つの場を持つことが重要であると考えている。実は『偉大な良き場』の中では、仕事場を持っていない子どもにとっての第三の場の意義も論述されている。言い換えれば、オルデンバーグは第三の場を第一の

場と第二の場があるから存在する場と考えているのではなく、家庭と仕事場と同時に社会に存在しており、高齢者にも子どもにも依存されている場として理解している。よって、例え退職して仕事場がなくなったとしても個人にとって、第三の場は依然存在すると考えられる。

実のところ、退職後、個人の第三の場への需要はむしろ強くなる。オルデンバーグによると、他人との触れ合いがあまり多くなると、人は落ち込みやすくなるという。退職により職場での付き合いがなくなり、年齢を重ねると同時に昔のように動き回ることが難しくなる。そして、一人でいる時間が多くなってくると、高齢者は「理不尽な恐怖を募らせる」<sup>17</sup>可能性さえある。しかし、会話や人との付き合いによってこのような状況が改善できる。そのため高齢者たちは「他の年代より人との触れ合いに飢え、近所の人々に興味を抱いており、人付き合いやコミュニケーションの大切さをより実感している」<sup>18</sup>という。しかしながら、コンビニ店員と会話のような最低限のコミュニケーションや接触だけでは心の健康や前向きな人生観に充分ではない。第三の場は、退職した人々が他の人々と接触を保つ手段であり、上手くできれば古い世代と若い世代と交流する手段を提供し、幅広い層の人々がいて、気晴らしと交流ができるため、そこを訪れる人々に、もちろん高齢者にも健全な人生観を提供する上で役立っていると考えられる。

以上の論述を踏まえ、本研究では、第三の場は、誰もが必要で、気軽に訪れることができ、人との交流及び、それに伴う心身の健康増進の獲得が期待できる様な場だと考える。

### 3.4 本章のまとめ

オルデンバーグは第三の場を「インフォーマルな公共生活の中核な環境」<sup>19</sup>であると定義し、そのような場は家や職場のように、個人の生活に不可欠であることを強調した。第三の場である公共の場は、以下のような共通の8つの特徴があるとしている。①中立な領域、②人を平等にすること、③会話が主な活動であること、④アクセスしやすく・協調的であること、⑤常連がいること、⑥建物が目立たないこと、⑦陽気で遊び場的な雰囲気、⑧家を離れた時のもう1つの家であること、という8つの特徴である。なお、これらの共通の特徴により、第三の場は個人に、①目新しさ、②積極的な人生観、③元気の回復、④ひとまとまりの友達の4つの利益を提供することができると論じた。

第三の場は多様な領域にて注目されており、図書館情報学では、第三の場を使い図書館を考察した先行研究が散見される。そのままオルデンバーグの論述を踏まえ、図書館が第三の場となる意義を論じた研究もあれば、更にその概念を発展させた研究も見られる。一方、高齢者に焦点を当て、公立図書館における第三の場の機能について検証した事例調査は、管見の限り見当たらない。オルデンバーグは、退職後に第三の場への需要は強くなると論じ、高齢者に対する第三の場の重要性を強調している。加えて、第三の場は、高齢者も含め、誰もが必要で、気軽に訪れることができ、人との交流及び、それに伴う心身の健

康増進の獲得が期待できる様な場であると考えられる。これらを踏まえ、本研究では公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性を考察する。

- 
- <sup>1</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, p.14.
  - <sup>2</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, p.16.
  - <sup>3</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, p.16.
  - <sup>4</sup> Lin Hui, Pang Natalie, Luyt Brendan. Is the library a third place for young people? . *Journal of Librarianship and Information Science*. 2015, 47(2), p.145-155.
  - <sup>5</sup> Montgomery E. Susan, Miller Jonathan. *The Third Place: The Library as Collaborative and Community Space in a Time of Fiscal Restraint*. *College & Undergraduate Libraries*. 2011, 18(2-3), p.228-238.
  - <sup>6</sup> Brehm Heeger Paula. A Tie for Third Place: Teens need physical spaces as well as virtual places. *School Library Journal*. 2006, 52(7), p.27.
  - <sup>7</sup> フィッシャー・E.カレンなど. “場としてのシアトル公立図書館：中央図書館におけるスペース、コミュニティ、情報の再概念化”. ブッシュマン・E・ジョン、レッキ・J・グロリア編著. 場としての図書館. 川崎良孝、久野和子、村上加代子訳. 京都大学図書館情報学研究会. 2008, p.199-237.
  - <sup>8</sup> 久野和子. 「第三の場」としての学校図書館. *図書館界*. 2011, 63(4), p.296-313.
  - <sup>9</sup> 久野和子. 「第三の場」としての学校図書館. *図書館界*. 2011, 63(4), p.303.
  - <sup>10</sup> 久野和子. フィンランドにおける「第3の場」(Third Place)としての図書館. 神戸女子大学文学部紀要, 2016(49), p.101-114.
  - <sup>11</sup> 小林重人, 山田広明. マイブレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究 ―石川県能美市の非常設型「ひよっこりカフェ」を事例として―. *地域活性研究*, 2014, 5, p.3-12.
  - <sup>12</sup> Lin Hui, Pang Natalie, Luyt Brendan. Is the library a third place for young people? . *Journal of Librarianship and Information Science*. 2015, 47(2), p.145-155.
  - <sup>13</sup> Montgomery E. Susan, Miller Jonathan. *The Third Place: The Library as Collaborative and Community Space in a Time of Fiscal Restraint*. *College & Undergraduate Libraries*. 2011, 18(2-3), p.228-238.
  - <sup>14</sup> 久野和子. フィンランドにおける「第3の場」(Third Place)としての図書館. 神戸女子大学文学部紀要, 2016(49), p.101-114.
  - <sup>15</sup> フィッシャー・E.カレンなど. “場としてのシアトル公立図書館：中央図書館におけるスペース、コミュニティ、情報の再概念化”. ブッシュマン・E・ジョン、レッキ・J・グロリア編著. 場としての図書館. 川崎良孝、久野和子、村上加代子訳. 京都大学図書館情報学研究会. 2008, p.199-237.
  - <sup>16</sup> 小林重人, 山田広明. マイブレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究 ―石川県能美市の非常設型「ひよっこりカフェ」を事例として―. *地域活性研究*, 2014, 5, p.3-12.
  - <sup>17</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, p.49.
  - <sup>18</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, p.50.
  - <sup>19</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, p.16.

#### 4. 公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性に関する調査

本章は、日本の公立図書館は高齢者の第三の場として機能する可能性を明らかにするために実施したつくば市立中央図書館（以下、「中央図書館」）の高齢利用者を対象とした半構造化インタビュー調査の概要および結果について述べる。まず、つくば市の高齢化の現状及び「中央図書館」に関して、次にインタビュー調査の方法・質問項目・調査結果についてまとめる。最後に、第三の場の枠組みを用いて、公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性について考察する。

##### 4.1 つくば市及びつくば市立中央図書館の概要

つくば市では 1990 年代に市立図書館を建設したが、2018 年現在、市長が公約として中央図書館に関連する事業を掲げている。また、つくば市は、2018 年から新しい図書館の検討を開始し<sup>1</sup>、「つくば市図書館懇話会」を設置する<sup>2</sup>など、これからの「中央図書館」のあり方について議論しており、これらの検討には市民からの意見も取り入れられている。更に、2018 年度から土日の開館時間を延長するほか、開館日を増すなど、市民がより利用しやすい図書館を目指している。本研究では「中央図書館」を事例として取り上げる。

##### 4.1.1 つくば市の高齢化の現状

つくば市は 1987 年から市制施行され、2007 年に特例市へ移行した都市である。茨城県の南西部に位置し、2018 年 11 月現在の人口は 23 万 7039 人で、総世帯数は 104,555 である<sup>3</sup>。現在、茨城県には合計 32 個の市があり<sup>4</sup>、つくば市の人口総数は県庁所在地である水戸市に次いで 2 位である<sup>5</sup>。また、世界有数の研究機関が集積しており、研究者や留学生など多くの外国人が住んでいることもつくば市の特徴として挙げられる。2017 年 10 月現在、外国人住民数は 9,106 人であり、市の全体の人口の約 4.1%に当たる<sup>6</sup>。

高齢者を取り巻く現状について、2018 年 10 月現在のつくば市の高齢化率は 20.1%と、茨城県の 44 の市町村の中ではもっと低い水準である<sup>7</sup>。また、高齢化率について、茨城県の全体が 28.3%<sup>8</sup>、日本全国の平均値 27.7%<sup>9</sup>であることを踏まえると、つくば市の高齢化率は比較的低いレベルである。しかし、7 つの日常生活圏域別（図 4-1 を参照）でみると、2017 年 10 月現在、筑波地区（34.7%）と荃崎地区（36.1%）の 2 つの地域が 30%を超える高い高齢化率であり、高齢化率が一番低い谷田部東地区（10.6%）の 3 倍以上<sup>10</sup>である。これらを踏まえると、つくば市は生活圏域ごとの高齢化率の差が著しいことが読み取れる。

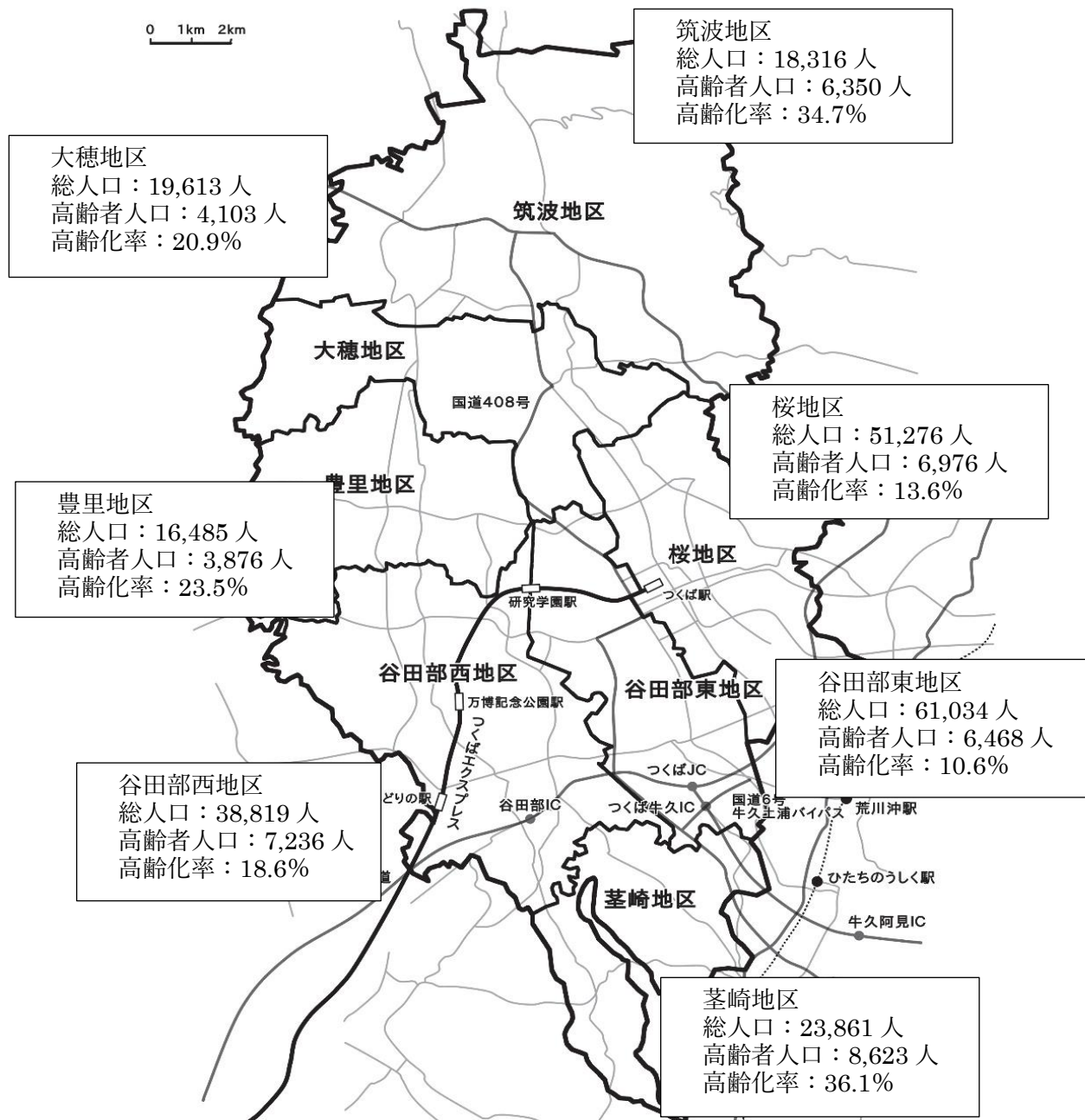


図 4-1 つくば市の日常生活圏域及び高齢化率（注：つくば市高齢者福祉計画（第7期）に基づき筆者作成）

#### 4.1.2 つくば市の高齢化対策および図書館に関わる計画

2015 年より、つくば市では従来の総合計画に代わり、目指すまちの姿やその実現のため

の基本的な方針等を記載した「つくば市未来構想」と、市の主要な施策等を示した「つくば市戦略プラン」（以下、戦略プラン）に基づきまちづくりを行っている。戦略プランにおいて、1)人を育み、みんなで支えあうまち、2)快適で安全・安心を実感できるまち、3)環境にやさしく、次世代へつなぐまち、4)つくばの資源をいかし、世界へ貢献するまち<sup>11</sup>の4つのまちづくりの理念に基づいて、基本施策・個別施策を策定している。次に、高齢化対策及び「中央図書館」に関わる個別施策を取り上げる。

#### 4.1.2.1 つくば市高齢者福祉計画

つくば市の高齢化に関連する計画の核となる「つくば市高齢者福祉計画」<sup>12</sup>（以下、福祉計画）は、茨城県が策定している「いばらき高齢者プラン 21」<sup>13</sup>といった上位計画や関連計画との整合、戦略プランとの連携を図っている計画である。

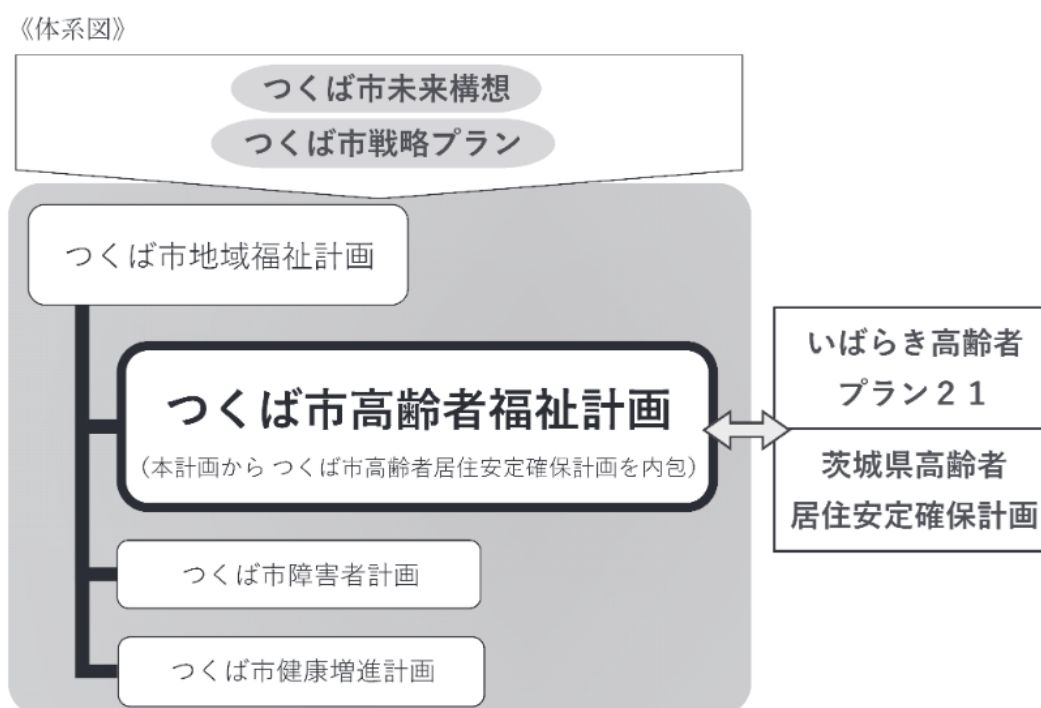


図 4-2 「つくば高齢者福祉計画」体系図（「つくば高齢者福祉計画（第7期）」より引用）

最新の第7期（2018年策定）の福祉計画の期間は、2018年度から2020年度までのものであり、2035年度までに地域包括ケアシステムを形成することを目標としている。また、つくば市高齢者福祉計画では、地域包括ケアシステム構築の観点から、「市のすべての高齢者が住み慣れた自宅や地域で安全で、安心して生活ができるよう、『高齢者』『介護者』『地域』の3つの視点から、市民や民間企業やNPO法人と協働・連携による地域共生社会の実現に向けて、ともに推進していくこと」<sup>14</sup>を目的として掲げている。施策の基本視点は、1)高齢者の生きる力を支える、2)介護者の介護する力を支える、3)地域で高齢者の生活を支え

る、の3つである。

#### 4.1.2.2 図書館に関連する計画

つくば市の図書館に関連する計画として、まず「つくば市生涯学習推進基本計画」(以下、基本計画)が挙げられる。これは市の生涯学習関連事業を効率よく推進するため、2006年から施行されている計画であり、「つくば市戦略プラン」の施策の1つでもある。基本計画に基づき、これまで、生涯学習施設である図書館の施設設備の改善、図書館の最新情報提供、カウンターへの司書の常駐の実現のほか、市民の自主学习への支援、図書館事業の拡充など、多様な取り組みが行われてきた。

2016年から計画は第2次に入り、今後の計画の展開として、図書館機能の充実が方向性として言及されている。その他、学習情報の提供と相談体制の整備、学習意欲の啓発、地域の課題解決や大学・研究機関との連携による科学事業の推進、市民同士が交流できる施設の充実などの取り組みについても、「中央図書館」が関係部署として名前が挙げられている<sup>15</sup>。

本節の最初に述べたが、「つくば市生涯学習推進基本計画」の他、つくば市の図書館に関する計画として、2017年に掲げられたつくば市の市長公約ロードマップにおける、図書館に関する2つの公約事業が挙げられる。「市民に愛される新しい『市民図書館』を作るための、多世代・多分野の代表からなるプロジェクト」は2017年度から開始され、課題抽出などを行っており、市民図書館検討チームを設置するとともに、webアンケートや庁内アンケートの実施や先進地図書館の視察などを行った<sup>16</sup>。2018年度には「新しい図書館」の検討を目的として、つくば市図書館懇話会が設置された。また、つくば市は「中央図書館」に関する計画として、「利用しやすい図書館とするための開館日の増加と開館時間の延長」の実現を掲げ、試験的開館時間の延長と市民意見の収集を行い、2018年度から土・日曜日の開館時間を延長し、開館日数も増やしている<sup>17</sup>。この2つの公約事業は、2018年の「中央図書館」の重点事業と位置づけられ、市民の意見を収集、反映しながらつくば市の図書館サービスの向上を図っている姿勢が伺える。

#### 4.1.3 つくば市立中央図書館

「中央図書館」は1990年に開館し、2018年現在、つくば市における唯一の市立図書館である。つくば市未来構想を受けて、「中央図書館」は市民の生涯学習を支援すると同時に、文化情報資源を受発信する「知」の拠点として、市民の要求に的確に応えることを運営の基本方針としている<sup>18</sup>。

「中央図書館」は茨城県近代美術館との複合施設「つくば文化会館アルス」として建設され、館内には多目的ホールである「アルスホール」を有する。つくば市吾妻2丁目8番地という、つくば市の中心地区に位置している。市内のコミュニティバス「つくバス」の7つの路線の中4つの路線の停車駅であり、つくばエクスプレスの始発駅「つくば」から徒歩3分で、公園、郵便局や大型ショッピングセンターからも近い。また、つくば市の中央公園に面しており、緑に包まれている。



施設面積は 3502m<sup>2</sup> で、図 4-3 のとおり、1 階には閲覧スペース、開架書庫、保存書庫、自動車図書館車庫などがあり、2 階にはアルスホールや会議室、「中央図書館」の事務室が設けられている。分館はないが、つくば市の 17 の地域交流センター（旧公民館）のうち、筑波、小野川、谷田部、荻崎の 4 箇所に図書室を設けている。また、自動車図書館「おひさま」号と「あおぞら」号をつくば市の 48 箇所のステーションに巡回させている。

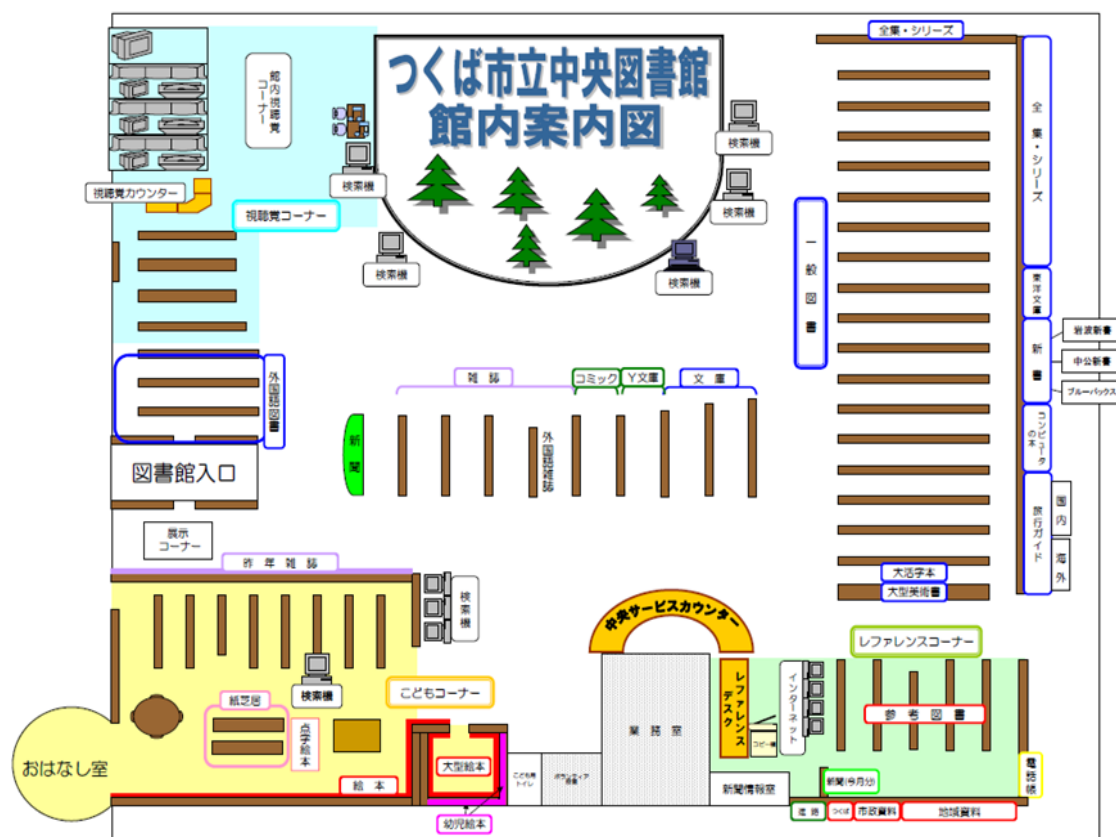


図 4-3 「中央図書館」館内案内図（つくば市立中央図書館ホームページ<sup>19</sup>より引用）

「中央図書館」が提供するサービスについて、「中央図書館」が 2018 年 3 月に 10 代以上の利用者を対象として調査したところ、全体の満足度は 83%であり、スタッフの対応とレファレンスサービスが評価されていると同時に、開館時間とコレクションの数や種類が今後の課題として挙げられた<sup>20</sup>。高齢者サービスに関しては、乳幼児・児童サービス及び図書館利用に支障にある人のサービスと並列している。主な高齢者サービスとして、大活字本や録音資料を収集・提供が挙げられる。

2017 年度現在、「中央図書館」の所蔵資料は 311,721 冊、年度初の人口 227,260 人に対して年間の来館者数は 514,588 人、貸出の総数は 964,123 冊（点）である<sup>21</sup>。65 歳以上の利用者についての統計はないが、2018 年に公開された「平成 30 年度 つくば市の図書館概要」<sup>22</sup>によると、「中央図書館」の有効登録人数は総計 43,540 人で、個人の登録者数は

43,388 人である。その中 60 歳以上の登録人数は 5,622 人で、全体の 13.0%を占めている。また貸出人数については、60 歳以上の貸出人数は 36,709 人で、全体の 20.0%を占めている。

## 4.2 調査概要

### 4.2.1 調査目的

本調査の目的は、「中央図書館」を利用する高齢者の図書館利用の頻度、利用の目的、つくば市の「中央図書館」へのイメージなどを明らかにすることである。

### 4.2.2 調査対象

本調査では「中央図書館」に実際に来館して利用している高齢者 10 名を対象に調査を実施した。調査者の募集について、2018 年 8 月 8 日から 10 月 10 日まで、「中央図書館」の協力と同意を得て、調査内容と応募方法を記載したチラシを「中央図書館」のカウンターに置くほか、「中央図書館」の入口で図書館の利用者への声掛けによる募集を行った。

インタビューの調査協力者、実施日時・場所などの調査概要は、表 4-1 のとおりである。

### 4.2.3 調査項目

本調査では、オルデンバーグが提唱した第三の場の特徴及び第三の場が個人にもたらす利益に基づいて、質問項目を考案した。年齢など調査協力者の属性に関する質問項目も含め、計 14 の質問項目を設定し、質問項目は下記のとおりである。

- 1) 「中央図書館」利用について（利用頻度、アクセス、自宅から「中央図書館」までかかる時間）
- 2) 「中央図書館」を利用する目的
- 3) 若い時や子供の時の図書館利用について
- 4) 「中央図書館」のイベントや行事の参加状況（経験の有無とその理由）
- 5) 「中央図書館」内での他者との会話（経験の有無、会話の対象及び内容）
- 6) 「中央図書館」の雰囲気について（全体的な雰囲気への印象、活発な雰囲気を感じられる場所）
- 7) 「中央図書館」を利用して得た新しい発見や出会い
- 8) 「中央図書館」を利用して楽しい経験、元気をもらった経験
- 9) 図書館以外に、日常の中用がないときでも気軽に行ける場所
- 10) 日常の中、用がないときでも気軽に行ける場所と図書館との共通点
- 11) 日常の中、用がないときでも気軽に行ける場所と図書館との違い
- 12) 「中央図書館」内で気軽に行ける、他者との会話ができる空間を作って欲しいかとその理由
- 13) 「中央図書館」はどのような場所で、どんな意味を持っているのか

#### 14) 本人について（年齢、仕事、家族構成）

##### 4.2.4 調査方法

半構造化法による個別インタビューとし、インタビュアーの質問に対して調査協力者が回答する形式で行った。1人当たりの所要時間は約30分から40分とし、インタビュー内容は調査協力者の同意を得てICレコーダーに記録し、内容分析には音声から起稿した逐語録を使用した。

なお、本調査の実施に当たり、インタビュー開始前に本調査の目的や個人情報の取り扱い等について口頭で説明のうえ、「高齢者の図書館利用実態調査に関するインタビュー調査の説明」を手渡し、同意書に調査協力者の署名をもらうなどして十分な倫理的配慮を行った。

表 4-1 調査協力者の内訳

	年代	性別	インタビュー日時	実施時間	インタビュー場所
A	70代前半	男性	2018年 9月4日（火）	10:39~11:15	筑波大学筑波キャンパス春日 エリア 7D442
B	70代前半	男性	2018年 9月5日（水）	14:04~14:35	筑波大学筑波キャンパス春日 エリア 7D342
C	70代前半	男性	2018年 9月6日（木）	10:30~11:20	筑波大学筑波キャンパス春日 エリア 7D322
D	70代	女性		14:03~15:02	筑波大学筑波キャンパス春日 エリア 7D321
E	70代前半	女性	2018年 9月17日（月）	12:45~13:25	つくば市立中央図書館 2階館長応接室
F	70代前半	男性		15:06~15:45	
G	70代前半	女性	2018年 9月20日（木）	13:00~13:42	
H	70代後半	女性	2018年 9月23日（日）	16:20~17:00	
I	70代前半	女性	2018年 9月24日（月）	13:12~13:43	
J	60代後半	女性	2018年 10月10日（火）	14:10~14:52	

## 4.3 調査結果

### 4.3.1 分析方法

本調査は、半構造化インタビューにより、IC レコーダーに録音した音声ファイルから、逐語録を作成した。逐語録に基づいて、調査協力者のコメントを質問項目ごとに振り分け、類似するコメントの内容をグループ化する作業を行った上で分析を行った。

調査結果については、14 の質問項目を下記の 9 つのグループに分け、質問項目別にまとめ、調査協力者のコメントの例も付けた。

- 1) 若い頃や子供の頃の図書館の利用実態（質問項目(3)）
- 2) 「中央図書館」の利用状況（質問項目(1)、(2)）
- 3) 「中央図書館」のイベントの参加状況（質問項目(4)）
- 4) 「中央図書館」での他者との会話（質問項目(5)）
- 5) 「中央図書館」の雰囲気への印象（質問項目(6)）
- 6) 「中央図書館」を利用して得たもの（質問項目(7)、(8)）
- 7) 目的がなくとも気軽に行ける場所と「中央図書館」との比較（質問項目(9)、(10)、(11)）
- 8) 「中央図書館」で気軽に行けて他者と会話できる場所への考え（質問項目(12)）
- 9) 「中央図書館」への全体的な評価（質問項目(13)）

### 4.3.2 若い頃や子供の頃の図書館の利用

#### コメント例 1

「若いときは仕事は忙しくてな、ただ、調べるものに行くときに専門のことを調べるのに、つくばがいいのが、...そこの専門の研究機関の専門図書館にはよく行きましたよ。」

（70 代前半・男性）

「その時はつくば市立図書館がなかったですけども、ここの図書館（筑波大学図書館情報学図書館）とか、土浦市の図書館とか行ってましたね。」（70 代前半・男性）

「ここにはね、2 週間位やっぱり来てたわね...友達なんかも、ここに来ててね、いってちょっと読んだほうがいいよと言われちゃってね。」（70 代前半・女性）

この質問項目の回答者（10 人のうち 8 人）全員（A、B、C、D、E、F、I、J）が、若い頃やもしくは子供の頃に図書館を利用した経験があった（コメントの例 1 を参照）。そのうち、つくば市の研究機関の専門図書館、元図書館情報大学の図書館、筑波大学の図書館、筑波学院大学図書館を利用していた経験がある利用者が半数を超えており、主に仕事のために専門の図書・学術論文等を探しに利用したと回答した。その他、「中央図書館」ができる前に公立図書館として代用している人もいた。なお、回答者の中、3 人（A、I、J）は中学

生の頃から図書館を利用していると回答した。

公立図書館では、つくば市「中央図書館」のほか、市外の牛久の市立図書館や土浦市立図書館、日比谷図書館を利用した人もあった。「中央図書館」を利用した経験のある調査協力者については、知識の獲得及び趣味と関心のある図書を借りる目的で通っていたほか、友達に誘われて「中央図書館」を通い始めた人もあった。

#### 4.3.3 「中央図書館」の利用状況

##### a) 利用頻度

週一回以上利用している者が最も多く、最低でも月に2回程度利用している。このうち、毎日のように「中央図書館」を利用している者（G）もあった。

##### b) アクセスと所要時間

「中央図書館」までの交通手段については、自転車が一番多く、続いて車と徒歩であった。また、「中央図書館」はつくば駅から徒歩およそ3分の立地だが、バスなどの公共交通機関を利用して来館する者はいなかった。2017年に行なわれたつくば市の市民意識調査より、住みにくい理由について、「交通の便が悪い」が全年齢別で最上位で<sup>23</sup>あることから、市の公共交通の不便性が伺える。また、複数の交通手段を使う回答者もいた。

所要時間に関しては、5分から30分までの幅がある中、10分程度かかる者の割合が一番高かった。また、自宅から「中央図書館」までのアクセスの便利さについて、半数以上の回答者は便利だと回答したが、「ちょっと遠い」や「遠い」、「車がないと大変」との回答もあった。便利だと答えた7人（A、B、D、F、G、H、I）の中、徒歩で「中央図書館」まで行く者（B、D、H）は、自宅を購入する際、図書館が近いのは大きな要件であると全員が述べた。

表 4-2 「中央図書館」の利用状況について

利用頻度	平均週3回ぐらい／月に二回ぐらいかな／ 1週間に一遍のときもあるし、3ヶ月来ないときもあるし／毎日のつもりなだけで来れない時もあります
アクセス	自転車(3人)／車(3人)／徒歩(2人)／徒歩か自転車／車か自転車
所要時間	10分位(3人)／10分から15分(2人)／5分から6分／ 20分／10分か15分

##### c) 利用目的

図書のみを利用している者（I）一人を除き、ほとんどの者は複数の目的を持って「中央図書館」を利用しており、その中でも所蔵資料を借りることを目的とする者が一番多い。借りる資料の種類に関して、図書を借りる回答者が多数を占めており、小説から芸術関係、理科系の解説本など専門ものまで幅広い。映画のDVDや音楽のCDを借りる者もいた。また、貸出不可の雑誌と新聞を読むために来館している者もいた。そのほか、図書の購入希望

を出し、図書館に希望の図書を購入してもらったり、地域交流センターの図書室や他の図書館等から取り寄せたり、コンピューターが使いこなせないため図書館の職員に操作を依頼して調べものをしたりする者があった。貸出・返却だけでなく、予約・リクエスト、調査・研究サービスなどの「中央図書館」のサービスを活用している。また、退職したため、現在は趣味や時間つぶしのために図書館を利用していると言及している者が多く見られた。

また、(I) はボランティアとして活動とイベントに参加するために、「中央図書館」を利用していたが、現在はやめているとのことであった。

#### コメント例 2

「本を貸したり返したりしなきゃいけない。」(70代前半・男性)

「私の興味が理科系の数学とか物理とか、あるいは、そういうトピックの解説、あの、あとは一般的な本。あと小説とか。あと音楽のCDも。」(70代前半・男性)

「ネットで本があるかどうかを調べて、あれば行って書棚から取って借りるという手続き。ない場合には、あの、購入希望、また図書館内で借りてくるという。」(70代・女性)

「近いのと、それからね、新聞を／本を借りたり貸したりする。」(70代後半・女性)

「読みたい本を探すというか、本とか、詩とか／それにインターネットもできないというような人間のもんですから、...特殊のことにしか私が興味が無いので、...図書館でそれができるということを伺ったんです。...全部やったださって、3回か4回くらい来たんですけど。」(70代前半・女性)

#### 4.3.4 「中央図書館」のイベントや行事の参加状況

##### a) イベントや行事の参加の有無

「中央図書館」では年間を通じて様々なイベントや行事が行われており、参加対象に年齢制限なしのものもあり、「中央図書館」のウェブページや<sup>24</sup>情報紙『ヨモッカ』(「中央図書館」が発行している図書館情報紙で、「中央図書館」からのお知らせやイベント情報の他、図書館の各コーナーや様々な資料を紹介している)<sup>25</sup>などを通じて広報されている。調査協力者のうち、3名以外イベントや行事に参加した経験がなく、「参加したことがある」と答えた者は「図書のリサイクル」<sup>26</sup>(AとE)と「オトナのブックトーク」<sup>27</sup>(I)を挙げている。なお、参加した回数については、「図書のリサイクル」はそれぞれ1回と2回、「オトナのブックトーク」は5回であり、継続的に「中央図書館」のイベントや行事に参加している者はなかった。

##### b) イベントや行事に参加する／しない理由

前述した「オトナのブックトーク」に5回参加したことがあった者(I)は、参加理由に

ついて、本が好きな人と語り合いたいとコメントしているが、やめた理由に関して、「参加する時間がなくなった」ほか、担当の図書館職員が「いろいろ言ってもそんなにやる気を出してくれなかった」ことも挙げていた。

参加しないもしくはほとんど参加したことのない者の多くは、「中央図書館」のイベントや行事に興味がない、あるいは面白いイベントがないと回答しており、行われているイベントの内容と調査協力者の需要にはずれがある可能性を示唆している。その他、掲示が目立たないためや行く時間がないためといったコメントもあった。参加経験の有無及びその理由の例は下記のとおりである。

#### コメント例 3

「週 1 回行くのだけでも、時間的にですね、だいたいあれぐらいしか取れない。」「興味のあるイベントはほとんどないですね。」(70 代前半・男性)

「ありません。興味がない。」(70 代・女性)

「読書会に来たことはあります、5 回ぐらいで...まあ、本の好きな人たちと語り合いたかったです。」(70 代前半・女性)

「ないです。表示が大きくされていけば気になりますけど、あんまり目のなかに、視覚のなかに入ってこないから...」(70 代前半・女性)

#### 4.3.5 「中央図書館」での他者との会話

##### a) 利用者同士の会話

「中央図書館」で利用者もしくは知り合いなどと会話した経験があるかどうかについて尋ねたところ、話したことがないまたはほとんど話したことがないと回答した者が 7 人 (A、B、C、D、E、F、G) で、多数を占めていた。有無について回答したあと付随されるコメントから、館内で話してはいけないという印象を持っている者が多いことがわかる。なお、女性調査協力者の半数は「中央図書館」で利用者もしくは知り合いと会話したことがあると答えた。一方、男性調査協力者のすべては図書館職員と会話した経験があるものの、利用者や知り合いと話したことがないと回答した。

会話の内容と程度について、友達と「中央図書館」のロビーで話をするもしくは面識のない利用者と軽く言葉を交わすと回答していた (H) と (J) のほか、「オトナのブックトーク」に参加した経験があり、ボランティアとして活動をしていた (I) は図書について語り合い、ボランティアの活動についてボランティア同士との打ち合わせがあったとのことであった。

コメント例 4

「ううん。ないですよ。あまり話してはいけないと思ってるし。」(70代前半・男性)

「ほとんどないですね。」「(あんまり人と話せる雰囲気はなかったですか?) あんまりというよりほとんどですね。」(70代前半・男性)

「あります。いい友達がいるんで、よく会っちゃうと、でも中ではあんまり話すと迷惑になるんで、外に出てよく話したりします。それから、全然知らない人とも話します...ちょっとこれは良かったわねとか、ちょっとした話を、おかしくない程度に。」

(70代後半・女性)

「そういう催しの時に、交流がありますよね。あとボランティアのときもどうしてもね、交流します。」(70代前半・女性)

「ありますよ...あとここに住んでいる人と、図書館の中にいる人とおしゃべりしたり。」(60代後半・女性)

b) 職員との会話

来館して「中央図書館」のサービスを利用する上で、調査協力者全員は図書館職員と会話した経験があった。詳しく尋ねたところ、会話の対象について、「カウンターの方(職員)」が一番多く、内容に関しては資料の貸出についての会話があると答えた対象者が多数であった。また、検索、座席指定、調べものやボランティア活動のため職員と話した者もあり、図書館サービスや業務と関連する会話がほとんどで、「軽く世間話をしたことありますか?」と尋ねた結果、あると回答した者は(H)のみだった。付随したコメントから、図書館で働く人は仕事のため「無駄話してはいけない」(B)や「忙しそうで(世間話はしない)」(I)とコメントした者がいた。



#### コメント例 5

「検索。ない本を探すときは自分ですけど、探すのが面倒くさい。『これ探せよ』、これがあれば、メモを書いて、『これ探してください』と。」(70代前半・男性)

「話すことはあまりなくて、例えば書庫にある本を持ってきてもらう時とか、座席を指定して使うときに、予約表をもらうとか、ほとんど話す必要はないですね。」「結局ね、そういう雰囲気がないのと。」(70代前半・男性)

「それも貸出に関する話です。」「世間話とかは全然しないですね。彼女たちも禁止されてるんじゃないの。わかりません。なんか皆さん忙しそうだし、すごく真面目なのね、無駄話してはいけないみたいのがあって、こっちが付度しちゃう。」(70代・女性)

「よく話しますよ。DVD なんか、これ良かったとかって、印象を話したり、あの、本を借りたり貸したりするところのカウンターのところの方もお話するし、割とお話する機会は多いです。」(70代前半・女性)

「システムはどうなっていますかとか、何曜日ありますかとか、最初ですね、いろいろ質問しました。」(70代前半・女性)

#### 4.3.6 「中央図書館」の雰囲気への印象

##### a) 全体的な雰囲気

「中央図書館」の全体的な雰囲気についての回答を見ると、内部の空間、建物自体または立地についての印象に分けることができる(コメント例 6 を参照)。6 人(A、B、E、F、G、J)は、「中央図書館」は静かだとコメントし、その静かさに対しても好意的であった。また、貸出・返却カウンターの職員が優しいと回答した者(I、J)もいた。建物に関しては、「中央図書館」の建物の造形美が評価された。そして、公園の中にあるという立地を高く評価した者(D)もいた。

総合的には、「中央図書館」の全体的な雰囲気に対して肯定的、好意的なコメントが多数であったが、一方照明が暗い(B、H)やスペース/空間が狭い(C、I)といった印象もあった。そして、他の質問項目を回答する際、「中央図書館」の閲覧席の設置方法により他者を気にしながら読書しないといけない(G)や土浦市立図書館のほうがゆったりできるという(G、I)コメントもあった。

コメント例 6

「静かな雰囲気で」、「照明は暗いですね。」「だいたい苦しそうな顔がしている人が多いですよ。」(70代前半・男性)

「もうスペース的には狭いじゃないですかね。」「スペース的に結構いっぱいじゃないかなと思ってね。」(70代前半・男性)

「図書館に行く途中に公園があって、それはすごくいい雰囲気だったわね。」「中に入って、そうするとその左も右も、こう見ると、ガラス戸越しに木々が見えるの。で、緑が。これはすごく良かった。」(70代・女性)

「静かでとても雰囲気もいいと思います。」「ほんとに構造的には、美的にはきれいなすごい素敵で、どこにも誇れるような感じなんですけど。」(70代前半・女性)

「いいじゃないここが、建物がいいし、静かだしね、本はいっぱいあるし、カウンターの人が親切で優しい、丁寧。」(60代後半・女性)

b) 館内で活発な雰囲気を感じられる場所

館内で活発な雰囲気を感じられる場所があるかどうかについて、入口付近のこどもコーナーを挙げている者が一番多かった(C、D、J)。また、貸出と返却の業務が行われているカウンターの近くや、ブックトークに参加した経験のある者(I)はブックトーク自体を挙げている。また、具体的には範囲や場所を挙げていないものの、ほかの利用者の利用行動で活発な雰囲気を感じているという回答もあった。

コメント例 7

「やっぱり本を返したり貸し出ししたりするところは結構忙しくやってるよね。ほかのところは、そうだな、時によってCDのところなんだよな。」(70代前半・男性)

「雰囲氣的には...カウンターの前、ほかの方の顔が見える、ちょっと広がりがあるところが明るくていいと思います。」(70代前半・男性)

「入ってすぐに右側があの幼児用の部屋があって、ちっちゃい子供が話したり走り回ったり、あれがすごくいいわね。」「児童用の、あの、座って、あれはすごくいい。」(70代・女性)

「曜日によって、混んでるときは活発な感じはしますよね。」「読書会は、まあ、いい感じでした。まあまあ活発ですね。」(70代前半・女性)

「子どもたちのコーナーは、子どもが賑やかに集まって。」(60代後半・女性)

#### 4.3.7 「中央図書館」を利用して得たもの

##### a) 「中央図書館」を利用して得た新しい発見や出会い

他者との新しい出会いがあった者はほとんどなく、図書館に他者と出会うことを求めているという認識を持っている者が見られた。その中で、性格上、面識のない人と話すのが苦手といった理由が挙げられている。唯一「ある」と答えた者はブックトークとボランティア活動に参加した者（I）で、「中央図書館」を通じて友達ができたと語っている。

一方、実際の「人」とではなく、多くの調査協力者は所蔵資料を通じて新しい発見と出会いがあったと答えていた。詳しく尋ねたところ、所蔵資料のなかでも「本」に関する新しい発見が中心で、「他の利用者が返却した本を手にとることによって視野を広げた」ことや、「今まで興味がなかったものに対する印象が変わった」もしくは「興味のあることに関する知識を深めた」など、インタビュー中、多様なエピソードを語り、「中央図書館」を利用することによって日常に良い影響を与えられていることが分かる。（コメント例 8 を参照）

##### b) 「中央図書館」を利用して楽しい経験もしくは元気をもらった経験

「中央図書館」を利用することによって楽しい経験や元気をもらった経験について、すべての調査協力者があると回答した。「中央図書館」利用することで得た良い経験は、週に一回以上の来館頻度に繋がっているのかもしれない。また、付随しているコメントから見ると、インタビュー中繰り返して「本が好き」や「読書が好き」と述べた者（B、H、I）がおり、読書より新しい知識を得たことや新しい本や作家を知ることができたことが楽しい、元気になると挙げているといったコメントもあり、読書により楽しくなり元気をもらった者がほとんどだった。

「人」に関しては、ブックトークやボランティア活動に参加していた者（I）はそれらが楽しかったとコメントしており、また、館内にいる学生や子供を見て元気になると述べた者（D）もあった。資料だけでなく、館内にいる「人」によって元気をもらった者もいた（コメント例 9 を参照）。

### コメント例 8

#### ○人との出会いについて

「誰かと知り合うというのは基本的ないな。」「僕からあえて図書館でコミュニケーションをしようという気持ちもないから。」(70代前半・男性)

「図書館の中でそういう初めてお会いする人とお話するとか、そういうことは私の性格では、非常に少ないので。」(70代前半・男性)

「あんまり求めない。ここに来るより、他に行ったほうがいいよやっぱり、そんなことを求めるんだったら。」(70代前半・女性)

「あの、そういうサークルに入って、そうですね、知り合ってよかったと思います。」、

「知り合いができて、今でもその人とは時々会います。」(70代前半・女性)

#### ○図書との出会いについて

「当日返却された本、だいたい見るようにしてるですよ。自分以外の人が借りて返却した本で、自分が全然興味なかった分野でも、あこういう本を読む人がいるんだなと思うと、ちょっと手にして見たことあって、で意外と面白いだってことはありますね」。

(70代前半・男性)

「今は私が読んでいる本で...そういう専門はありますが、私がそういうのを全然知らなかったの、興味を持つようになって、最初にこちらの図書館で、あの、そういう関係の本が、どういう著者の人が、どんな本を書かれているのかを調べて...」(70代前半・男性)

「良い点は、その本を目指していったけれども、その隣にも、あ、ちょっと見たら読みたいのがあると、また借りると、それはすごくいいわね。」(70代・女性)

「私今まで詩という、小説ばかり読んできたんですけど、文学部だったんで、詩は難しいだと思ってきたんですけどね。...だけどこの図書館に来て、その、ある一冊の本で変わりました。」(70代前半・女性)

「だから、漢方薬はこの図書館でいろんなことをチェックして、あの、副作用からどういう使い方がいいのか、なんていうのを、あの、ちょっと勉強しました。」(70代後半・女性)

#### コメント例 9

「もともと自分の好きな分野の本を読んで、元気をもらったことはもちろんありますよね。新しいことで元気をもらうことももちろんあるでしょう。」(70代前半・男性)

「だから、やっぱり新聞を読んだり、雑誌を読んだり、それから、あの、それね、読んだこともない作家さんね、そういう本なんかに出会うとね、やっぱり良かったと思うね。」「だから、そういう意味でここに来て、本にアクセスできるのがすごくありがたいです。」(70代前半・女性)

「それは楽しいのよ。自分が欲しい本ほとんど買ってもらってるから。」「...ただ、若い高校生とか、学生とかアルバイトで来て、すごく真面目で真摯にやってるのがいいなと思う。」(70代・女性)

「サークルに入って、楽しかったです。」「読書会は楽しかったです。あと借りて本を読むこと自体も楽しいです。」(70代前半・女性)

#### 4.3.8 「用がないときでも気軽にに行ける場所」と図書館の比較

##### a) 用がなくとも気軽にに行ける場所

表 4-3 図書館以外の用がないときでも気軽にに行ける場所

用がなくとも気軽に 行ける場所	ショッピングモール (4 人) 喫茶店／カフェ (3 人) その他 (本屋／TSUTAYA／ジム／文房具屋／プラネタ リウム／交流センター／体操サークル／公園／山／映画 館／ジム) 「どこでも行っちゃいます」
--------------------	---

表 4-3 では、図書館以外、用がないときでも、調査協力者が気軽に足を運べる場所についてまとめた。表が示しているように、回答は様々だが、複数の者が、ショッピングモールと喫茶店を挙げていた。それ以外では、本屋や公園、または地域交流センター、サークルなどの回答もあった。全体的には室内が多かった。

##### b) 図書館との共通点

普段、用がないときでも気軽にに行ける場所を尋ねたあとに、図書館との共通点を尋ねた。共通点はあまりないと考えている者 (B、E) 2 名以外、共通点があると考えている者が多数であった。また、その回答は「空間について」と「コンテンツについて」に分けることが

できる。空間に関しては落ち着いていられる、出入り自由など、コンテンツに関しては情報が集まっている、自分自身を充実させるなどのコメントがあった。

コメント例 10

「モールというのはいろいろな商材は集まってる、ある意味では商材が集まってるというのは情報が集まってるのかな。図書館というのはメディアとか音楽 CD とか、メディアは違うけど、それも情報、そういう意味では似通う部分があるんじゃないかと思いますね。」(70 代前半・男性)

「本とか DVD とか、タイトルがいろいろ見られます。」「出入り自由ですね。」(70 代前半・男性)

「自分の趣味が本とか、職場、研究室の雰囲気に近いところが好きなんです。」(70 代前半・男性)

「図書館は本が中心ですから、自分自身を充実させるという意味では同じですけど。」(70 代前半・女性)

「映画館は未知の世界を見せてくれて、喫茶店は未知の人に会えるね、図書館もこうやって未知の人に会えたね。」(60 代後半・女性)

c) 図書館との違い

図書館は普段用がないときでも気軽に行ける場所との違いは何なのかについて、様々な回答の中、一番多かったのが「対価」に関する回答 (A、B、C、G、I) であり、「中央図書館」の公的施設としての特徴が現れている。また、「中央図書館」では話してはいけないことや静かであることなどの回答も複数あり、マナーの違いがあると認識している者もあった。

#### コメント例 11

「図書館は金がかからないけど、モールは金がかかる、買ったり食ったり。」(70代前半・男性)

「他のところはみんな営利企業ですよ、会社ですよ。図書館は営利企業じゃないから、そういう経済活動の一環じゃないところがありますよね。」(70代前半・男性)

「ここにはあんまり話しにきたい、こんなにお話することはないですね。だから喫茶店の方に行くと、喋りっぱなしをね。」(70代前半・女性)

「もちろん図書館は借りられるってことですね。本が借りられる。無料で本が借りられる。」(70代前半・女性)

「だって図書館では喋っちゃいけないし、一番多いのは、音を出しちゃいけないけど、外はいくら大きな声しても、それからものを食べちゃいけないとか、それは図書館の中ではお水ぐらいしか飲んじゃいけない。」(70代後半・女性)

#### 4.3.9 「中央図書館内で気軽に行けて他者と会話できる場所」への態度

本研究の目的は、日本の公立図書館は高齢者の第三の場として機能する可能性を明らかにするものである。本調査では、第三の場にとって重要な要素である「会話」に関する質問項目を複数設けており、質問項目(12)では、まず「中央図書館」内のどこかに気軽に行けて、同年代もしくはほかの年代の人に出会える、そして会話できる場所を作って欲しいかどうかについて尋ねてみた。結果、肯定的な意見と否定的な意見が半数ずつであった。

その理由について尋ねたところ、肯定的な回答の者(A、C、G、H、J)は、単純に他者との交流が好き(H、J)、高齢者は居場所を求めている(J)や資料の貸出と返却が同時にできるのが便利(A)などの理由を挙げている。そのほか、図書館という施設が信頼できるものであってほしい(G)のような回答もあった。更に、「作って欲しいと考えているものの、利益の採算を考えなければならない」といったコメントもあった。なお、同年代とほかの年代の人とはどちらがよいかに関しては、双方必要だと考えた者と回答に迷う者がいた。

一方、このような場所を作って欲しくない者(B、D、E、F、I)の理由については、「面識のない人と話すのが苦手」や「どのように会話を始めればいいのか分からない」(F)など個人的な要因を挙げるほか、図書館において他者と話す、または出会いを求めることについて否定的な態度を示す者(E)もいた。更に、普段他者と出会いや交流することできる場所があり、図書館にこのような機能を求めていると述べた者(B、E)が複数いた。

#### コメント例 12

##### ○肯定的なコメント

「いいと思いますね。」「(同年代の人とほかの年代の人) 両方があったほうがいいですね。65 歳以降だったらね、話題も限られるし、健康の話とか、年金の話とか、長い話してもつまらないもんだから、だから若い人とのね、意見も聞いたり。」(70 代前半・男性)

「いいと思いますね。ただ、それだけ需要があるかどうかね。」(70 代前半・男性)

「同じ意識がある方々で話せる交流があればいいと思います。皆さん多分探していってしゃると思います。そういう交流の場を。」「ちゃんとしたバックボーンがあって、その中で何かを作るというようなことだったら安心感があって、参加できるかもしれないです。」(70 代前半・女性)

「いいですよ。」「だって便利でしょう。楽しいでしょうおしゃべりというのは。」(70 代前半・女性)

「うん。作って欲しい。いまね、爺さん婆さん増えてて、いられるところないのね。」(60 代後半・女性)

##### ○否定的なコメント

「どう人と話すかですよね。...どういう人かわかんないとなるとね、ちょっと難しいですよね。」(70 代前半・男性)

「図書館ということで、そこに来る人と人が、話を始めるということは今の状態だとちょっと難しいじゃないでしょうか。どういう方なのか全然わかりませんし。」(70 代前半・男性)

「No thank you、行かない。話が違う。多分。」「図書館には求めない。」(70 代・女性)

#### 4.3.10 「中央図書館」への全体的な評価

最後に、「中央図書館」はどのような場所でどのような意味を持っているのかについて尋ねた。「非常に大事な場所」や「無くてはならない」といったコメントは多数で、更に「生きがいである」と答えた者もいた。総合的には「中央図書館」を高く評価しており、調査協力者の日常生活において「中央図書館」が重要であることを示していた。また、付随するコメントから、「中央図書館」は好きな本や知識、情報にアクセスできる場であることが大きな理由であるとのことであった。



### コメントの例 13

「今の私にしてみたら、非常に大事な場所ですよ。」「情報源かな、それがあから、生きがいでもあるわけだ。」(70代前半・男性)

「非常に大事な場所です、あの、実際、一つのことを調べとか、そういうことに興味を持つと、それに関連したことを検索して、こちらで、私が全然経験がない分野について、どういうことを自分が勉強するが、それに近付くこともできるから、進み方の最初ところ、ナビゲーションをしてもらえるところですね。」(70代前半・男性)

「何ていうの、ありがたいと思ってる。やっぱりいろんなことが共用、自分の何ていうの、本はそれ持ってるけど、やっぱり偏ってるでしょう。自分の。自分の偏り、少しく、矯正してくれるようなね、場所だなと思ってる。」(70代前半・女性)

「色んな意味で助かってます。便利で、やはり、調べ物でも、感動を与えて、ある意味本と出会えて、知らない本を見れば楽しいです。」「憩いの場ですよ。」(70代前半・女性)

「もう必要不可欠です。非常に重要。私のオアシス。精神的オアシス。」(70代前半・女性)

#### 4.4 本調査の考察

本項では、インタビュー調査、並びに調査協力者を募集する際「中央図書館」における利用者への観察の結果に基づき、オルデンバーグが提唱した第三の場の 8 つの特徴及び個人にもたらす 4 つの利益を用い比較し、「中央図書館」がどのくらい第三の場として機能しているかを分析する。また、第三の場の視点から、インタビュー調査から読み取れる高齢者の「中央図書館」及び図書館への印象・認識などについての考察を行う。

##### 4.4.1 第三の場の枠組との比較

オルデンバーグは第三の場は下記の 8 つの特徴を持っているとまとめている。

①中立な領域、②人を平等にすること、③会話が主な活動であること、④アクセスしやすく・協動的であること、⑤常連がいること、⑥建物が目立たないこと、⑦陽気で遊び場的な雰囲気、⑧家を離れた時のもう 1 つの家であることの 8 つである。

また、第三の場を持つことによって個人が受ける 4 つの利益について、以下のように述べている。

①目新しさ、②積極的な人生観、③元気の回復、④ひとまとまりの友達の 4 つである。

次に、上記の第三の場の 8 つの特徴と個人にもたらす 4 つの利益を用い、「中央図書館」はどのくらい第三の場として機能しているのかについて分析する。

##### 4.4.1.1 第三の場の 8 つの特徴との比較

①中立な領域：個人が出入りやすく、誰もが接待役を要求されずに心地よくいることが可能である

「中央図書館」は入館ゲートといった入館に関与する装置を設置しておらず、出入は自由である。インタビューから、「中央図書館」は「出入りは自由」(C)と認識している高齢者もいる。また、長時間に滞在し利用しても目的問われず、書店などの商業施設における「本を買ってあげないと悪いかな」(B)というような利用者に課されるプレッシャーもない。そのほか、館内には図書館職員がおり、高齢者は館内ではサービスを受ける側として、心地よくいることが可能な条件が備えていると考えられる。

②人を平等にすること：包容力がある場で、形式張った会員資格や入場拒否の基準を設けず、一般の人々がアクセスできる

「中央図書館」は公立図書館であり、利用者の人種、信条、性別、年齢、そして社会地位や経済力などを問わずに、あらゆる人に開放しているという特徴を備えている。実際、今回調査を行った「中央図書館」が、「職業のない人、という人たちが、ここにお休みというか、くつろげる人がいらっちゃった」(G)、「いろんな層の人が利用しているところだと思います」(C)、「人も多いし、よく使われている。子供から、大人まで、高齢者まで、いろんな人がいらっしゃるし、いろんな海外な方も…」(H)などのコメントから、幅広い人々に利用されている様子が伺え、まさに包容力のある、誰でもアクセスできる場として機能している

と考えられる。

③会話が主な活動であること：第三の場を最も表す特徴は楽しく面白い会話である

第三の場の大きな特徴である「楽しく面白い会話」が「中央図書館」で行われているかを明らかにするため、「利用目的」や「図書館内における他者との会話の有無」の2点を尋ねた。その結果、利用目的について、所蔵資料を利用することが主要な目的であった。また、館内における他者と会話した経験の質問では、他者と会話をした経験はあるものの、ほかの利用者と「話してはいけない」(B)という認識を持っている者が多く、図書館職員との会話も図書館業務に関するものが中心であった。少なくとも、調査に協力した高齢者は、館内では会話が主な活動ではないという意識を有していた。

④アクセスしやすく・協調的であること：場所的、時間的にアクセスしやすく、ひとりでも気軽に行ける知り合いが見つかる場

「中央図書館」のアクセスについて、便利だと認識している高齢者は10人のうち7人であり、場所的にアクセスがしやすい立地であるということがいえる。また、10人のうち8人の者は既に退職し時間に融通が利くため、時間的にアクセスしやすいではないかと考えられる。

しかし、インタビュー調査の結果から、すべての者は所蔵資料を利用するのが主要な来館目的で、「一人で行って、本を借りて、読んで、借りたり返したり」(A)という、館内で終始単独で過ごす傾向も見られる。ブックトークとボランティアへの参加経験のあった者(I)は参加をやめており、継続的にイベントや行事に参加している人もいなかった。よって本調査では、「中央図書館」には、ひとりでも気軽に行けるが、来館して知り合いが見つかることは期待できないという結果となった。

⑤常連がいること

調査協力者の中では週一回以上来館している人が7人で、「毎日のつもりなんだけど」(H)という、ほぼ毎日来館している人もいた。また、2018年9月17日(月)、9月20日(木)、9月23日(日)の3日間、「中央図書館」のエントランスにて、1日6時間以上滞在し、その中で複数回見かけ、常連とみられる人がいることも確認できた。

⑥建物が目立たないこと：建物は人々の印象に残らず、利用者に日常生活に溶け込む外観をしている

「中央図書館」は複合施設「つくば文化会館アルス」の中で併設されている。その建物全体は公園の中にあり、周りには高い建物はほとんどないため、目立つと考えられる。そして、建物へのイメージについて語った者は少なかったが、イメージについて述べた人は「大きい」や「一回り大きい建物」(J)、「きれいで素敵」、「どこにも誇れるような感じ」(G)と語っており、一部の高齢者に対して、建物は印象に残っていると言えよう。しかしながら、「利用者の日常生活に溶け込むような外観をしている」を支持するようなコメントは見られなかった。

⑦陽気で遊び場的な雰囲気：陽気な雰囲気があり、遊びの精神は何よりも重要である。ここでは喜びや受容が不安や疎外を制する

子どもコーナー（C、D、H）からは陽気で活発な雰囲気を感じられるというコメントがあり、館内の一部では陽気で遊び場的な雰囲気が作り出されている可能性を示している。一方、「中央図書館」全体的な雰囲気に関して、コメントは様々であったが、4.3.6において述べたように「静か」という印象を持つ者（A、B、E、F、G、J）が多いといえる。そのほか、「苦しそうな顔をしている人が多い」と述べた者（B）もいた。また、参加者が自由に語り合うことができると推測される、恒例イベントという「大人のブックトーク」の雰囲気を尋ねても、「順番で、皆さん、本について語り合うわけですから」（I）であり、至って真面目なものであるという。そのため、調査協力者からすれば、「中央図書館」の館内全体は陽気で遊び場的な雰囲気があるとは言い難く、また、「中央図書館」内では利用者の不安や疎外を制する雰囲気があると支持するようなコメントも見られなかった。

⑧家を離れた時のもう 1 つの家であること：家のように居心地のよい場所を提供し、常連に帰属感を感じさせる。

調査協力者の多くは、週 1 回以上の頻度で中央図書館を利用しているが、図書館の資料をその場で利用するより、借りて自宅で利用する方が多いと回答した人が多く、「建物を利用しない」（B）というコメントもあった。自宅で借りた資料を利用する傾向は、個人の好みと関連しているが、インタビューで見られる「図書館はスペース的には狭いんじゃないか」（C）というコメントもあった。その同時に、「精神的なオアシス」（I）、「憩いの場」（G）、と答えた者もあり、「中央図書館」は高齢者に精神的な支えを提供している一面も見える。ただし、「中央図書館」への帰属感を感じているかどうかについて、判断できるコメントはなかった。

#### 4.4.4.2 第三の場が個人にもたらす 4 つの利益との比較

オルデンバーグは良き第三の場は個人に対して、以下の 4 つの利益を提供すると論述している。

①目新しさ：多彩な社会背景の人々が集まる場で、そこでの話題は変化に富んでおり、新鮮味があって、そして視点に多様性がある。人々お互い刺激し合うことで目新しさを生み出す。

②積極的な人生観：幅広い層の人々がいる状況で気晴らしと交流と組み合わせ、成員の集まりとその成員たちの知恵を提供することによって健全な人生観をもたらす。

③元気の回復：集う成員の間の距離が気持ちよくて元気がもらえる。

④ひとまとまりの友達：友達は「ひとまとまり」の形で提供される。成員の付き合いが社会的、特定の友人に依存しない。必要なのは出入りする時にこの場にいくつかの見慣れた顔がある。

また、この 4 つ利益はその場にいる「人」との関わりによって生まれるであろうことが強調されている。

本調査では、「中央図書館」を利用することによって新しいことを知ったり、新たな出会いの経験があると回答した者が多数見られた。また、「中央図書館」を利用して「楽しかった」や「元気をもらった」といった回答から、調査協力者は「目新しさ」、「積極的な人生観」及び「元気の回復」を得たと推察される。

しかし、付随するコメントを分析すれば、これらは館内所蔵の図書や新聞雑誌を読むことや視聴覚資料を利用することにより、読書など自分の趣味を楽しみ、または知識や情報を得たことにより生じた経験である。過去にブックトークに参加した者（I）は、ブックトークの参加者は年齢層が厚く、参加者との交流も多いため、「知り合ってよかった」と述べており、上述の3つの利益以外、そこで「ひとまとまりの友達」に会っていた可能性はあったが、現在、調査協力者全員は他者と出会い、他者と会話する可能性があると考えられるイベントや行事に参加していない。更に、他者との館内で会話した経験があっても軽く言葉を交わす程度で、調査協力者に新たな刺激を与え、活力をもたらす経験を得ることは難しいと考えられる。

#### 4.4.2 「中央図書館」の物理的アクセス

本調査の質問項目（2）では「中央図書館」へのアクセスについて聞いた。便利だと思っている高齢者は7人で、協力者の大半にとって、「中央図書館」はアクセスしやすいと認識していると言える結果であろう。徒歩で来館している者は3人で、「マンションを買うときにね、図書館が近いとか...いろんな条件があったので」（B）という物理的にアクセスしやすいことが重要である考えを示している。しかしながら、その一方、物理的なアクセスへの不満を吐露した高齢者もいた。例えば、車がないと行きづらい（I）、自宅までバス停が遠過ぎて歩きたくない（A）、もしくはバスは「中央図書館」の近くに停まらない（B）などのコメントがあった。また、「中央図書館」を駅のそばに移してほしいという要望もあった（I）。「中央図書館」はバス・電車ターミナル駅「つくば」から徒歩3分という立地にありながら、今回の調査では、10名の調査協力者において、徒歩のほか、全員車や自転車を利用して来館しており、公共交通機関を利用している者がいない。文献調査において、2017年のつくば市の市民意識調査<sup>28</sup>では、つくば市が「住みにくいと感じる理由」について、すべての地区と年代で「交通の便が悪い」が最も多いことが明らかになった。文献調査の結果と本研究のインタビュー調査の結果を兼ね合わせると、つくば市の一部の高齢者にとって、「中央図書館」までの、市の公共交通の条件は不便であることを示している。自力で運転し来館する高齢者にとって、悪天候もしくは運転能力の低下といった、偶発的要因やティフステージ毎のアクシデントがきっかけで来館が困難となる可能性は否定できない。このような、恒常的なアクセス手段によって、図書館の任意の利用が不可能となる状況が好ましいとは言えない。

以上を踏まえて、高齢者にとって、公共交通条件の改善など、物理的アクセスしやすさの確保が必要ではないかと考えられる。

#### 4.4.3 「中央図書館」の館内空間

インタビュー調査では、「中央図書館」の館内の空間について、高齢者から様々なコメントがあった。「スペース的に狭い」(C)や利用者の人数に対して「図書館そのものが狭い」(I)などである。また、閲覧席に関して「勉強させるんなら、させるスペースをね、作ってやらないと」(C)、「混んでるときはほんとに席がない」(G)や、座席の並び方を「飛行機の中乗っているみたいな感じがして」(G)といったコメントもあった。現在、「中央図書館」の閲覧席は48席<sup>29</sup>であり、土日祝日や学校の長期休業期間中は「中央図書館」2階の集会室を学習室として開放している<sup>30</sup>。そして、夏休みの期間中筑波学院大学の附属図書館と連携し、高校生対象に開放しているといった<sup>31</sup>事実を踏まえ、館内では来館者数に見合った、滞在用のスペースを十分に確保していないと考えられる。

同館での滞在について、調査協力者である高齢者は、「照明が暗い」(B、H)、「トレイが汚い」(D)などの意見を述べ、更に携帯電話が鳴ったら同館の職員に「注意されて、追い出された」(B)や、友人から「居眠りしたら注意されるから気をつけなさい」(G)という注意を受けている。また、「人様の目を気にして本を読まなきゃいけないです」、「眠りそうになるときは緊張します」(G)といったコメントもあった。そのほか、館内では静かにしなければならないと考えていると複数が答えていた。館内にて緊張感を抱いているなど、快適にいられない高齢者がいることが伺える。

第三の場として機能するには居心地が良い場所であることが必要だが、現在「中央図書館」の館内空間は高齢者に居心地よく過ごせる場を十分に提供できず、いわゆる「非滞在型」図書館という現状にあることが確認できた。

#### 4.4.4 「中央図書館」内における他者との触れ合い

本調査の質問項目(4)ではイベントや行事の参加状況を、質問項目(5)では館内において他者との会話に関する経験について尋ねた。4.3.5 及び 4.4.1 で述べたように、イベントや行事に参加した経験のある高齢者は少数であり、現在行われているイベントや行事に興味がないため参加していないというコメントがあった。また、同館の館内で利用者と交流した経験のない者が多数であり、図書館職員とは話すが、貸出など図書館が提供しているサービスに関係するものであった。一方、ブックトークの行事の参加経験のあるIは他の参加者と楽しく会話し、友人もできたと述べている。そのほか、館内にて閲覧行動は単独で行われていることが多いが、イベントや行事では他者と関わる機会が比較的に多く、継続的な参加により図書館を利用する目的の幅が広げ、そして、他者と触れ合う場を提供するきっかけとなり、更に、高齢者が図書館を「気軽に資料を貸せる場」だけでなく、「イベントに参加するために行く場」、「同じ興味を持つ人々と話し合う場」として捉えるようになるのではないだろうか。

以上のことを踏まえ、高齢者の興味を引き、他者と触れ合う、出会えるきっかけとなるイ

イベントもしくは行事を開催する必要があると考えられる。また、このように興味を引き立たせるためには、さらなる広報と宣伝を行う必要性も生じるであろう。

#### 4.4.5 図書館という場への認識

次に、「中央図書館」に限らず、高齢者が図書館という場への認識について述べる。4.2.3における質問項目(3)の調査協力者全員が若いときに図書館を利用した経験がある一方で、仕事・勉強などのために図書館を利用し、趣味のため利用した高齢者は少なかった。また、現時点の利用目的については、余暇活動や趣味の実践または知識の獲得のために所蔵資料の閲覧・貸出を行うのが殆どであった。

調査に協力した高齢者からすれば、「中央図書館」という場は多様な側面を持ち、静かや憩いの場といったコメントのほか、「情報源かな」(A)、「私が全然経験がない分野について…進み方の最初ところ、ナビゲーションをしてもらえる」(F)、「やっぱり、知識をね、与えてくれますね」(J)、「あそこが自分ちの書棚であるという感じ」(B)のような、知識や情報との関係が深いイメージを抱いている様子が、調査協力者を通して見受けられる。

また、「中央図書館」だけでなく、インタビューを通じて、高齢者の「図書館」というカテゴリーの施設への認識も垣間見えた。「図書館は交流の場ではない」や「図書館では出会いを求めない」に類似するコメントや、「無料で資料を借りられる」以外、「中央図書館」への認識と同じように、「読みたい本があったら借りに行って、DVDを借りて、1週間に1回そういうことをやる場所」(C)、「知識的に散歩する、そういう時の空間というのは非常に広いですね」(F)、「図書館は本が中心ですから」、「図書館というのは、文化的な活動を支える大きな、大事な場所だと思いますね」(I)、「図書館は知的な雰囲気」(J)という、文化、そして知識や情報と関係するコメントが最も多かった。言いかえると、高齢者にとって、図書館とは知的欲求を満たす、情報を獲得する「情報にアクセスする場」として捉えている可能性がある。

図書館法第1条と第2条に掲げているように、図書館は教育と文化に寄与し、図書など資料を収集・整理・保存して、利用者の教養、調査研究、リクリエーションに資する施設である。図書館の活動は図書館法に基づいて行われており、また、図書館職員もこのような理念の下でサービスを提供していると推察される。そのため、利用者にとって、図書館は「本を借りるところ」や「調べ物を行うところ」といった知的な活動との関係が強いという共通認識があり、調査協力者である高齢者にも根付いていると考えられる。

#### 4.4.6 高齢者にとっての理想的な図書館像

本調査を通じて、高齢者にとっての理想的な図書館像が伺えた。例えば、本を読みながら飲食もできる図書館が理想的であるという者(E)がいた。また、「中央図書館」との比較として、つくば市の隣にある土浦市立図書館(以下、土浦図書館)について言及していた。土浦図書館とは2017年11月に土浦市駅前の再開発ビル「アルカス土浦」内に開館し、現在

茨城県内規模が最も大きい市町村立図書館である。利用経験のある高齢者は「もっとゆったりした感じがする。ゆったり本が読めるし、探せるし、もちろんコーヒーを飲みながら本も読めます、...くつろげる」(G)、「ああいうふうに発展させることもできるんじゃないかな」と、「親子連れにも優しいで、ゆったりした空間で」(I)と述べている。また、「利用者が使える別の機能をね、図書館に合わせれば、展示場とか、いいのかなと思ってたりしますが」、「本だけ置くじゃなくて、あの、いろんな公演とかコンサートとかね、できるのもいいし、画廊のようなものでもいいしね、なんかそういうように使えないかなと思うんですよ」(C)という、館内における様々な活動ができることへの希望も見られた。

こういったコメントから、図書館に対する要望として、「快適さ」「一人で過ごせるスペース」「くつろぎ」があり、一部の高齢者にとっての理想の図書館像として、リラクゼーション施設としての要素が含まれていると考えられる。

#### 4.4.7 「中央図書館」内での交流への態度

最後に、本調査では高齢者に「中央図書館」内で気軽に行ける、他者との会話ができる空間に対する需要とその理由を尋ねたところ（質問項目 12）、肯定的な意見と否定的意見が半分ずつという結果となった。

否定的な意見の主な理由として、「中央図書館」内では「話してはいけない」と感じている者が多く、更に「図書館では他者と出会うもしくは会話することを求めない」(D、E)、や「コミュニケーションをしようという気持ちもないから」(A)という見解を示す人もいた。その他、カフェ(E)、社交ダンスのサークル(B)など「ほかに他者と交流できるため図書館では他者と交流することは求めない」、または館内の「静かに本を読める雰囲気を保ってほしい」(F)というコメントもあり、今の「中央図書館」もしくは図書館という場に対し、他者と「交流の場」として感じていない様相を呈していた。

肯定的な意見の主な理由として、「おしゃべりが楽しい」(H)や、「高齢者がいられる場所がない」(J)、または「同じ意識を持っている人と交流したい」(G、I)という理由を挙げられたほか、「貸出と返却と同時に他者と交流ができるため便利」(A)、そして他者と交流する場として、「図書館だったら安心かな」(G)といったコメントも見られる。Gのように、図書館という公共施設への信頼感が垣間見える。

以上を踏まえ、「他者と出会える、話ができる場」としての図書館へのニーズも存在しており、今後の図書館に対し、第三の場としての機能性が求められる可能性を示している。

#### 4.5 本章のまとめ

第2、3章を踏まえ、日本の公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性を明らかにすることを目的として、「中央図書館」にて高齢者を対象とした半構造インタビューを行った。また、得られた調査結果を踏まえ、第三の場の枠組を用いて「中央図書館」を考察した。その結果、「中央図書館」は第三の場の8つの特徴のうち、①中立な領域、②人を平



等にする場、③常連がいることの 3 つの特徴を有していることが明らかになった。そして、第三の場が個人にもたらす 4 つの利益について、調査協力者は①目新しさ、②積極的な人生観及び③元気の回復を得たと推察され、それらは他者との関わりによるのではなく、資料を利用することによって得られた利益であることを明らかにした。

更に、本研究の調査結果に基づき、「中央図書館」について、①物理的アクセスを確保する必要があること、②「中央図書館」は非滞在型図書館であるため、高齢者が滞在できる空間を提供すべきこと、③館内で高齢者が他者との触れ合うきっかけを提供すべきことの 3 つを課題として挙げた。

なお、本調査の結果から、高齢利用者の特徴として、①図書館を知識・情報・文化と関連する場と認識していること、②理想の図書館像として、くつろげることやリラクゼーション施設の機能を有していることの 2 つが挙げられることを指摘した。その他、一部の高齢者は、図書館における他者との交流へ積極的な姿勢を見せていたことが明らかになった。

---

<sup>1</sup> つくば市. 市長公約事業のロードマップ (平成 30 年 6 月改訂版) 冊子.

[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/002/252/roadmap\\_2018.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/252/roadmap_2018.pdf) (参照 2018-08-30)

<sup>2</sup> つくば市. 懇談会等の一覧(2018 年 7 月).

[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/002/710/kodankai2018.7.23.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/710/kodankai2018.7.23.pdf) (参照 2018-08-30)

<sup>3</sup> つくば市. 市のデータ (2018 年 11 月). <http://www.city.tsukuba.lg.jp/shisei/joho/profile/1002188.html> (参照 2018-11-26)

<sup>4</sup> 茨城県. 市町村数の動き (2018 年 4 月).

<https://www.pref.ibaraki.jp/somu/shichoson/gyosei/gaikyo/h30/documents/shichousonsuunougoki.pdf> (参照 2018-08-21)

<sup>5</sup> 茨城県. 茨城県の人口と世帯 (推計) -平成 30 年 12 月 1 日現在- (2018 年 12 月)

<http://www.pref.ibaraki.jp/kikaku/tokei/fukyu/tokei/betsu/jinko/getsu/jinko1812.html> (参照 2018-12-30)

<sup>6</sup> つくば市. 統計つくば 2017.

[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/002/336/ToukeiTsukuba\\_2017\\_2.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/336/ToukeiTsukuba_2017_2.pdf) (参照 2018-10-06)

<sup>7</sup> 茨城県. 市町村高齢化率 (2018).

<http://www.pref.ibaraki.jp/hokenfukushi/chofuku/choju/stats/documents/sityousonn301001.pdf> (参照 2019-01-03)

<sup>8</sup> 茨城県. 第 7 期いばらき高齢者プラン 21 総論前編. (2018).

<http://www.pref.ibaraki.jp/hokenfukushi/chofuku/choju/documents/02souronnzennpen.pdf> (参照 2018-08-23)

<sup>9</sup> 内閣府. 高齢社会白書 (平成 30 年版). 日経印刷, 2018, 229p.

<sup>10</sup> つくば市保健福祉部高齢福祉課. つくば市高齢者福祉計画 (第 7 期)【平成 30 年 (2018) 年度から平成 32 (2020) 年度】(2018 年).

[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/001/352/koureisayahukushikeiku7.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/001/352/koureisayahukushikeiku7.pdf) (参照 2018-08-22)

<sup>11</sup> つくば市. つくば市戦略プランーつくば市未来構想の実現をめざしてー (2015).

[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/005/288/senryakuplan.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/005/288/senryakuplan.pdf) (参照 2018-08-26)

<sup>12</sup> つくば市保健福祉部高齢福祉課. つくば市高齢者福祉計画 (第 7 期)【平成 30 年 (2018) 年度から平成 32 (2020) 年度】(2018).

[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/001/352/koureisayahukushikeiku7.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/001/352/koureisayahukushikeiku7.pdf) (参照 2018-08-26)

- 
- <sup>13</sup> 茨城県. 「第7期いばらき高齢者プラン21」の策定について(2018).  
<http://www.pref.ibaraki.jp/hokenfukushi/chofuku/choju/pulan21.html> (参照 2018-08-22)
- <sup>14</sup> つくば市保健福祉部高齢福祉課. つくば市高齢者福祉計画(第7期)【平成30年(2018)年度から平成32(2020)年度】(2018).  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/001/352/koureisayahukushikeika ku7.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/001/352/koureisayahukushikeika ku7.pdf). (参照 2018-08-26)
- <sup>15</sup> つくば市. 第2次つくば市生涯学習推進基本計画概要版(2016).  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/001/500/gaiyou.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/001/500/gaiyou.pdf) (参照 2018-08-26)
- <sup>16</sup> つくば市立中央図書館. 【会議資料】図書館協議会(第2回)2017.12.13.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/002/720/2toshokan2017.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/720/2toshokan2017.pdf) (参照 2018-10-05)
- <sup>17</sup> つくば市. 市長公約事業のロードマップ(平成30年6月改訂版)冊子.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/002/252/roadmap\\_2018.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/252/roadmap_2018.pdf) (参照 2018-08-30)
- <sup>18</sup> つくば市立中央図書館. 図書館運営方針.  
<http://www.city.tsukuba.lg.jp/kankobunka/bunka/toshokan/1001629.html> (参照 2018-10-03)
- <sup>19</sup> つくば市立中央図書館. 館内案内図.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/001/620/kannaiannaizu.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/001/620/kannaiannaizu.pdf) (参照 2018-11-15)
- <sup>20</sup> つくば市立中央図書館. 平成30年度 図書館協議会会議録.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/003/943/toshokan2018.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/003/943/toshokan2018.pdf) (参照 2019-01-02)
- <sup>21</sup> つくば市立中央図書館. 規則・統計.  
<http://www.city.tsukuba.lg.jp/kankobunka/bunka/toshokan/1001629.html> (参照 2018-09-30)
- <sup>22</sup> つくば市立中央図書館. 平成30年度 つくば市の図書館概要. (参照 2018-11-25)
- <sup>23</sup> つくば市. 平成29年度つくば市民意識調査報告書.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/002/403/29sihiminishikichosa\\_h okokusho.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/403/29sihiminishikichosa_h okokusho.pdf) (参照 2018-12-10)
- <sup>24</sup> つくば市中央図書館. 図書館の行事.  
<http://www.city.tsukuba.lg.jp/kankobunka/bunka/toshokan/1001622.html> (参照 2018-10-14)
- <sup>25</sup> つくば市. 図書館情報紙『ヨモッカ』.  
<http://www.city.tsukuba.lg.jp/kankobunka/bunka/toshokan/1001635.html> (参照 2018-11-15)
- <sup>26</sup> 注: 年に1回、中央図書館では不用になった本を、市民に無料で配る。
- <sup>27</sup> 注: 月に1回、読書好きが集まって語り合う。
- <sup>28</sup> つくば市. 平成29年度つくば市民意識調査報告書.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/002/403/29sihiminishikichosa\\_h okokusho.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/403/29sihiminishikichosa_h okokusho.pdf) (参照 2018-12-10)
- <sup>29</sup> 茨城県図書館協会. 平成30年度茨城の図書館.  
<https://www.lib.pref.ibaraki.jp/ila/files/toukei/h30tosyokan.pdf> (参照 2018-10-26)
- <sup>30</sup> つくば市立中央図書館. 利用案内.  
<http://www.city.tsukuba.lg.jp/kankobunka/bunka/toshokan/1001620.html>. (参照 2018-10-26)
- <sup>31</sup> つくば市教育局中央図書館. 中央図書館の夏休み期間中の学習室について.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/005/189/No75.pdf#search=%27%E4%B8%AD%E5%A4%AE%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E3%81%AE%E5%A4%8F%E4%BC%91%E3%81%BF%E6%9C%9F%E9%96%93%E4%B8%AD%E3%81%AE%E5%AD%A6%E7%BF%92%E5%AE%A4%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%27](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/005/189/No75.pdf#search=%27%E4%B8%AD%E5%A4%AE%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E3%81%AE%E5%A4%8F%E4%BC%91%E3%81%BF%E6%9C%9F%E9%96%93%E4%B8%AD%E3%81%AE%E5%AD%A6%E7%BF%92%E5%AE%A4%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%27). (参照 2019-01-02)

## 5. 高齢者の第三の場として機能する公立図書館に向けての検討

本章では、文献調査の結果及び事例調査の対象として取り上げた「中央図書館」における調査の結果を踏まえ、本研究の目的である、日本の公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性について検討を行う。

### 5.1 公共施設としての既存の機能

オルデンバーグの場合、第三の場の8つの特徴を羅列する際、最初に挙げたのは「中立な領域」と「人を平等にすること」であり、この2つが第三の場について論じる際、前提となる特徴と言える。なぜなら、このような特徴を有して初めて、ある場に多彩な社会背景、多様な思想を持つ様々な人と出会えることが可能となるからである。加えて、第三の場における交流を通じた、新たな知見の獲得や人との出会いにより、あらゆる第三の場に共通する「目新しさ」、「積極的な人生観」、「元気の回復」、「ひとまとまりの友達」といった、個人が受けられる4つの利益が生まれる。

日本の公立図書館は、公的施設の性質を備えており、無料の原則に沿ってサービスを提供し、国民は平等に利用することができる。先行研究に当たるフィッシャーら<sup>1</sup>とリンら<sup>2</sup>の論文では、事例調査を行い、第三の場の枠組を調査対象である公共図書館に適用して、第三の場所の特徴と調査結果との検証・照合を行った。この2つの論文では、調査対象や調査方法は異なるものの、実証された「中立な領域」と「人を平等にする場」という特徴は共通なものであった。なお、本研究のインタビュー調査においても、「中央図書館」は出入りが自由で、高齢者を含む、他の年齢層、そして他の国の利用者に利用されている。「中央図書館」もフィッシャーらやリンらの論文と同様に、「中立な領域」と「人を平等にすること」という2つの特徴を満たしている。

そのほか、全国に3273館<sup>3</sup>設置されている公立図書館は、地域住民の身近な存在である。文献調査により、高齢者にとって図書館は自宅の近隣に設置されていてほしい施設であり、今後も利用したい公共施設の上位に入っていることが明らかになった<sup>4</sup>。そして、図書館は高齢者の好ましい、ふらっと気軽に足を運べる居場所として挙げられている<sup>5</sup>。インタビュー調査において、若いときから公立図書館を利用しており、図書館を長期に渡って利用している高齢者は複数名いた。以上を踏まえ、公立図書館は高齢者にとって親近感がある場であり、日常生活において必要な場と言える。また、高齢者が図書館へのイメージを既に有している場合は、新規的に設置された施設と比べ、図書館はどのような機能を有しているかが認知されている身近な施設であり、高齢者にとってある程度来館のハードルが下がると考えることも可能ではないか。

加えて、豊富な資料を所蔵しており、「本の作者と本を通じて知り合いになった」(F)というコメントにみられるように、ある意味では、公立図書館を、多様な資料を通じて他者と

の時空を超えて、交流することが可能な場として見なすこともできる。実際には、地域住民は、資料を利用やイベントの参加といった多様な目的を持ち、公立図書館に集まってくる。したがって、高齢者が館内にて、異なる年齢層や社会背景の個人に出会える可能性は十分考えられる。

第三の場の概念はアメリカ発祥の概念であるものの、日本において、第三の場へのニーズが強く存在していると言われている<sup>6</sup>。時代や文化が異なると、第三の場への需要度は変化するが個人が元気よく、日常生活を送るには第三の場が無くてはならない。そして高齢者が他者と交流や触れ合う機会が比較的少なく、一人でいる時間が多くなってくると心身の健康を保ちにくくなるため、他者と交流ができる第三の場への需要は他の年代と比べ高いとオルデンバーグが著書の中で論じている<sup>7</sup>。確かに、オルデンバーグは著書の中では図書館をフランスのカフェやイギリスのバーのように章を立てて取り上げてはいない。しかしながら、同書の第三の場の例として掲載した写真のうち、図書館のホールでイベントが行なわれている写真があった。これは、図書館を第三の場として捉える可能性を示すものではないだろうか。また、グループ活動やおはなし会を重視してきたため、公立図書館における活動を概観すると、公立図書館にはすでに第三の場を満たす側面があるのではないかとの指摘もある<sup>8</sup>。

以上の文献調査及びインタビュー調査の結果から、その特徴や重視してきた活動により、公立図書館はあらかじめ「中立な領域」と「人を平等にすること」という共通の特徴を満たしており、人々が気軽に行くことができ、集うことができる場であるということが出来る。そして、高齢者に必要とされており、他者と交流するきっかけを作り出すことができる。高齢者の第三の場として機能するには、まず、公立図書館が既に有している全国的で広域な範囲における奉仕が可能であるという点や、利用しやすく、多様な交流の機会が潜在的に存在しているといった特徴が欠かせないと考えられる。

## 5.2 今後に向けた取り組み

### 5.2.1 高齢者向けのイベントや行事を開催

オルデンバーグは著書において、第三の場の例として、アメリカのシアトル市に位置する複合施設の中で行なわれているイベントの様子を紹介している(図 5-1)<sup>9</sup>。イベント後は、参加者が自発的に交流しているといった記述があり、このようなイベントや行事は他の利用者と出会う、交流するきっかけとなる可能性が推察される。

一方、本研究のインタビューではイベントや行事へ継続的に参加する高齢者はおらず、結果的に、「会話が主な活動」という第三の場の重要な特徴を支持するコメントは見られなかった。しかしながら、面白いイベントや興味があるイベントがあるなら参加したいという、高齢者の参加意欲が見られた。国立国会図書館の実態調査では、公共図書館及び移動図書館の利用目的の項目である、「展示会やイベントに参加する」人の割合が性別と年

代層別に掲載されている。これらの項目に当てはまる高齢者の割合が高く、男女とも、60代・70代以上が上位3位以内であり、女性は60代が1位で70代以上が2位、男性は70代以上が1位で、60代が3位であった<sup>10</sup>。つまり、高齢者が興味を持つイベントもしくは行事の開催への需要が存在し、積極的に参加する高齢者の存在が見込まれるだろう。



図 5-1 アメリカの複合施設におけるストーリーテリング

また、イベントや行事といったグループ活動の開催は高齢者が公立図書館に対する認識に影響すると思われる。インタビュー調査より、高齢者の図書館に対する認識をまとめた結果、「中央図書館」に限らず、図書館と関連するイメージでは、文化・知識・情報と結びつくコメントが一番多く、図書館を、「知的欲求を満たす場」、「勉強する人が来る場」や「情報にアクセスする場」として捉えている高齢者が多いと推察できる。

本調査では、少なくとも、調査対象である高齢者は資料のために、「中央図書館」の様々なサービスを利用していることが明らかになった。前述した国立国会図書館の調査においても、「図書、視聴覚資料やその他の図書館資料を借りる/返す」と「図書、雑誌、新聞などを図書館で閲覧する」<sup>11</sup>が主な利用目的であることが明らかになっており、本研究と類似した結論が得ている。このような図書館の利用経験は前述したイメージと大きく関係しているだろう。逆に言うと、館内でのイベントや行事といったグループ活動への継続的に参加することで、高齢者の既存の意識へ変化もたらし、現在の認識を加え、「知り合いができる場」や「イベントを楽しむ場」と認識するようになり、公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性が高くなるのではないかと。

また、他者と出会える、交流できる場という図書館像に対し、本調査では半数の高齢者が肯定的な態度を示しており、他年代もしくは同年代の人と交流したいと語った高齢者が複数名いた。先行研究においても、高齢者に交流できる場としての図書館へのニーズが存在していることが明らかになっている<sup>12</sup>。そして、図書館を既に交流する場または活動しているコミュニティの場として利用している高齢者がいるという調査結果が上がっている<sup>13</sup>。図書館

側の動向を見ると、これからの公立図書館の役割について、地域住民の情報に関するニーズに対応できる拠点としての役割の強化、そして、まちづくりの中核となる地域住民の交流の拠点としての機能の強化等に関する議論が見られる<sup>14</sup>。

したがって、これからの公立図書館の高齢者サービスを考える際、これまで重視してきた資料と記録を収集・整理し、高齢者の利用に資するという既存の役割を果たすと同時に、イベントや行事にも力を入れ、ほかの利用者と出会い、交流するきっかけを提供することも必要であろう。高齢者が他者と知り合い、新しいこと知ること、図書館への認識の変化をもたらすことで、将来的には、地域とつながりができ、高齢者の社会孤立問題の防ぐ効果も期待される。これらの変化が連鎖的に生じることで、公立図書館が高齢者の第三の場により近づいていくのではないだろうか。

### 5.2.2 物理的基盤としての館内空間への考慮

高齢者の認識を変え、高齢者に他者と出会い、交流するきっかけを提供するには、図書館内で交流のために必要な空間を準備しなければならない。このように、物理的基盤として何が必要かについても、公立図書館が高齢者の第三の場として機能する上で考えるべき要素であろう。

「中央図書館」は2階建てだが、2階には多目的ホール、集会室や図書館事務室があり、利用者が頻繁に利用している図書や視聴覚資料などの棚、閲覧スペースは1階のみに設置されている。そして現在の閲覧席は48席<sup>15</sup>である。インタビュー調査では、「中央図書館」は「狭い」といった認識を持つ者が多数見られ、更に、館内では緊張すると語った者もいた。このようなコメントは「中央図書館」の物理空間の特徴と紐づけられると考えられる。以上の結果をまとめると、「中央図書館」は非滞在型図書館であるという結論が導き出せる。

ここで、インタビューでは数名が理想的な図書館として挙げており、ゆったりできると評価している土浦市立図書館（以下、土浦図書館）を比較対象として取り上げる。土浦図書館は、2017年11月にオープンした複合施設「アルカス土浦」内にあり、土浦市民ギャラリーと併設されている。2018年現在、茨城県内で最も規模が大きい公立図書館である<sup>16</sup>。土浦駅の隣という立地で、図書館の入口まで連結する歩道橋もあり、快適なアクセス環境にある。2018年現在、駅中に新しい商業施設が建設されており、今後も駅周りを利用する住民は更に増えると思われる。利用案内によれば、土浦図書館の延床面積約は5,120平方メートルで、閲覧席は約650席である。

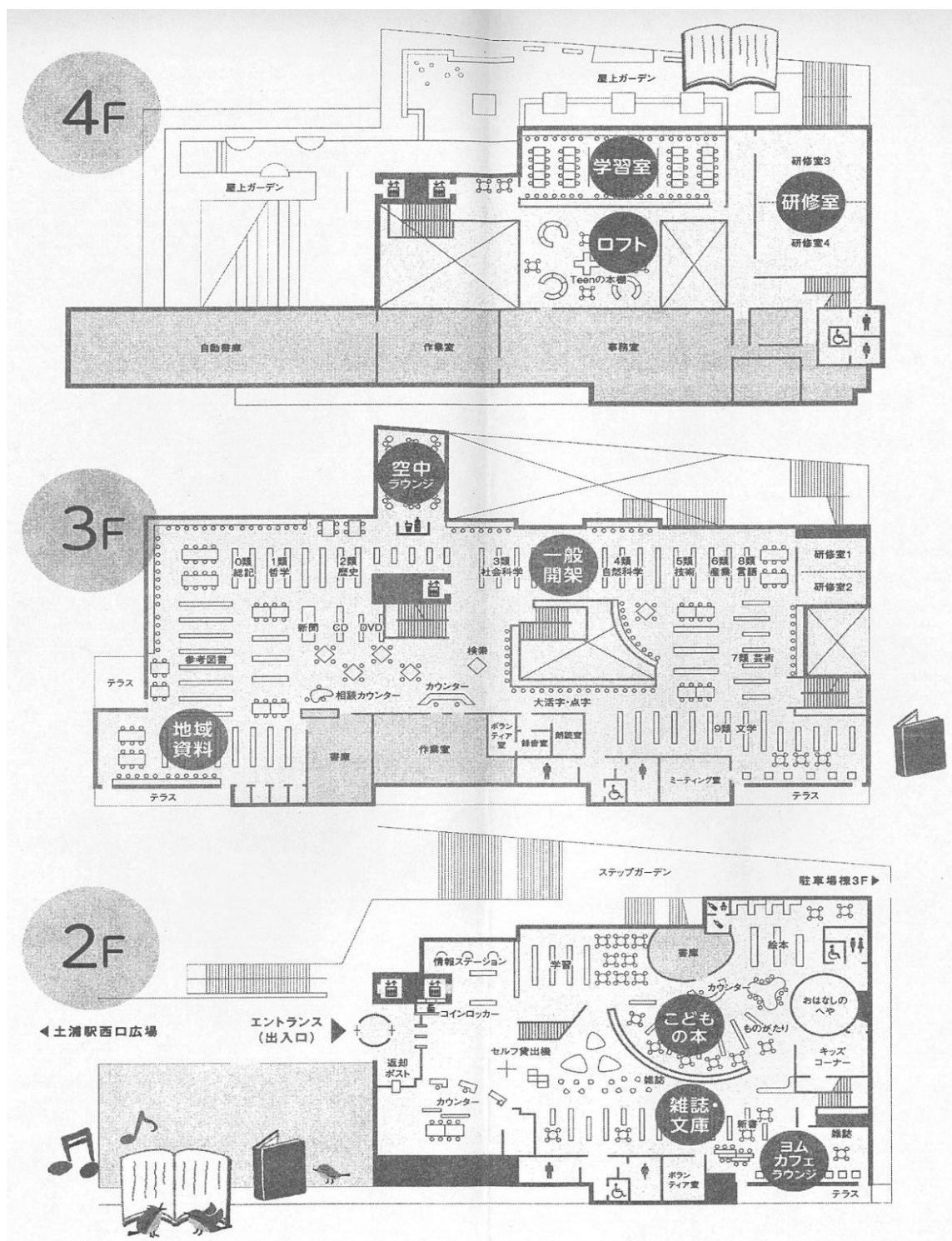


図 5-2 土浦市立図書館フロア案内図（「土浦市立図書館利用案内」より引用）

「アルカス土浦」の2階から4階に図書館が入っており、フロア図は5-2の通りである。書架や閲覧席のほか、会議室や研修室、学習室、本研究の調査協力者が言及していたコーヒ



ーを飲みながら館内資料を読める「ヨムカフェラウンジ」や、眺めのいい「空中ラウンジ」、ロフトと呼ばれるコミュニティスペースなどがあり館内にて撮影された写真(図5-3～図5-6)から内装やレイアウトなどの様子が伺える。用意された閲覧席の種類も多く、館内所蔵の資料を調査・研究のために使う席や、窓向きの低めのソファ席などがある。土浦図書館では、多様な空間を用意しており、利用者は自身の需要に合わせて使い分けることができ、図書館側も館内にて様々なイベント、行事を展開可能なように設計されている。このような公立図書館は、「中央図書館」と比べ、交流などができる空間が用意されており、ゆったり過ごせるといった点から、第三の場の特徴をより多く満足できる可能性があると考えられる。

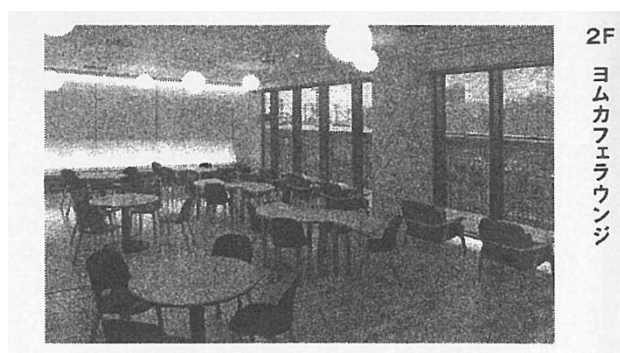


図 5-3 2階にあるヨムカフェラウンジ  
(「土浦市立図書館利用案内」より引用)

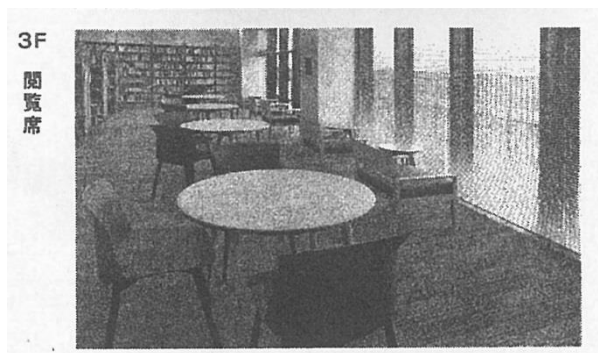


図 5-4 3階の窓際にある閲覧席  
(「土浦市立図書館利用案内」より引用)

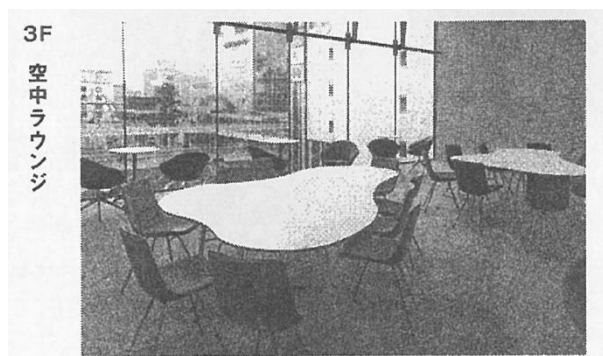


図 5-5 空中ラウンジの様子  
(「土浦市立図書館利用案内」より引用)

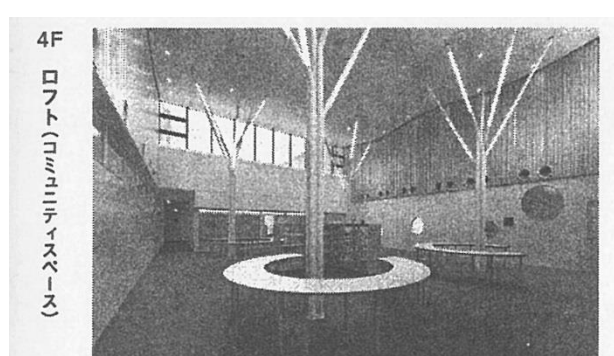


図 5-6 4階にあるコミュニティスペース  
(「土浦市立図書館利用案内」より引用)

小林らは、日本における第三の場は必ずしもオルデンバーグが提唱した第三の場と一致しないと主張し、第三の場を集いや交流できる居心地の良い場所「交流型」と、人を気にしないでいられる「マイプレイス型」に分類している<sup>17</sup>。片山らはこの討論を踏襲し、更に、交流型の第三の場でも、社交が主な目的とする「社交交流型」と社交以外明確の目的を持つ「目的交流型」に区分することができると論じている。また、第三の場が上記の3



つの型のうち、1つの型だけの特徴を有する可能性もあり、複数の型を重複して有する場合もあるという<sup>18</sup>。こうした議論に従えば、今回の調査では、静かに居心地よく本を読みたいと述べた高齢者には「マイプレイス型」、知らない人にも話をかける、おしゃべりが楽しいとコメントし、地域住民との出会いや交流にたいして積極的な高齢者には「社交交流型」、特定の興味がありもしくは同じ意識を持つ人と交流したい高齢者は「目的交流型」に対する需要があると考えられる。このように、高齢者といってもひとくくりに扱うことは不可能であり、それぞれの利用目的によって違う型の第三の場への需要があると考えられ、館内で多様な空間を提供する重要性を説く必要があるだろう。

更に、公立図書館の建築理念について、根本は『場所としての図書館・空間としての図書館』にて、公立図書館は、場所の特殊性より施設が果たす機能が重要であると理解されてきたため、地域性より共通性が重視されているという。同書では、そのような理解を機能主義と呼んでおり、この「機能」は資料を提供するという意味である<sup>19</sup>。日本の図書館建築においては、この機能主義が反映されているという。これは1970年代から1980年代において、公立図書館は資料の保管場所と勉強できる施設にすぎない観念を払拭するため、市民に資料を提供施設としての図書あるいは資料の貸出機能を持った図書館のイメージを前面に出す必要性があったためであると主張している。

インタビュー調査の結果では、高齢者が図書館に対するイメージや印象について、「本を借りられる」や「資料の貸出ができる場所」、「情報源」といったコメントが複数見られる。また、図書館の利用目的について、離職前も、インタビューを受けていた時点でも、所蔵の資料を利用するために図書館を利用している高齢者がほとんどだった。このようなイメージや印象は、そして利用の仕方は、資料を提供することに重点を置いた機能主義のもとで作られた図書館、またそれらの図書館が提供しているサービスを利用してきた経験によって影響されているものではないか。

これらを踏まえ、公立図書館が高齢者の第三の場として機能する際、物理的な基盤への考慮は不可欠であり、その際、資料を収集・整理・提供を重視するという機能主義から離脱しなければならないという視点も重要となると考えられる。

### 5.2.3 「世話人」としての図書館職員

久野による「フィンランドにおける『第3の場』(third places)としての図書館」<sup>20</sup>では、第三の場の隠れている「第9番の特徴」——「世話人」の存在を提唱している。久野によると、「世話人」は第三の場にいる従業員やオーナーであり、その場の居心地良さを保っているという。同研究では、「司書」を「世話人」と見なし、フィンランドの公共図書館において、「司書」は利用者に対応し、利用者と挨拶を交わし、またはイベントのお茶やお菓子を用意するなど、利用者に満足させる公共図書館を作り出すには司書の存在が重要であると述べられた。

本研究のインタビューでは、調査協力者が「中央図書館」への雰囲気や印象について語っ

た際、司書のみではなく、「中央図書館」で働く人について言及している高齢者が複数いた。

「あんまり気軽に聞ける雰囲気醸し出してない」(B)という意見はあったものの、「仕事はテキパキでとても気持ちいい」(C)、親切や丁寧、または優しいなど、好意的な印象が殆どだった。このように、図書館職員に対する印象として、気軽にないという意見も一部あるが、その仕事ぶりは総合的に高く評価されており、「中央図書館」の職員は、久野が指摘する「世話人」の役割を担っているといえる。総じて調査協力者は、図書館を利用する際、資料に関する事項のみでなく、図書館の職員の対応や雰囲気も含めて、図書館に対する印象を構成している様子が伺える。

高齢者が、公立図書館が提供する様々なサービスを利用する若しくはボランティアとして活動するにあたり、図書館職員との関わりや交流が生まれる。その際、高齢者への対応を認識する機会や、図書館職員に対する何らかの印象を抱く機会も生じる。この場合、職員は図書館の窓口のような存在となり、図書館職員に対する印象は図書館全体に対する印象と結びつけて評価されている可能性がある。そのため、利用者と接する際の図書館職員の態度や利用者に与える印象といったところもサービスの一環として、重視すべきであり、第三の場を構成する上で踏まえるべき要素と考えられるだろう。

### 5.3 本章のまとめ

本章では、文献調査及びインタビュー調査の結果を踏まえ、公立図書館が高齢者の第三の場として機能することを前提として考察を行った。機能する際、既に持っている要素とこれから考慮すべき要素について述べた。

既に持つ要素として、公立図書館が持ち合わせている特徴を生かす重要性を踏まえ指摘を行った。無料の原則に沿ってサービスを提供し、誰にでも平等に開かれるという法的根拠に基づいた公立図書館の特徴を述べた。これを踏まえ、公立図書館の全国に多くの拠点を持ちアクセスしやすいという特徴や、人々が集まるグループ活動も重視する姿勢に触れ、これらの特徴を保ち続ける必要性を論考した。

そして、これから考えるべき要素として、1つ目は、高齢者向けのイベントや行事の開催が有効である可能性を述べた。イベントや行事への参加により、高齢者は他者との交流もしくはつながりができ、図書館への印象も変化することで、将来的には、高齢者の社会的孤立問題の防止も効果として期待できるのではないかと。2つ目は、第三の場にとって、物理的基盤への考慮は不可欠であることを指摘した。この視点から、高齢者に目的別な空間を用意し、更に資料提供に力をいれるという機能主義から離れて考慮する必要がある。最後に、図書館にいる「人」の要素である図書館職員は高齢者に触れ合う機会が多く、図書館の一部として評価されると予想した。この場合、第三の場として機能するには、図書館の居心地良さを保つ、良き「世話人」となることができる図書館職員が必要である。

- <sup>1</sup> フィッシャー・E.カレンなど. “場としてのシアトル公立図書館：中央図書館におけるスペース、コミュニティ、情報の再概念化”. ブッシュマン・E・ジョン、レッキ・J・グロリア編著. 場としての図書館. 川崎良孝、久野和子、村上加代子訳. 京都大学図書館情報学研究会. 2008, p.199-237
- <sup>2</sup> Lin Hui, Pang Natalie, Luyt Brendan. Is the library a third place for young people? *Journal of Librarianship and Information Science*. 2015, 47(2), p.145-155.
- <sup>3</sup> 日本図書館協会. 公共図書館集計 (2017 年) .  
<http://www.jla.or.jp/Portals/0/data/iinkai/%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E5%A7%94%E5%93%A1%E4%BC%9A/toukei/%E5%85%AC%E5%85%B1%E9%9B%86%E8%A8%88%202017.pdf> (参照 2018-12-20)
- <sup>4</sup> 経済広報センター. 高齢社会のあるべき姿に関する意識調査 (2012).  
[www.kkc.or.jp/data/release/00000080-1.pdf](http://www.kkc.or.jp/data/release/00000080-1.pdf) (参照 2017-05-20)
- <sup>5</sup> 樋野宏宏, 石井儀光. 高齢者における居場所の利用実態と意義. 日本建築学会計画系論文集. 2014, 79(705), p.2471-2477.
- <sup>6</sup> 久繁哲之介. サード・プレイスから都市再生を考える.  
[www.minto.or.jp/print/urbanstudy/pdf/u40\\_01.pdf](http://www.minto.or.jp/print/urbanstudy/pdf/u40_01.pdf) (参照 2018-11-10)
- <sup>7</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, p.49.
- <sup>8</sup> 川崎良孝, 吉田右子. “第 4 世代の図書館史記述”. 新たな図書館・図書館史研究: 批判的図書館史研究を中心にして. 京都図書館情報学研究会, 2011, p.124.
- <sup>9</sup> Oldenburg Ray. *The Great Good Place*. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, 326p.
- <sup>10</sup> 国立国会図書館. 図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査 (2015).  
[http://current.ndl.go.jp/FY2014\\_research](http://current.ndl.go.jp/FY2014_research). (参照 2018-03-12)
- <sup>11</sup> 国立国会図書館. 図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査 (2015).  
[http://current.ndl.go.jp/FY2014\\_research](http://current.ndl.go.jp/FY2014_research). (参照 2018-03-12)
- <sup>12</sup> 岡本一世, 溝上智恵子. “第 8 章 高齢者の図書館サービス利用とニーズ”. 超高齢社会と図書館：生きがいづくりから認知症支援まで. 国立国会図書館関西館図書館協力課, 国立国会図書館, 2017, p.121-140.
- <sup>13</sup> 経済広報センター. 高齢社会のあるべき姿に関する意識調査. [www.kkc.or.jp/data/release/00000080-1.pdf](http://www.kkc.or.jp/data/release/00000080-1.pdf) (参照 2017-05-20)
- <sup>14</sup> 文部科学省. 公立社会教育施設の所管の在り方等に関するワーキンググループにおける論点整理 (案) (2018). [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo2/012/attach/1406489.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/012/attach/1406489.htm) (参照 2018-08-17)
- <sup>15</sup> 茨城県図書館協会. 平成 30 年度茨城の図書館.  
<https://www.lib.pref.ibaraki.jp/ila/files/toukei/h30tosyokan.pdf> (参照 2018-10-26)
- <sup>16</sup> 茨城県図書館協会. 平成 30 年度茨城の図書館.  
<https://www.lib.pref.ibaraki.jp/ila/files/toukei/h30tosyokan.pdf> (参照 2018-10-26)
- <sup>17</sup> 小林重人, 山田広明. マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究 - 石川県能美市の非常設型「ひよっこりカフェ」を事例として-. 地域活性研究, 2014, 5, p.3-12.
- <sup>18</sup> 片岡亜紀子, 石山恒貴. 地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果. 地域イノベーション, 2017,(9), p.73-86.
- <sup>19</sup> 根本彰. 場所としての図書館・空間としての図書館: 日本、アメリカ、ヨーロッパを見て歩く. 学文社. 2015, 125p.
- <sup>20</sup> 久野和子. フィンランドにおける「第 3 の場」(third places)としての図書館. 神戸女子大学文学部紀要, 2016(49), p.101-114.

## 6. 終わりに

本章では、本研究各章の内容をまとめ、本研究の限界及び今後の課題について言及する。

### 6.1 本研究のまとめ

第1章では、本研究の背景・目的、先行研究と論文の構成を述べた。研究背景として、高齢化率の上昇により、日本は超高齢社会を迎え、公立図書館を利用する高齢者のさらなる増加が見込まれ、高齢者に対する公立図書館の役割を改めて考える必要性を課題として提起した。また、その際、高齢者の社会参加を促すということを踏まえ、第三の場の視点は有用であると考えた。これを踏まえ、本研究では日本の公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性を検討することを目的とした。

第2章では、日本の高齢者の現状と図書館について述べた。まず、高齢者を取り巻く社会の現状や高齢者の社会的孤立問題及びその影響を概観し、また、高齢者に他者との交流する機会を提供する必要性を論じた。次に、公立図書館を位置づけと機能を整理し、公的施設が社会教育機関である同時に、地域の交流拠点としての機能も期待されていることを明らかにした。加えて、図書館という文脈では、高齢者サービスは障害者サービスとして捉えていた時期があったものの、現在は独立したサービスとして捉える流れがあることを指摘した。更に、「これからの図書館サービスにおける高齢者の位置づけを考える必要がある」<sup>1</sup>と認識している公立図書館が多数あるという調査結果を踏まえ、これからの高齢者サービスが変化していく可能性について論考した。また、その際に、高齢者の他者との交流する機会を提供するための理論的な概念として、第三の場の理論を挙げた。

第3章は、まずオルデンバーグが提唱した第三の場を詳説した。第三の場とは、公共的およびきり居心地いい場で、人に定期的で、自発的で、非形式的、楽しく参加できる集いのために場を提供する。共通する特徴として：①中立な領域、②人を平等にすること、③会話が主な活動であること、④アクセスしやすく・協調的であること、⑤常連がいること、⑥建物が目立たないこと、⑦陽気で遊び場的な雰囲気、⑧家を離れた時のもう1つの家であることを有する。なお、良き第三の場は個人に①目新しさ、②積極的な人生観、③元気の回復、④ひとまとまりの友達の4つの利益をもたらすことができる。次に、第三の場と第一の場・第二の場は等しく、個人の生活には不可欠であること、高齢者は他の年代と比較し、第三の場を必要としていることを述べた。更に、第三の場を用いて図書館という場を考察した先行研究を概観した結果、第三の場としての図書館の意義が高く評価されていることが明らかになった。また、同時に本研究の位置づけを定めた。

第4章では、日本の公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性を明らかにすることを目的とした事例調査の概要と結果・考察について述べた。事例調査として、「中央図書館」にて高齢者の図書館利用の頻度、利用の目的、つくば市の「中央図書館」へのイメ

ージなどを明らかにするため、半構造化インタビュー調査を行った。本調査の結果は、下記のとおりである。

1) 調査協力者は主に「中央図書館」もしくは地域交流センターの図書室の所蔵資料を利用するため来館している。

2) 継続的に「中央図書館」のイベントや行事に参加している者がなく、大きな理由として「興味がない」もしくは「面白くない」の2つが挙げられている。

3) 「中央図書館」の館内では、利用者と会話をしたことのない者が多数で、図書館職員と会話するは貸出など図書館サービスに関する内容が主であった。

4) 「中央図書館」の雰囲気への印象について、静かという答えが一番多く、好意的なコメントは多数あったものの、暗いや狭いといった不満もあった。

5) 「中央図書館」を利用することで楽しさを感じるまたは元気をもらった経験のある者が多いが「人」による体験ではなく、資料を利用することによって得られた経験が主だった。

6) 用がなくても気軽にに行ける場所についての答えはそれぞれで、図書館との共通点や違いもそれぞれだったが、図書館は無料で利用できる施設であるという意見が多く挙げられた。

7) 「中央図書館」に気軽に行けて他者と会話できる場所を作ることについて、肯定的な見解と否定的な見解が半数ずつであった。

8) 「中央図書館」への評価は全体に高く、好意的な評価が多く、調査協力者の日常生活において大事な場所であると認識されている。

これらの結果を踏まえ、第三の場の8つの特徴と個人にもたらす4つの利益を用い、「中央図書館」はどのくらい第三の場として機能しているのかを考察した。その結果、①中立な領域、②人を平等にすること、③常連がいることという3つの特徴を満たしており、資料を通して、高齢者は①目新しさ、②積極的な人生観と③元気の回復の3つの利益が得られたことが明らかになった。更に、「中央図書館」が第三の場の特徴を満たすためには、物理アクセス的しやすさの確保、館内にて快適に過ごせる空間を提供、イベントなど他者との触れ合うきっかけの必要性を論じた。一方、高齢者の意識について、図書館へのイメージと印象は、未だに文化・情報・知識との関係が強かった。また、図書館に対し、「快適さ」「一人で過ごせるスペース」「くつろぎ」の要望があり、一部の高齢者にとっての理想の図書館像として、リラクゼーション施設としての要素が含まれていると考えられる。そして、誰かと出会い交流する場としての図書館が、一部の高齢者にとって需要があることが明らかになった。

第5章では、第2、3章の文献調査の結果、並びに第4章のインタビュー調査と中央図書館における観察の結果に基づいて、本研究の目的である、日本の公立図書館は高齢者の第三の場として機能する可能性を考察した。利用者を区別せず、無料の原則に沿ってサービスを提供する施設であることが、公立図書館と第三の場と親和性が高い要素と考えられ、保持す

る必要がある。インタビュー調査から、一部の高齢者には公立図書館におけるイベントや行事への参加意欲、そして他者と交流できる場としての図書館に対するニーズがあることが明らかになった。これらのニーズは高齢者の興味を持つイベントや行事を開催することで満たされる可能性がある。また、イベントや行事の開催により、資料を貸出・返却以外の利用目的が広がり、図書館に対する認識の変化をもたらすことに繋がる。これらの展開が、高齢者の他者との交流やつながりの構築を促進させ、高齢者の社会的孤立問題を防止することに繋がる可能性がある。

一方、それらの目標を実現するには、物理的な基礎、つまり図書館内での必要な空間を提供しなければならない。本研究では、高齢者が言及している土浦図書館を取り上げ、読書のほか、研修・討論・リラックスできる空間もあり、館内には多様な空間を用意し、異なる需要を満たすことが可能な公立図書館は高齢者の第三の場として機能し得る可能性を論考した。また、日本における第三の場は、オルデンバーグが提唱した理論が異なる文脈で展開し<sup>2</sup>、1つの第三の場には複数の特徴を持つ可能性がある<sup>3</sup>といった主張から、館内には目的別の空間を用意することを強調した。更に、図書館を作る際、資料提供という側面を重視する機能主義が、高齢者の図書館へ抱く印象と関連している可能性を述べた。最後に、図書館職員に関する印象も図書館への印象と連動し、第三の場としての図書館を考える際に考えるべき要素の1つであることを論じた。

日本の図書館法は国民の教育と文化の発展に寄与することを目的としており、図書館はこのような目標を達成するため資料の収集、整理、そして公衆に提供することに努めている。このような捉え方は時間を経て定着しており、公立図書館に対する印象としても多く当てはまるだろう。しかしながら、図書館の歴史からすれば、かつて、図書館は少数の人しかアクセスできず、利用できない時期もあり、時代によって社会における図書館像も変化してきたと言える。たとえ現在の日本の公立図書館は、人々が気軽に行けて、集う、他者と出会える、そして楽しい会話を楽しめるというイメージから遠くても、現在のように無料の原則を守り、平等の利用が可能で、出入り自由といった独特な特徴を保ち続けることで、今後、第三の場という側面を持つ公立図書館が増えていく可能性はないとは言い切れないだろう。

本研究においては、公立図書館が教育と文化の発展に寄与することや社会教育施設としての法的な位置づけを否定する意図はない。公立図書館が持つ特徴を活かし、高齢者の日常生活の中で、第三の場の1つの選択肢になりうることを前提として考察を行っており、公立図書館を高齢者の唯一の第三の場として捉えていないことを強調しておきたい。

## 6.2 本研究の限界と今後の課題

本研究では、日本の公立図書館は高齢者の第三の場として機能する可能性を考察することが目的として、「中央図書館」を事例として取り上げ、オルデンバーグが提唱した第三の場の枠組を用いて調査を行った。調査協力者は、高齢者による自主的な応募と筆者が図書館のエントランスにおける声掛けにより募集した。年齢以外の条件を設置しない、一般的な高

齢の利用者に対し調査を行うという前提で募集を行った。その際、ボランティア活動もしくは「中央図書館」の主催しているブックトークのような恒例イベントや行事に参加している協力者は、実質的には1人もいなかった。ボランティア、もしくは継続的に図書館のイベントに参加している高齢者群と基本資料のみを利用する高齢者群を比較することによって、高齢者にとって、図書館におけるどのような場が第三の場として機能する可能性を更に全面的に考察できるかもしれない。また、公立図書館が高齢者の第三の場として機能しうるか否かについては、利用者側だけでなく、図書館側の意識によって影響されると考えられる。今回は、高齢な利用者の社会的孤立の防止に着目したため、利用者に対する調査に留まっているが、図書館側の意識を明らかにすることも必要であろう。

また、本研究では、つくば市立中央図書館を1館のみ事例として取り上げている。「中央図書館」は非滞在型図書館であるため、結果には偏差が存在すると思われる。日本において公立図書館は約3300館<sup>4</sup>存在し、運営主体や地域ごとの状況も異なる。よって、本調査で得られた結論を適用するには限界があると考えられる。そのため、様々な環境の公立図書館で事例調査を実施することによって、より普遍的で、客観的な結論を得られるのではないかと考えられる。

更に、第三の場について、オルデンバーグは個人の生活において、第三の場は不可欠だが、個人の第三の場へ需要度は、時代や文化的背景により変化すると主張している。したがって、公立図書館だけでなく、第三の場の概念を用いて日本の様々な場を考察する際、日本という背景において、個人がどのくらい第三の場を必要としているかを視野に入れなければならない。この視点を用いることで、日本における第三の場に関する研究がより深みを増すと考えられる。

---

<sup>1</sup> 呑海沙織, 志賀渉, 溝上智恵子. 公共図書館における高齢者サービスの現状. 日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集. 2014, p.45-48.

<sup>2</sup> 小林重人, 山田広明. マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究 —石川県能美市の非常設型「ひよっこカフェ」を事例として—. 地域活性研究, 2014, 5, p.3-12.

<sup>3</sup> 片岡亜紀子, 石山恒貴. 地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果. 地域イノベーション, 2017,(9), p.73-86.

<sup>4</sup> 日本図書館協会. 公共図書館集計(2017年).

<http://www.jla.or.jp/Portals/0/data/iinkai/%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E5%A7%94%E5%93%A1%E4%BC%9A/toukei/%E5%85%AC%E5%85%B1%E9%9B%86%E8%A8%88%202017.pdf>. (参照 2018-11-25)

## 謝辞

本研究を進めることにあたり、自分の一人の力では限界あることを知り、多くの方にご協力を頂きました。

まず、つくば市立「中央図書館」の方々に大変お世話になりました。インタビュー調査の実施についてご快諾いただきました。そして、調査の前から、募集用のチラシの内容を相談させていただき、館内の貸出カウンターなど見やすいところにチラシを置かせていただきました。協力者の募集が進まないなか、ボランティアの方々にも声をかけいただきました。また、図書館のエントランスにて、高齢の利用者に声を掛けるたびにも、たくさんの協力を得ました。インタビューのために、館長室を何度も貸していただき、感謝しきれません。

また、インタビュー調査にご協力してくださった皆様にもお礼を申し上げます。日程をあわせて、わざわざインタビューにお越しいただき、本当にありがとうございました。貴重なお話たくさん聞けて、とても楽しかったです。感銘を受けたお話もたくさんありました。

論文を執筆するにあたって、ゼミでの議論のみならず、いろんな意見をくださったゼミの皆さん、そして貴重な時間を割って、丁寧に日本語を直してくださった川口さんと嶺井さんにお礼を申し上げます。

更に、論文のテーマに関する知識や考え方の整理まで、ヒントを与えて頂いて、ご指導いただきました溝上先生にも大変感謝しております。

最後に、指導教員である呑海先生には、研究生時期から、最後までお世話になりました。毎回ゼミでのご指導に限らず、別途時間を取っていただき相談させていただくこともありました。そして、研究だけでなく、自分自身の考え方を正してくれる貴重なアドバイスもたくさんいただきました。誠にありがとうございました。



## 引用・参考文献

1. 秋田県立図書館. 秋田県立図書館運営方針（平成 30 年度）.  
<https://www.apl.pref.akita.jp/about/about-policy> (参照 2019-01-05)
2. 糸賀雅児. 教育委員会制度改革と図書館. 図書館雑誌. 2014, 108(2), p.108-111.
3. 糸数未希. 地域の居場所としてのこども図書館. こどもの図書館. 2016, 63(12), p.6-8.
4. 茨城県. 茨城県の人口と世帯（推計）-平成 30 年 12 月 1 日現在- (2018 年 12 月)  
<http://www.pref.ibaraki.jp/kikaku/tokei/fukyu/tokei/betsu/jinko/getsu/jinko1812.html>  
(参照 2018-12-30)
5. 茨城県. 市町村高齢化率 (2018).  
<http://www.pref.ibaraki.jp/hokenfukushi/chofuku/choju/stats/documents/sityousonn301001.pdf> (参照 2019-01-03)
6. 茨城県. 第 7 期いばらき高齢者プラン 21 総論前編 (2018).  
<http://www.pref.ibaraki.jp/hokenfukushi/chofuku/choju/documents/02souronnzennpen.pdf> (参照 2018-08-23)
7. 茨城県図書館協会. 平成 30 年度茨城の図書館.  
<https://www.lib.pref.ibaraki.jp/ila/files/toukei/h30tosyokan.pdf> (参照 2018-10-26)
8. 小田原市. 小田原市立図書館. <http://www.city.odawara.kanagawa.jp/public-i/facilities/library/libra/toshokan.html> (参照 2018-12-28)
9. オルデンバーク, レイ. サードプレイス: コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」. 忠平美幸訳. みすず書房, 2013, 528p.
10. 片岡亜紀子, 石山恒貴. 地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果. 地域イノベーション, 2017,(9), p.73-86.
11. 金光淳. 社会ネットワーク分析の基礎. 勁草書房, 2003, 321p.
12. 川崎良孝, 吉田右子. 新たな図書館・図書館史研究: 批判的図書館史研究を中心にして. 京都図書館情報学研究会, 2011, 420p.
13. 経済広報センター. 高齢社会のあるべき姿に関する意識調査 (2012).  
[www.kkc.or.jp/data/release/00000080-1.pdf](http://www.kkc.or.jp/data/release/00000080-1.pdf) (参照 2017-05-20)
14. 小林重人, 山田広明. マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究 -石川県能美市の非常設型「ひよっこりカフェ」を事例として-. 地域活性研究, 2014, 5, p.3-12.
15. 久野和子. 新しい批判的図書館研究としての「場としての図書館」(“Library as Place”)研究—その方法論を中心にした考察. 図書館界, 2014, 66(4), p.268-285.
16. 久野和子. フィンランドにおける「第三の場」(third places)としての図書館. 神戸女子大学文学部紀要, 2016(49), p.101-114.
17. 久野和子. 「第三の場」としての学校図書館. 図書館界. 2011, 63(4), p.296-313.

18. 久留米市. 市民文化部中央図書館.  
<https://www.city.kurume.fukuoka.jp/1500soshiki/9128library/index.html> (参照 2018-12-28)
19. 國上佳代ほか. 多摩ニュータウン諏訪・永山地区における高齢者のための居場所形成とその利用・認知に関する分析. 日本建築学会計画系論文集. 2011, 76(663), p.973-981.
20. 国立国会図書館. 図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査 (2015).  
[http://current.ndl.go.jp/FY2014\\_research](http://current.ndl.go.jp/FY2014_research). (参照 2018-03-12)
21. 国立国会図書館関西館図書館協力課. 超高齢社会と図書館：生きがいづくりから認知症支援まで. 図書館調査研究レポート, 2017, (16), 172p.
22. 近藤周子. 癒しと快復の場としての図書館：私の居場所はここに. みんなの図書館. 1999, (264), p.11-14.
23. 坂部豪. 座談会 青少年の居場所としての図書館. LISN: Library & information science news. 2009, 142, p.1-21.
24. 白瀬由美香ほか. 高齢者の居場所作り事業に関する検討：網走市高齢者ふれあいの家をもとに. 大原社会問題研究所雑誌. 2015, (680), p.54-69.
25. 塩見昇編著. 図書館概論. 三訂版, 日本図書館協会, 2014, 284p.
26. 塩見昇編著. 図書館概論. 四訂版, 日本図書館協会, 2015, 284p.
27. 塩見昇, 山口源次郎編著. 新図書館法と現代の図書館. 2009, 442p.
28. 静岡市立中央図書館. 静岡市立図書館の使命、目的とサービス方針.  
[http://www.toshokan.city.shizuoka.jp/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=2029](http://www.toshokan.city.shizuoka.jp/?action=common_download_main&upload_id=2029). (参照 2018-06-18)
29. 園田真理子. 住民による福祉の拠点づくり. 居住環境整備論. 放送大学教育振興会, 2012, p.94-107.
30. つくば市. 懇談会等の一覧 (2018年7月).  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page/\\_001/002/710/kodankai](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/002/710/kodankai)  
2018.7.23.pdf (参照 2018-08-30)
31. つくば市. 第2次つくば市生涯学習推進基本計画概要版 (2016).  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page/\\_001/001/500/gaiyou.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/001/500/gaiyou.pdf) (参照 2018-08-26)
32. つくば市. 市長公約事業のロードマップ (平成30年6月改訂版) 冊子.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page/\\_001/002/252/roadmap\\_2018.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/002/252/roadmap_2018.pdf) (参照 2018-08-30)
33. つくば市. 統計つくば 2017.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page/\\_001/002/336/ToukeiTsukuba\\_2017\\_2.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/002/336/ToukeiTsukuba_2017_2.pdf) (参照 2018-10-06)
34. つくば市. 図書館情報紙『ヨモッカ』.

- <http://www.city.tsukuba.lg.jp/kankobunka/bunka/toshokan/1001635.html> (参照 2018-11-15)
35. つくば市. つくば市戦略プランーつくば市未来構想の実現をめざしてー (2015).  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page/001/005/288/senryakuplan.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/001/005/288/senryakuplan.pdf) (参照 2018-08-26)
36. つくば市. 平成 29 年度つくば市民意識調査報告書.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page/001/002/403/29sihimi\\_nishikichosa\\_hokokusho.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/001/002/403/29sihimi_nishikichosa_hokokusho.pdf) (参照 2018-12-10)
37. つくば市立中央図書館. 館内案内図.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page/001/001/620/kannaia\\_nnaizu.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/001/001/620/kannaia_nnaizu.pdf) (参照 2018-11-15)
38. つくば市中央図書館. 規則・統計.  
<http://www.city.tsukuba.lg.jp/kankobunka/bunka/toshokan/1001629.html> (参照 2018-09-30)
39. つくば市立中央図書館. 中央図書館の夏休み期間中の学習室について.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page/001/005/189/No75.pdf#search=%27%E4%B8%AD%E5%A4%AE%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E3%81%AE%E5%A4%8F%E4%BC%91%E3%81%BF%E6%9C%9F%E9%96%93%E4%B8%AD%E3%81%AE%E5%AD%A6%E7%BF%92%E5%AE%A4%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%27](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/001/005/189/No75.pdf#search=%27%E4%B8%AD%E5%A4%AE%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E3%81%AE%E5%A4%8F%E4%BC%91%E3%81%BF%E6%9C%9F%E9%96%93%E4%B8%AD%E3%81%AE%E5%AD%A6%E7%BF%92%E5%AE%A4%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%27). (参照 2019-01-02)
40. つくば市立中央図書館. 図書館運営方針.  
<http://www.city.tsukuba.lg.jp/kankobunka/bunka/toshokan/1001629.html> (参照 2018-10-03)
41. つくば市中央図書館. 図書館の行事.  
<http://www.city.tsukuba.lg.jp/kankobunka/bunka/toshokan/1001622.html> (参照 2018-10-14)
42. つくば市立中央図書館. 平成 30 年度 つくば市の図書館概要. (参照 2018-11-25)
43. つくば市立中央図書館. 平成 30 年度 図書館協議会会議録.  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page/001/003/943/toshokan2018.pdf](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/001/003/943/toshokan2018.pdf) (参照 2019-01-02)
44. つくば市立中央図書館. 利用案内.  
<http://www.city.tsukuba.lg.jp/kankobunka/bunka/toshokan/1001620.html>. (参照 2018-10-26)
45. つくば市保健福祉部高齢福祉課. つくば市高齢者福祉計画 (第 7 期)【平成 30 年 (2018) 年度から平成 32 (2020) 年度】 (2018).  
[http://www.city.tsukuba.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page/001/001/352/koureisy](http://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/001/001/352/koureisy)

- ahukushikeikaku7.pdf. (参照 2018-08-26)
46. 土浦市立図書館. 土浦市立図書館利用案内. (参照 2018-11-25)
47. 東京都足立区. 地域のちから推進部.  
<https://www.city.adachi.tokyo.jp/chiiki/ku/kuse/soshiki-chikara.html> (参照 2018-12-28)
48. 呑海沙織, 志賀渉, 溝上智恵子. 公共図書館における高齢者サービスの現状. 日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集. 2014, p.45-48.
49. 呑海沙織. 高齢社会における図書館サービス. 図書館雑誌. 2014, 108(5), p.313-315.
50. 内閣府. 平成 17 年度 第 6 回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果 (全文).  
[http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h17\\_kiso/index2.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h17_kiso/index2.html) (参照 2018-07-10)
51. 内閣府. 平成 22 年度 第 7 回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果 (全文).  
<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/kiso/zentai/index.html> (参照 2017-11-13)
52. 内閣府. 高齢社会白書 (平成 19 年版). ぎょうせい, 2007, 206p.
53. 内閣府. 高齢社会白書 (平成 22 年版). 佐伯印刷, 2010, 180p.
54. 内閣府. 高齢社会白書 (平成 28 年版). 日経出版, 2016, 180p.
55. 内閣府. 高齢社会白書 (平成 30 年版). 日経印刷, 2018, 229p.
56. 永田治樹編著. 図書館制度・経営論. 藤原印刷株式会社, 2016, 278p.
57. 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学用語辞典. 第 4 版, 丸善出版株式会社, 2013, 284p.
58. 日本図書館協会. 公立図書館の指定管理者制度について-2016 (案).  
<http://www.jla.or.jp/Portals/0/data/kenkai/siteikanrikenkai2016an.pdf>. (参照 2018-06-20)
59. 日本図書館協会. 図書館雑誌. 2008, 102(6), p.368-385.
60. 日本図書館協会. 公立図書館の任務と目標 (2004).  
<http://www.jla.or.jp/ibrary/gudeline/tabid/236/Default.aspx> (参照 2017-11-27)
61. 日本図書館協会町村図書館活動推進委員会. 図書館による町村ルネサンス L プラン 21 : 21 世紀の町村図書館振興をめざす政策提言. 日本図書館協会, 2001, 64p.
62. 日本図書館協会障害者サービス委員会. すべての人に図書館サービスを : 障害者サービス入門. 日本図書館協会, 1994, 108p.
63. 日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編. 図書館ハンドブック. 第 6 版補訂 2 版, 2016, 日本図書館協会, 694p.
64. 日本図書館協会. 公共図書館集計 (2017 年).  
<http://www.jla.or.jp/Portals/0/data/iinkai/%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E5%A7%94%E5%93%A1%E4%BC%9A/toukei/%E5%85%AC%E5%85%B1%E9%9B%86%E8%A8%88%202017.pdf> (参照 2018-12-20)
65. 日本図書館協会用語委員会編. 図書館用語集. 四訂版, 2013, 368p.

66. 根本彰. 「場所としての図書館」に関する議論. カレントアウェアネス, 2005, 286, p.21-25.
67. 根本彰. 場所としての図書館・空間としての図書館: 日本、アメリカ、ヨーロッパを見て歩く. 学文社. 2015, 125p.
68. 久繁哲之介. サード・プレイスから都市再生を考える.  
[www.minto.or.jp/print/urbanstudy/pdf/u40\\_01.pdf](http://www.minto.or.jp/print/urbanstudy/pdf/u40_01.pdf) (参照 2018-11-10)
69. 樋野公宏, 石井儀光. 高齢者における居場所の利用実態と意義. 日本建築学会計画系論文集. 2014, 79(705), p.2471-2477.
70. 藤原靖浩. 居場所の定義についての研究. 教育学論究. 2010, (2), p.169-177.
71. ブッシュマン・E・ジョン、レッキ・J・グロリア編著. 場としての図書館. 川崎良孝、久野和子、村上加代子訳. 京都大学図書館情報学研究会. 2008, 404p.
72. 松村明編. 大辞林. 第3版, 2006, 三省堂, 2976p.
73. 三村敦美. シニア・サービス考: 「自己学習機能」の実践例を中心に. 現代の図書館. 2014, 52(3), p.137-148.
74. 溝上智恵子, 呑海沙織, 綿抜豊昭編著. 高齢社会につなぐ図書館の役割—高齢者の知的欲求と余暇を受け入れる試み. 第一版, 学文社, 2012, 168p.
75. 文部科学省. 諸外国の公共図書館に関する調査報告書 (2005).  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/tosho/houkoku/06082211/013.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/06082211/013.pdf) (参照 2018-08-10)
76. 文部科学省. 公立社会教育施設の所管の在り方等に関するワーキンググループにおける論点整理 (案) (2018).  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo2/012/attach/1406489.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/012/attach/1406489.htm) (参照 2018-08-17)
77. 文部科学省. 公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準 (2012).  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/dokusyo/hourei/cont\\_001/009.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/cont_001/009.htm) (参照 2018-08-21)
78. 山口源次郎. 図書館法第17条(無料制)の意義と解釈: 図書館専門委員会報告批判. 図書館界. 1999, 51(4), p.231-238.
79. 吉田右子, 川崎良孝. アビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究. 図書館界, 2009, 61(1), p.2-15.
80. 室谷牧子. 市民を活かす図書館、高齢化社会への期待: 熊取町のひまわりカフェ(認知症カフェ)の取り組みを通して. みんなの図書館, 2017, (484), p.2-11.
81. Brehm Heeger, Paula. A Tie for Third Place; Teens need physical spaces as well as virtual places. School Library Journal. 2006, 52(7), p.27.
82. International Federation of Library Associations and Institutions. Call for Papers for Satellite Meeting (2009). <https://www.ifla.org/past-wlic/2009/satellite-academic-call->

en.htm (参照 2016-11-29)

83. Lin Hui, Pang Natalie, Luyt Brendan. Is the library a third place for young people?.  
Journal of Librarianship and Information Science. 2015, 47(2), p.145-155.
84. Montgomery E. Susan, Miller Jonathan. The Third Place: The Library as Collaborative  
and Community Space in a Time of Fiscal Restraint. College & Undergraduate  
Libraries. 2011, 18(2-3), p.228-238.
85. Most. R. Linda. The Rural Public Library as place in North Florida: A Case Study. The  
Florida State University, 2009, Ph.D. thesis.
86. Oldenburg Ray. The Great Good Place. 3rd ed., Da Capo Press, 1999, 324p.
87. Wiegand A. Wayne. To Reposition a Research Agenda: What American Studies Can  
Teach the LIS Community About the Library in the Life of the User. The Library  
Quarterly, 2003, 73(4), p.369-382.
88. World Health Organization. Healthy life expectancy (HALE) Data by country.  
<http://apps.who.int/gho/data/view.main.HALEXv?lang=en> (参照 2018-06-14)
89. Yu Chiu-Yun, Ke Hao-Ren. A Study on the New Taipei City Library as a Third Place  
and the Perceived Outcome and Sense of Identity of Its Users. Proceedings of the 8th  
Asia-Pacific Conference on Library & Information Education and Practice, Bangkok,  
Thailand, 2017.
90. 吴建中. 作为第三空间的图书馆 (2009). <http://www.wujianzhong.name/?p=667> (参照  
2016-11-29)